北陸自動車道関連遺跡
発掘調査報告書
Ⅲ

1976

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

北陸自動車道関連遺跡
発掘調査報告書

III

滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

210.2
M
61

序

滋賀県教育委員会では、北陸自動車道の建設に先き立って、遺跡の発掘調査を昭和48年度より実施している。今日までその結果の一部については、すでに報告したところでありますが、このたび、昭和50年度に実施した黄牛塚古墳、中山古墳、上ノ山古墳群の発掘調査の結果を報告するはこびになりました。

遺跡の保存と開発との関係が大きな社会問題となっていながら、これの決定的な解決策を見いだすことのできない現在、各人の文化財に対する正しい認識が、将来必ずやこの問題を解決するものならば、これら遺跡の調査報告書がここに上梓されたことで、その認識の一助となれば幸いに思います。

最後に、発掘調査および整理業務等に日夜努力いただいた調査員の方々ならびに地元関係者に深謝いたします。

昭和51年3月

滋賀県教育委員会

教育長　柳原太郎

緒　　言

北陸自動車道関係遺跡の発掘調査としては、今年度は第３年次に当る。今年度においては、近江町顔戸所在の仏光寺遺跡及び黄牛塚古墳、長浜市小一条町中山古墳及び国友遺跡、余呉町坂口上ノ山古墳群の５遺跡の調査を実施した。これらのうち、仏光寺遺跡については、用地買収の状勢に応じ、一部の発掘を実施したにとどまり、残部については翌年度に再調査することとなった。また、中山古墳は、関連工事である土取り場から不時発見されたもので、緊急に調査を実施したものである。国友遺跡は現地の発掘調査が冬期に及ぶため、その整理、報告書の刊行については、翌年度実施することにした。

本報告書に所載した遺跡は、従って、黄牛塚・中山古墳と上ノ山古墳群で、いずれも古墳時代後期の横穴式石室を持つものであつた。黄牛塚・中山両古墳においては、玉類及び須恵器類の副葬品が検出され、さらに、須恵器において、ミニチュア様の小型品を納めるという類似した様相を呈しており、距離的にも近接しているところから、後期古墳の地域性を考える上に興味ある成果であった。また上ノ山古墳群では、１号墳から馬貝の出土があり、装身具のみ出土する中山・黄牛塚両古墳とは異り、被葬者の性格を知る上に新たな資料を提示した。

これら諸遺跡は、その保存と工事との調整が困難であって，いずれも、道路下に埋没するか、消滅するものであり、現状保存できなかったことは残念である。

なお、発掘調査及び整理作業には、京都産業大学考古学クラブの多数の学生の協力を得た他、京都教育大学ＯＢ米田和正氏、地元の方々には多大なご協力、ご助力を得ることができた。また、日本道路公団金沢建設局の藪内豊造氏、益田正邦氏、鈴木勝氏、広野満信氏、および、同局長浜工事事務所の串田義市氏および益田禎三氏には種々にわたたりお世話になった。明記して謝意を表します。

目　　次

序
緒　　言
第1章　黄牛塚古墳 …… 1
　1．位置と環境 …… 1
　2．調査経過 …… 4
　3．古墳の構造 …… 5
　4．遺　　物 …… 10
　5．考　　察 …… 20
第2章　中山古墳 …… 22
　1．位置と環境 …… 22
　2．調査経過 …… 22
　3．遺　　構 …… 24
　4．遺　　物 …… 25
　5．小　　結 …… 37
第3章　上ノ山古墳群 …… 38
　はじめに …… 38
　1．位　　置 …… 38
　2．歴史的環境 …… 38
　3．上ノ山古墳群 …… 39
　4．上ノ山1号墳 …… 42
　5．上ノ山2号墳 …… 50
　おわりに …… 53
第4章　大東遺跡 …… 59
　1．方形周溝墓 …… 59
　2．遺　　物 …… 61

3．小　　結 ……65
付　章　横山古墳群の意味するもの ……67

挿　図　目　次

図１　黄牛塚・中山古墳位置図…… 2
図２　黄牛塚古墳附近地形図…… 3
図３　黄牛塚古墳地形測量図…… 4
図４　黄牛塚古墳墳丘測量図（発掘後）…… 5
図５　黄牛塚古墳墳丘断面実測図…… 6・7
図６　黄牛塚古墳石室実測図…… 9
図７　黄牛塚古墳遺物出土状態…… 10
図８　黄牛塚古墳出土遺物実測図(1)…… 18
図９　黄牛塚古墳出土遺物実測図(2)…… 19
図10　中山古墳附近地形図…… 20
図11　中山古墳地形測量図…… 23
図12　中山古墳石室実測図…… 24
図13　中山古墳出土遺物実測図(1)…… 35
図14　中山古墳出土遺物実測図(2)…… 36
図15　上ノ山古墳群位置図…… 40
図16　上ノ山古墳群地形測量図…… 42
図17　上ノ山古墳群１号・２号墳墳形測量図…… 43
図18　上ノ山１号墳墳丘断面実測図…… 44・45
図19　上ノ山１号墳石室実測図…… 47
図20　上ノ山１号・２号墳出土遺物実測図…… 49
図21　上ノ山２号墳墳丘断面実測図…… 50
図22　上ノ山２号墳石室実測図…… 52
図23　湖北地方主要古墳出土須恵器杯身編年表…… 54
図24　上ノ山古墳群周辺遺跡出土遺物実測図（平野市介氏蔵）…… 55
図25　大東遺跡方形周溝墓実測図…… 60
図26　大東遺跡１号方形周溝墓出土遺物実測図…… 61
図27　大東遺跡２号方形周溝墓出土遺物実測図…… 62
図28　大東遺跡出土遺物実測図(1)…… 63
図29　大東遺跡出土遺物実測図(2)…… 65

図　版　目　次

図版一	黄牛塚古墳（遺構）	（上）古墳全景（発掘前、東より）	（下）古墳全景（発掘後、西より）
二	黄牛塚古墳（遺構）	（上）石室全景（東より）	（下）石室全景（西より）
三	黄牛塚古墳（遺構）	（上）石室全景（東より）	（下）閉塞石遺存状態（東より）
四	黄牛塚古墳（遺構）	（上）玄室奥壁	（下）玄室東南コーナー
五	黄牛塚古墳（遺構）	（上）玄室北東コーナー	（下）羨道入口南側列石
六	黄牛塚古墳（遺物）	（上）玄室内遺物出土状態	（下）玄室内遺物出土状態（東より）
七	黄牛塚古墳（遺物）	（上）玄室内遺物出土状態	（下）玄室内遺物出土状態
八	黄牛塚古墳（遺物）	（上）玄室内遺物出土状態	（下）玄室内遺物出土状態
九	黄牛塚古墳（遺物）		
十	黄牛塚古墳（遺物）		
十一	中山古墳（遺構）	（上）古墳全景（発掘前、東より）	（下）古墳全景（発掘後、東より）
十二	中山古墳（遺構）	（上）石室全景（東より）	（下）石室全景（南より）
十三	中山古墳（遺構）	（上）石室側壁（１）	（下）石室側壁（２）
十四	中山古墳（遺構）	（上）石室側壁（３）	（下）石室側壁（４）
十五	中山古墳（遺物）	（上）遺物出土状態（杯身・蓋・鉄環）	（下）遺物出土状態（杯）
十六	中山古墳（遺物）	（上）遺物出土状態（杯）	（下）遺物出土状態（杯・壺）
十七	中山古墳（遺物）	（上）遺物出土状態（玉類）	（下）遺物出土状態（金環）
十八	中山古墳（遺物）	須恵器杯身・蓋	
十九	中山古墳（遺物）	須恵器高杯・壺・瑟・提瓶	
二十	中山古墳（遺物）	（上）玉類	（下）金環・鉄環・玉・紡錘車・石鏃
二一	上ノ山古墳群（遺構）	（上）古墳群遠景（北より）	（下）１号・２号墳全景（東より）
二二	上ノ山古墳群（遺構）	（上）１号墳全景（南より）	（下）１号墳全景（東より）
二三	上ノ山古墳群（遺構）	（上）１号墳（発掘後、南より）	（下）１号墳石室全景（南より）
二四	上ノ山古墳群（遺構）	（上）１号墳石室全景（南西より）	（下）１号墳石室全景（南東より）
二五	上ノ山古墳群（遺構）	（上）１号墳石室近景（南より）	（下）１号墳石室近景（北より）
二六	上ノ山古墳群（遺構）	（上）１号墳玄室（東より）	（下）１号墳玄室（西より）
二七	上ノ山古墳群（遺構）	（上）１号墳玄室（南より）	（下）１号墳羨道（北より）
二八	上ノ山古墳群（遺構）	（上）１号墳羨道（東より）	（下）１号墳羨道（北より）
二九	上ノ山古墳群（遺構）	（上）１号墳玄室奥壁	（下）１号墳玄室奥壁近景
三十	上ノ山古墳群（遺構）	（上）１号墳玄室北西コーナー	（下）１号墳玄室北東コーナー
三一	上ノ山古墳群（遺構）	（上）１号墳玄室東壁北半部	（下）１号墳玄室東壁南半部
三二	上ノ山古墳群（遺構）	（上）１号墳玄室西壁北半部	（下）１号墳玄室西壁南半部
三三	上ノ山古墳群（遺構）	（上）１号墳羨道東壁	（下）１号墳羨道西壁
三四	上ノ山古墳群（遺物）	（上）１号墳遺物出土状態	（下）１号墳遺物出土状態
三五	上ノ山古墳群（遺構）	（上）２号墳全景（発掘前、南より）	（下）２号墳全景（発掘後、南より）

三六　上ノ山古墳群（遺構）（上）２号墳石室全景（南より）　（下）２号墳玄室石材抜取り状態（南より）

三七　上ノ山古墳群（遺物）　１号墳出土遺物

三八　上ノ山古墳群（遺物）　１号・２号墳出土遺物

三九　上ノ山古墳群　周辺遺跡出土遺物

四十　大東遺跡（遺構）（上）１号・２号方形周溝墓　（下）１号方形周溝墓（ＨＳＩ）

四一　大東遺跡（遺構）（上）２号方形周溝墓（ＨＳⅡ）　（下）Ｔ６柱穴内礎板出土状態

四二　大東遺跡（遺物）　２号方形周溝墓出土遺物

四三　大東遺跡（遺物）　１号方形周溝墓及びその他出土遺物

四四　大東遺跡（遺物）　その他出土遺物

例　　言

1　本書は、昭和50年度において滋賀県が日本道路公団金沢建設局からの委託を受けて実施した北陸自動車道関連遺跡の発掘調査報告である。

2　この調査は、滋賀県が財団法人滋賀県文化財保護協会（理事長　和田純一）に再委託したものであり、これについては滋賀県教育委員会事務局文化財保護課技師田中勝弘が担当し、指導した。

3　調査および整理業務参加者は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

技　　師	田中勝弘		
財団法人　滋賀県文化財保護協会			
技　　師	鬼柳　彰		
主任調査員	別所健二		
調　査　員	谷口義介		
調査補助員	重村　和	林　純	鈴木弘市
	神蔵朋子	上羽基之	川上真成
	垣村俊夫	藤村善嗣	阪口勝彦
	木村昌義	朝野明美	飯野清士
	原田雅裕	坂本清信	鈴木俊則
	芳村高史	三宅憲明	岡井　誠
	曽根秀夫	南部　基	北川利之
	宮南　称	藤原千晶	
事務担当	井上　剛	桑原栄子	鈴木美佐枝
	越久栄美	北川　修	

4　本書報文は、田中勝弘、鬼柳彰、別所健二、谷口義介がそれぞれ分担して執筆し、文末にそれぞれ文責を明示した。

第1章　黄牛塚古墳

1．位置と環境（図1・図2）

黄牛塚古墳は坂田郡近江町顔戸に所在し、その地は長浜市・近江町にかけて広がる長浜平野の東限に南北に連なる横山山陵の南西部の一画に当たる。すなわち、横山山陵がその南端で分枝した三本の尾根のうち、中央に当たる尾根のその支脈たる小尾根の北側山麓に存在するのである。

しかし、当古墳を含めて周辺の古墳も、行政区画としての近江町に所在するように、同じ横山に存する各古墳とは、また別の古代の地域政治共同体内の遺跡なのである。このことは自然環境上からも顕著であって、当古墳や他の周辺各古墳の位置する尾根あるいはデルタはいずれも湖北平野の南端を西流する天野川に臨んでおり、これらの諸遺跡が天野川水系に生産基盤をおいていた人達の足跡であることを如実に示しているのである。

さて、当黄牛塚古墳は顔戸集落の南はずれから東へ深く食い入る谷のほゞ最奥部の南側山裾に築造された独立墳であって、近在する式内社日撫神社の由緒記や顔戸近辺の民間において、後鳥羽上皇奉納の黄牛にまつわる塚として、長い間伝承上知られていた古墳である。当古墳は谷懐に抱かれている立地条件から視界は悪く、北・東・南はすべて山がせまり、まったく周辺への展望はきかない。わずかに西方のみ開けていて、田園地帯が遠く臨まれるが、これとても南北の山にはさまれて、その視界は広くない。

当古墳の地目は鬱蒼たる雑木林であるが、西及び北面の谷底には近世以来開墾された谷水田が見られる。

ところで、顔戸集落や隣村高溝など、かつての日撫村は南の息長村と共に、『和名抄』において坂田郡朝妻郷もしくは阿那郷と呼ばれていた地域に当たり、この地域が古代の雄族息長氏の本貫地と考えられており、古代においても要衝地であったらしく、古墳や歴史的な建造物には事欠くことはない。

まず西方 500mの同一谷口北側山腹には、能登瀬に鎮座する山津照神社とともに、息長宿祢王を祭神とする式内社日撫神社が存する。また、その日撫神社と谷をへだてた南側尾根上に帆立貝式古墳と径30mに及ぶ大円墳からなる後別当古墳群が顔戸集落並びにその南の三角洲地帯を見下しているのである。さらに、黄牛塚古墳の西南方に当る旧息長村近辺には、この地域でもっとも古い横穴式石室を有す山津照神社古墳や塚の越古墳、新庄古墳群等の地域首長系譜に連なる古墳が見られるのに対し、黄牛塚古墳北方の律令制下、阿那郷と考えられる地域には、布勢古墳や一昨年発掘調査せられた諸頭山古墳群、或は今回緊急調査された中山古墳等の古代阿那郷を支えた集落の有力家系の古墳が点在しているのである。

ただ上記した近江町内の諸古墳を造営した古代人の住居址の調査研究はまったくなく、集落と墳墓の総合的研究を停滞たらしめていて、今後の調査研究の進展が待たれるが、ただ黄牛塚古墳の北西、顔戸集落と高溝集落に弥生時代から古墳時代に及ぶ集落址が存在することが判明していることを付け加えておく。（別所健二）

①茶臼山遺跡　②長屋敷ー　③オキサキ山ー　④垣籠ー　⑤西塚　⑥福の神　⑦越前塚ー　⑧上薗塚　⑨布勢
⑩中山　⑪諸頭山　⑫三の宮塚　⑬舟崎山　⑭人塚山　⑮黄手塚　⑯後別当(仮称)　⑰新庄　⑱塚の越
⑲能登勢(仮称)　⑳山津照　㉑磯崎　㉓広姫陵附属地　㉓村居田(伝息長広姫陵)　㉔唐古塚ー　㉕瓢箪山ー

図1　黄牛塚・中山古墳位置図

〈付　記〉

黄牛塚古墳の名称は、黄牛（おぎゅう）塚という小字名から取っているが、この塚の由来について、地元にひとつの伝説が残されている。後鳥羽院が名越へ潜幸のみぎり、日撫神社に参拝して角力の見物をしたが、そのおり黄毛の牛を一頭奉納した。その牛が百余歳の長寿を保ったのち死んだので塚に祀り、ここから黄牛塚の名が起った、というのである。このたびの発掘調査中、地元の古老が見学に来ると決って、牛の骨はまだ出ぬか、とたずねるのが常であった。この伝説は、日撫神社と密接な関係があるらしく、同神社所蔵の『日撫大明神謂実縁記』、『神事由来記』、「神宮寺最期状」などにも、均しく誌されている。

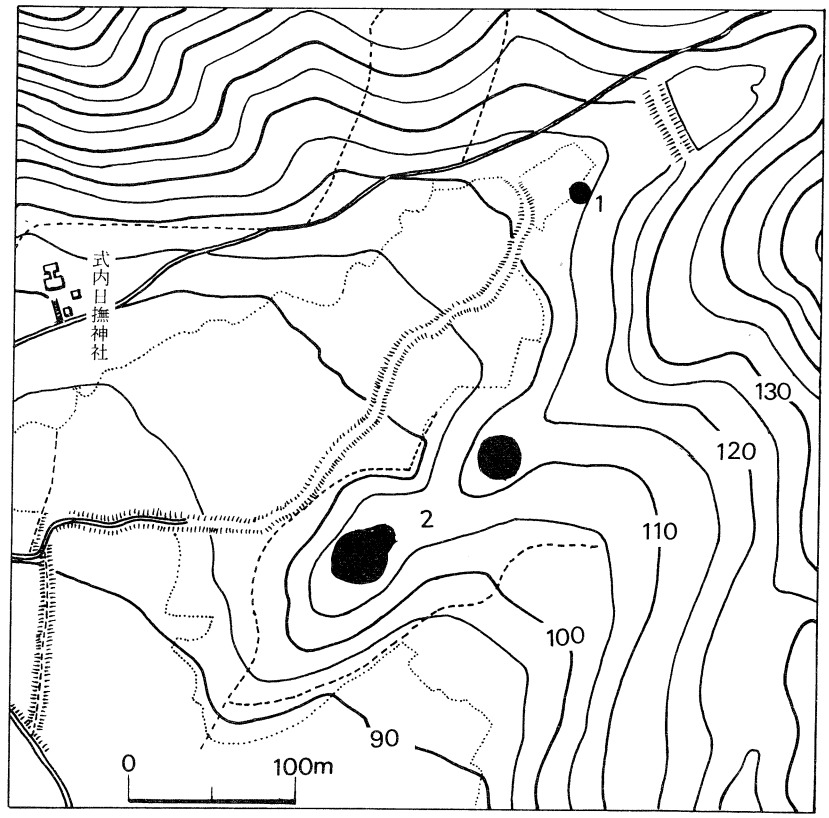


図２　黄牛塚古墳附近地形図（１．黄牛塚古墳　２．後別当古墳群）

ところで、『近江国坂田郡志』はこの伝説を疑い、黄牛塚の小字名は別に王丘塚とも書くので、黄牛はほんらい王丘が正しく、古の某王の墳墓が「王丘」の名として残ったのであり、後鳥羽院と黄牛塚の伝説は後人の附会にすぎない、と断じている。たしかに古墳を称して王塚とか大人塚と名づける例は各地に多くみられる。しかし地元の人にたずねてみると「王丘」とは書かぬ由、また明治７年５月の「近江国坂田郡顔戸村地券取調総絵図」、同８年の「地券野取帳」、同22年の地籍図を調べても、明らかに黄牛塚と記して、王牛塚とはなっていない。坂田郡内には別に王塚なる塚もあり、それなどに基づいて『坂田郡志』は、黄牛塚を王丘塚に読みかえたのではなかろうか。しかし、黄牛塚に牛の骨は埋められておらず、７世紀前後の円墳であることは、今回の発掘調査の結果明らかになったので、結論としては『坂田郡志』の説は正しかったと認めなければならない。それゆえいわゆる黄牛塚伝説なるものは、後人の附会ということになろう。

しかしながら問題は、そのような伝説がどのようにして起ってきたかという点にある。黄牛塚伝説について民俗学的な観点から書くべきことも多いが、ここはその場ではない。たゞ次の柳田国男の言葉を掲げるにとどめる。

「古墳を重要なものと視て、之に注意を払う考古学者の一派に、古墳が築かれてから今日に至る迄の、民俗上の変化を無視した研究の仕方をして居るものがありはしないか。」――「民俗学上に於ける塚の価値」（『定本』第12巻所収）

（谷口義介）

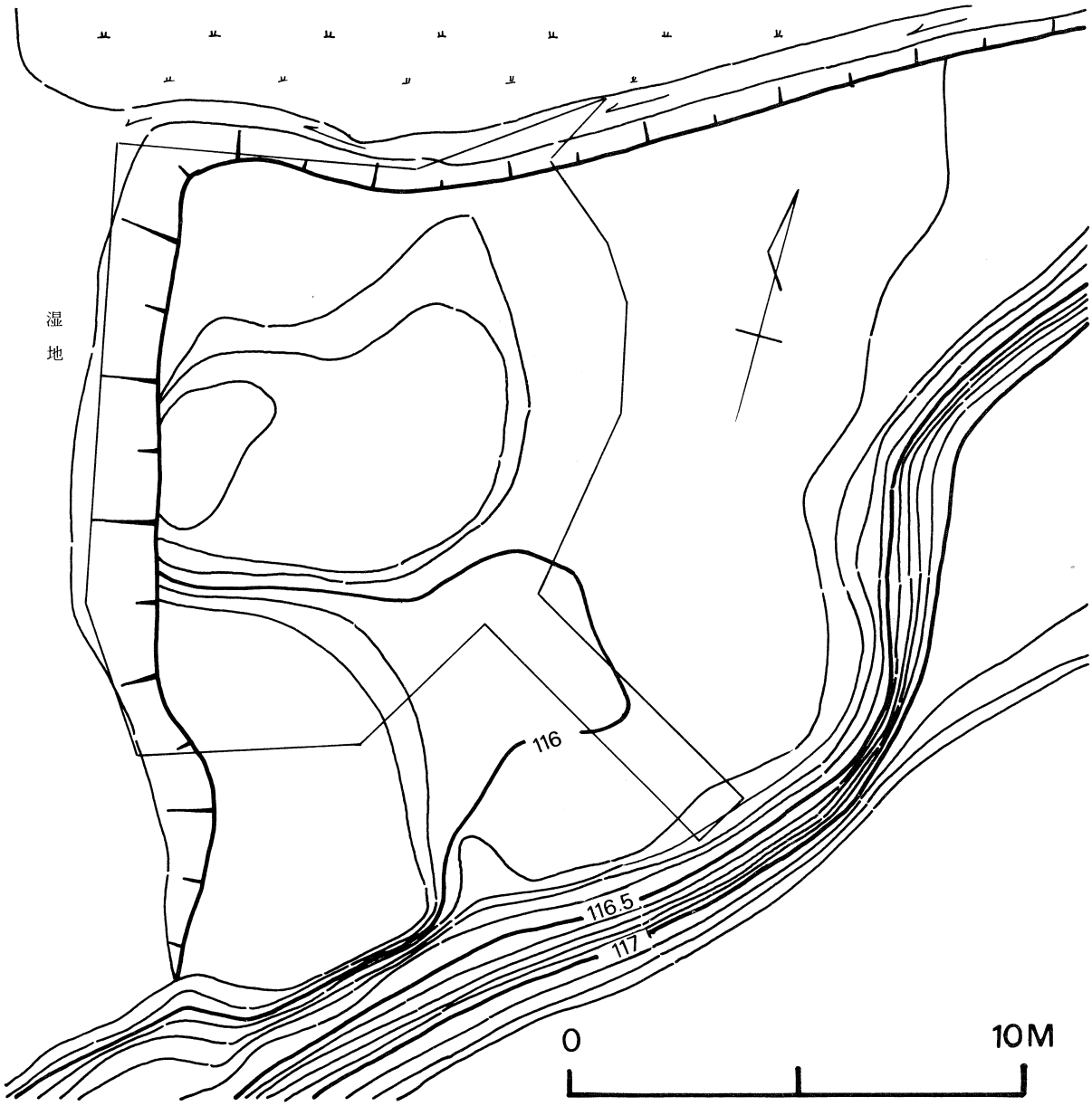


図3　黄牛塚古墳地形測量図

2. 調　査　経　過

『発掘日誌』抄

7月2日。平板にて地形測量。マウンドはほとんど流失もしくは削平。南～東の$\frac{1}{3}$のみ若干の盛り上りを残す。北・西は開田のさい切断されたという。

7月5日。マウンド中央に幅 1.5mのトレンチ設定。南々西一西北西方向。西北側の半分、こぶし大の礫石20cmほど積る。

7月7日。トレンチ内、礫石を除去。その下は腐葉土。同層より須恵器片はじめて出土。

7月16日。トレンチ掘り下げ継続。大石出はじめて対向。石室の両側壁と推測。

7月17日。奥壁 1.3m、側壁7m余の長方形石室顕現。天井石なく、石室内に礫石多くつまる。

7月19日。石室内、礫石・埋土除去。左側壁にわずかに袖部を認む。石室は玄室・羨道に分る。玄室内と右側壁附近に須恵器平瓶を発見。

7月21日。左袖部より坏・蓋・高坏・横瓶・鐙など完形のまゝ続々出土。玄室奥より勾玉（メノウ）1点。写真撮影、実測、レベル記入。

7月22日。玄室奥壁近く、勾玉（メノウ）さらに1点。土師器2個。棺台らしき角石も検出。羨道部に閉塞。

7月24日。玄室内、礫・土砂除去。床面は砂利・粘土層か。マウンド南・北側、裾部を顕出。

7月26日。左袖部の落石除去。その下より須恵器20点余出土。坏・蓋・高坏・鐙・平瓶など。

7月28日。開口部の右側から背後へと、墳裾をさぐって堀り下げ。列石あり、マウンド円周に沿う。

8月2日。開口部左側、墳裾をさぐる。外護列石検出。右側に同じ。

8月6日。羨道部の落石、チェーンブロックで搬出。閉塞の前後を掘り下げ。玄室寄りに平瓶、高坏、開口部に高台つき坏破片検出。写真撮影、平面実測、レベル記入など。

8月12日。封土の層序観察のため、トレンチ3方向に設定。玄室の左・右側壁、奥壁からそれぞれ外方に。

8月19日。トレンチ堀り、地山まで達して完了。

8月20～9月10日。写真撮影、立面図、見通し図、断面、平面実測図、平板測量など。

9月12日。黄牛塚周辺の古墳の分布調査。

9月13日。調査すべて完了。事務所に撤収。　（谷口義介）

3. 古墳の構造

1）墳　　丘（図3～5）

当古墳は既述のとおり、山裾に立地するため、古墳築成の第一段階として、石室構築以前に基盤整備を行っている。すなわち、まず東西10m，南北11.2m以上、深さ1.4mにわたって鍵形に原地形をカットし、そのうえに石室幅だけ更に30cmほど堀下げることによって、平坦な地盤を整備したのである。この削平は当然、北側斜面山裾という自然条件に規制せられて、南から北の方向へ掘込まれたものと判断しうる。

なお、発掘以前の地形測量図でも明らかなごとく、当古墳の東部と南部に墳丘の円周に沿った平坦面が見られ、一見したところ周濠とも思われたので、南北トレンチを延長して調査したが、表土直下に地山が平坦に横たわっおり、周濠等の掘込みとは見られなかった。いま、その性格が把握しがたく一見したところ、墳丘円周に沿って

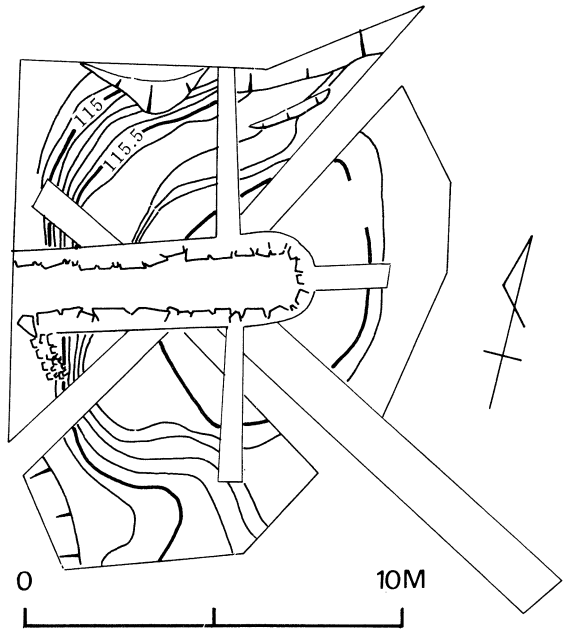


図4　黄牛塚古墳墳丘測量図（発掘後）

おり、古墳築造時の土取り等の痕跡とも考えられるが、当古墳周辺には、後代の開墾・山林整地による人工地形が随所で見られ、前掲の円形平坦地も、これによるものとも予想される。

次に墳丘封土についてであるが、掲載した地形測量図でも明らかなように、調査以前には扇形の僅かな盛りあがりだけが見られたので、これを古墳の墳丘封土と推定しても、南東部4分の1区画にすぎず、主体部とともに他の三区画分に相当する北東・北西・南西部の盛土は破壊削平されて、まったく遺存していないものと予想していた。また唯一の残された南東部に当たる盛土も、盛土上の集石状況から、その遺存度はきわめて悪く、ほとんど基底部に当たるものしか残っていないと推測していた。

しかし、結果は主体部の遺存とともに、盛土積上げ過程を推測しうる良好なマウンドが残されていたのであった。

次に墳丘の三方に穿った各トレンチの断面から、封土の築成過程を検討してみると、石室の構築と封土の積上げは、別々に進められたものではなくて、非常に密接な関連の下に、平行して行なわれた模様である。

既述のとおりの基盤構築の後、まず奥壁で2石、側壁で3石を積みあげ、地山掘下げ部と石材との空隙を、茶褐色粘土または黄褐色粘土一層で充塡している。しかし、北側墳丘では地山掘下げが浅いため、これに先行して、赤褐色粘土層を地山上に盛土しており、黄褐色粘土はこの後、石材と赤褐色粘土の盛土によって生じた60cm余の凹所を埋めているのである。ここまでが、墳丘築成の第一段階で、いずれの盛土も水平に積まれており、石材後方の固めとそれの準備以外の何ものでもなく、墳形を呈しない。

以後の盛土は三方とも僅かづつ異っている。左側壁側では石材の背後裏込めに際して、壁となる地山がないため、後方に盛土しては、凹部を造成し、その後黄褐色粘土をつきかためて、石材の裏込めを行う、この基本的な盛土法を小きざみに交互に繰返し、少しづつ墳丘を盛上げ、最後に褐色粘土で天井石を覆い墳形を整えたものと考えられる。

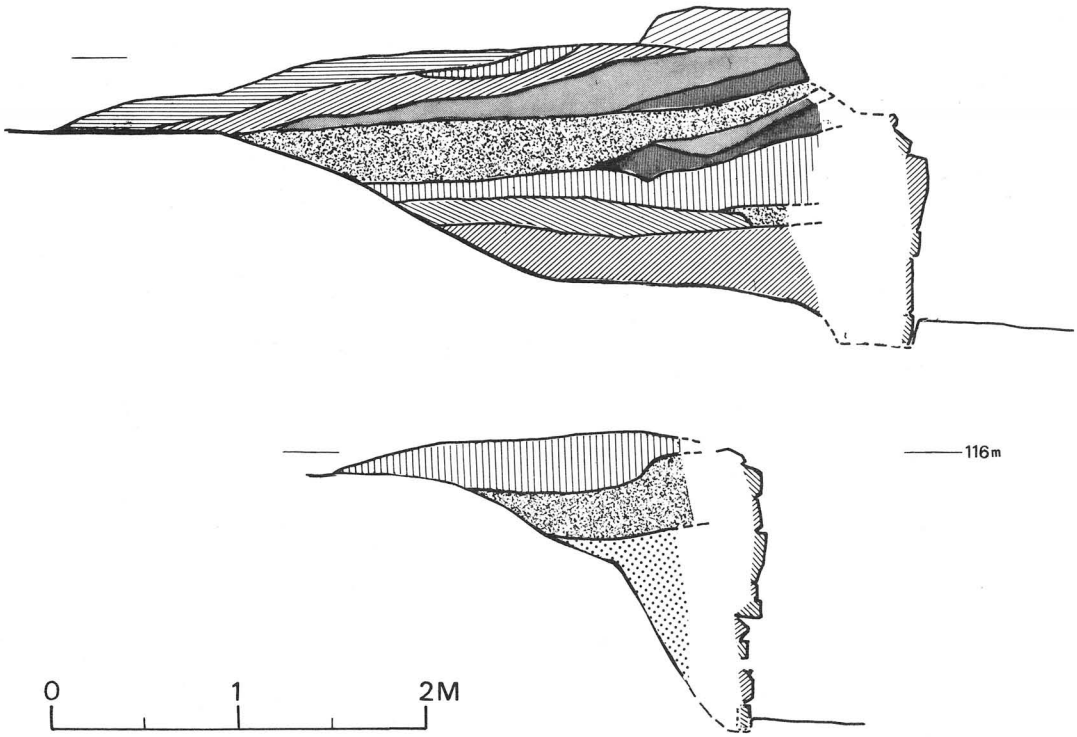


図5　黄牛塚古墳墳丘断面実測図

これに比べて、右側壁では最下層の上に灰黒色粘土を積み、これと石材との間を黒褐色粘土を充填するだけで、これより上層では裏込めに相当するものはなく、以後石材と掘込み肩部までの空隙を石室方向へ高く盛上げては、墳形を序々に形づくり、最後に褐色粘土で天井石を覆い、墳形を整えている。

また奥壁側では、奥壁石材を掘込みいっぱいに積上げているため、その墳丘築成は非常に簡単で、第一段階の盛土の他には、黒褐色粘土層と褐色粘土層しか見られない。黒褐色粘土層は掘込み肩部と石材との間の空隙の充塡土であり、褐色粘土は天井石を覆う最後の封土と考えられる。

以上の遺存していた盛土はいうまでもなく、相当な削平を受け、旧状をとどめないが、残存する盛土の傾斜角・推定石室の高さ等から、石室基底石より２ｍは存したものと推定される。また、残存する墳丘径は約11ｍを計るが、元来これに近い規模を有したものと思考される。

2） 石　　室 （図６）

内部主体は横穴石室ではあったが、後代の盗掘か石材抜き取りのため、天井石及び側壁の上部は遺存していなかったものの、ほゞ旧状を知りうると判断された。

石室はほゞ西方向に開口しており、主軸はおよそW17°S−E17°Nを計る。石室の平面形態は、一応左片袖と解釈したが、右側壁の袖石に該当する石材は、左の袖石同様縦位にすえられており、その前後の石材の置き方とは明瞭な相違が見られることは注目すべきである。すなわち、この立石を境界に、石室は東側を玄室、西側を羨道にと判然とわかたれていたものと推察される。

まず、玄室は奥壁に接する部分で1.34ｍ、中央部で 1.5ｍ、入口部で 1.4ｍの幅を計測し、一方玄室長4.21ｍ

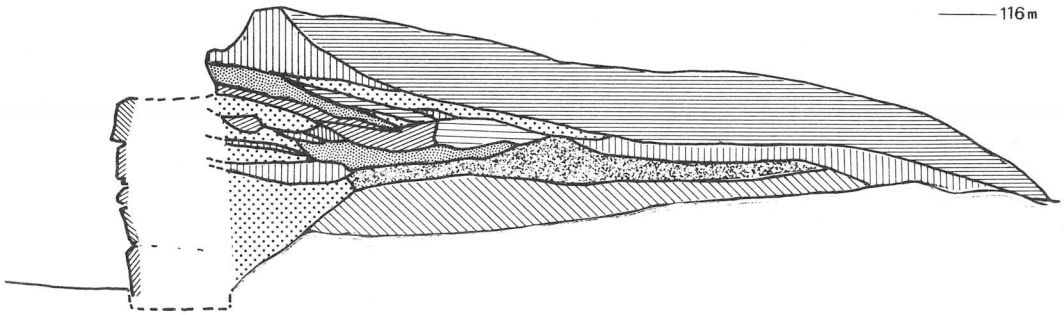


表　土
褐色粘土
茶褐色粘土
黄褐色粘土
褐色粘土含礫
茶褐色粘土含礫
黄色粘土
黒色粘土含礫
黒褐色粘土含礫
灰黒色粘土砂利混入
灰黒色粘土
赤褐色粘土含礫
黄白色粘土

を計測しえた。やゝ中ぶくらみのいわゆる長方形プランの石室であった。また左袖部は二石によって築成されていて、幅24cmを測った。

玄室の高さは、天井石並びに側壁上段の石材の欠損から明らかにできない。しかし現状では奥壁部が3段で1.5m、右側壁部では4段1.3m、左側壁部は5段で1.1m残存しており、奥壁がほぼ旧規を残すものと考えられるので、旧規の玄室高は 1.5m余はあったと思われるが、後でのべるように、石室床面は基底面より約10cm高く、したがって玄室復原高は約 1.4mであったと推測できる。

羨道部は、墳丘西側が開墾に伴う削平を受けているため、旧規模を留めていないとも考えられたが、右側壁最西端から墳丘南側に連続する外護列石が存在したので、羨道の長さは 3.3mを計測しえた。これに対して、その幅は、玄室との境界点で1.15m、入口部で 1.3mを有し、やや開口部に向って広がるものであった。

石室の築造は、奥壁，両側壁の基底石設置幅だけ床面より、さらに約10cmをほゞ均一に堀下げたあと、奥壁，両側壁の最奥部石材，袖石等の最下段がまず置かれ、以後両側壁の間隙部の石材が順次設置されたものと解される。

石積法を推測すれば、一段目（基底石）は奥壁，左側壁最奥部の石材，左袖石及び右側壁の袖部該当石材ほか2石が縦位に置かれており、左側壁の奥壁コーナーの石材は横積ではあるが巨石を使用している。その他の最下段の石材及び上段の石材は原則的に横積みであり、中に小口積も見られる。また、右側壁に比較して、左側壁は全体的に小ぶりで、残存石が5段につまれている個所もある。さらに、玄室の石材に対して羨道の石材の方が大きいことが判然としている。

持送りは、二段目まではほゞ垂直に積上げているが、三段目から巨石を積上げており、わずかに持ち送られた模様であるが、両側壁とも、そのせり出し幅は20cmにも満たなかったものと思われ、ほとんど直立した側壁を構成していたと考えられる。なお、これらの石室構築に使用された石材は、横山丘陵の地盤であるチャートの割石であった。

石室内部の敷設として、棺台，土壇，閉塞石等が見られ、きわめて注目される。棺台と思われる石列は奥壁前面と玄室中央部の2個所に、石室幅いっぱいに組まれていた。両石列の右側壁の石材は側壁内に食い込んでおり、両石列が側壁構築以前に並らべられたことを推測させる。両石列間の長さは、右側壁で1.7m、左側壁で1.4mであり、高さは10～20cmを測るが、奥壁前面の方が床面と平行して棺台もわずかに高くなっている。

奥壁から第一石列までの間、幅40～60cmの床面は玄室部に比して、最大10cm前後高く、土壇を築いたものと思われるが、状況からして基盤築成時にあらかじめ予定して掘られたものであろう。事実、土壇は南側から北側へゆるやかに傾斜している。

以上の二つの内部敷設は特異なもので、石室内部の空間区分を明瞭に意識した、本古墳築造時の当初から綿密な設計の下に設けられたものであり、被葬者の遺体安置と儀礼に係わる重要な付設物である。

一方、羨道入口よりやゝ玄室よりに積まれた閉塞石は非常に粗雑なものであり、約20cm角の塊石を高さ80cm程に荒く積んでいる。しかし、閉塞石最下段の石は玄室床面よりも35cm高く、床面より浮上っており、一見して当初からの敷設物でないことが判明した。また閉塞石下には木炭層と灰褐色粘土層が確認されたが、木炭層は幅105cm、厚さ6～10cmにわたって、堅く敷きつめられていて、閉塞石付設に伴ったものと判断される。つまり、この閉塞石は床面に散乱していた石材が落込み、灰褐色粘土層が堆積したのち設けられた、後代の敷設物であることが推定され、その時期は、羨道部入口部の浮土中より出土した高台付きの坏身から7世紀末～8世紀初頭が一応考えられる。

なお、墳丘上の敷設として外護列石が存した。右側壁西端の二石の裏から墳丘南側へまわっているもので、上

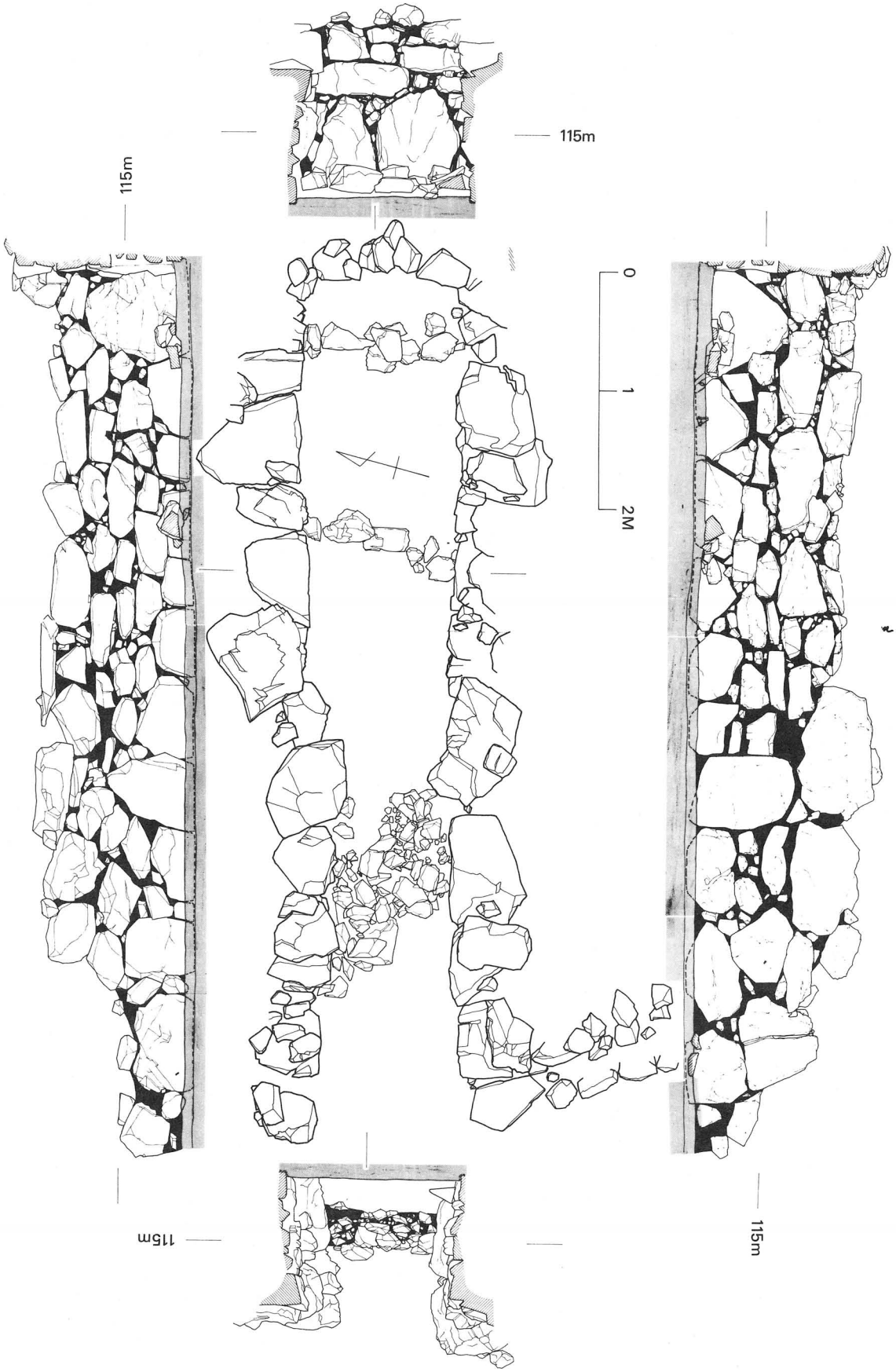


図6　黄牛塚古墳石室実測図

下二段に組まれている。が、墳丘裾を区画してめぐっていたというよりも、墳丘斜面に組まれており、南側へまわるにしたがって、より高所へ置かれている。

4） 遺物の出土状況 （図７）

当古墳に伴うものと判断せられる遺物は須恵器43点、土師器２点、勾玉２点、鉄製品等があげられるが、羨道より出土した坏身一点の他は、すべて玄室及び玄室入口附近より出土した。

出土遺物のうち、埋葬時の原位置をとどめていると考えられるものは、土壇上より検出された土師器二点がまずあげられる。二点とも口を上に向けて置かれており、被葬者に供献された祭器的性格が濃く感ぜられるものである。

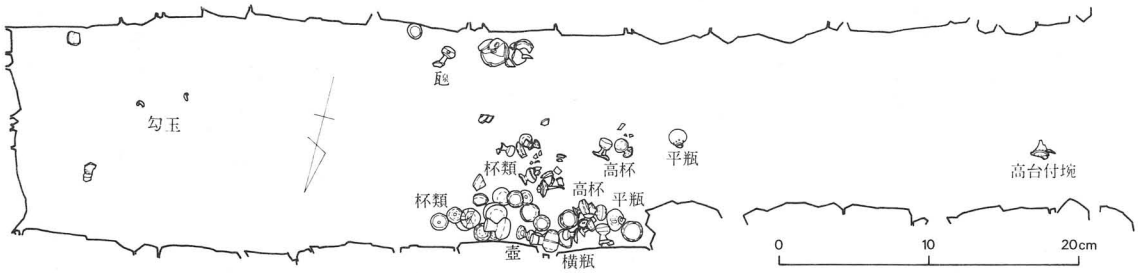


図７　黄牛塚古墳遺物出土状態

次に、棺台第２石列南に右側壁に沿って置かれた坏身，瓿，平瓶が指摘できる。いずれも追葬時の被葬者に伴うものであると考えられる。

左側壁沿いには横瓶，杯他多量の須恵器が重なりあって出土を見たが、それらは新旧二期にわたる遺物であり、追葬時にかき集められた遺物群とも推測される。

また、玄室前半部中央付近より羨道にかけて、主軸に平行して検出された瓿他５点の遺物がある。これらはいずれもミニチュア風の小型品で一時期のものであり、あるいは最後の被葬者に伴うものとも考えられる。

なお、羨道入口の高台付きの杯身は、床面より上の浮土の中から出土したもので、既に述べたように閉塞敷設築造に伴った遺物と判断された。

（別所健二）

4．遺　　物（図８・図９）

Ｉ）須恵器・土師器

黄牛塚古墳からは、須恵器42個、土師器２個、総計44個の出土をみた。土器の形態上の特徴,技法上の特徴およびその他の留意点については、後掲の説明表に詳しく記しておいたので、参照されたい。以下には全体的な特徴と推移を述べ、あわせて実年代の推定を試みておきたい。

坏　坏の身〔Ａ〕は計11個出土したが、大別して３類に分けられる。

(イ)矮小化した立ち上りと受部をもち、立ち上りの内傾度が著しい。底部は丸味をおびる。口径は平均11.0cmを測って、小型。９個。

(ロ)立ち上りが消滅し、口縁部は長くほゞ直立する。口径10.6cmと小型だが、器高は 4.7cmを測って、底部が深い。〔Ａ－10〕の１個のみ。

(ハ)口径15.7cmと大型で、高台が体部の直下に、わずかに外方に張ってつく。体部はつよく外反しつつ立ち上る。

形態からいって８世紀代のものとみられ、(イ)(ロ)とは 100年余の時間的な距たりがある。羨道開口部よりたゞ１個出土した点からも、(イ)(ロ)とは異って副葬品とは考えられず、例外的に扱う必要がある。〔Ａ－11〕。

蓋　坏の蓋〔A′〕も11個出土し、２類に大別できる。

(A)天井部は丸く、口縁部は外下方に開く。３点出土したうちの１個〔A′－１〕が〔A－５〕と一対をなすので、蓋(A)は坏(イ)と対応する。

(B)天井頂部に中央のくぼむつまみをもち、口縁部近くの内面にかえりをもつ。すなわちつまみをとれば、坏(イ)を倒さにした形になる。８点出土したが、その中の〔A′－４〕が〔A－10〕と一対をなす。つまり蓋(A)は坏(ロ)と対応する。〔A′－４～11〕の計８個。

坏の小型化の傾向は６世紀末に特に著るしく、蓋がつまみやかえりをもちはじめるのは、７世紀前半のことである。したがって坏(イ)・蓋(A)の段階は６世紀末に、坏(ロ)・蓋(b)の段階は７世紀前半に位置づけられよう。たゞ天井頂部のつまみは、陶邑窯などでは擬宝珠形が初現であるのに対し、蓋(b)のものは逆に中央のくぼんだ形を示している。７世紀前葉に比定される湖東の孤栗Ａ２号墳においても、つまみ中央のくぼんだ小型蓋が１点みられる。特殊なタイプとして注目しておきたい。

高坏　高坏〔Ｂ〕は大、小あわせて８個出土している。有蓋長脚二段透しのもの２個〔Ｂ－2･3〕、それよりやや小型の無蓋長脚二段透しのもの１個〔Ｂ－１〕、ミニサイズの二段透し高坏〔Ｂ－4･5〕と一段透しのもの〔Ｂ－6･7･8〕である。有蓋長脚の高坏には長方形の二段透しを３方にあけるもの〔Ｂ－２〕と、２方にあけるもの〔Ｂ－３〕があるが、共に６世紀中頃の長脚二段透しの後をうける形とみてよい。無蓋長脚二段透しの高坏も、６世紀末の段階に比定しておきたい。ミニサイズの高坏は、口径９～10cm、器高４cm平均を測る。二段透しのものは、坏体部の中ほどにつまみ出し突帯を付し、一段透しのものには同箇所に平行凹線がめぐるが、坏部の形自体は坏〔Ａ－10〕と同一である。つまり小型の高坏は、坏〔Ａ－10〕に脚をとり付けた形であって、５点とも坏(ロ)の段階（７世紀前半）に位置づけられよう。

鼓　鼓〔Ｃ〕は５点の出土をみたが、これも大・小の２類に大別しうる。口径12cm、器高15cm平均を測る大型の鼓〔Ｃ－1･2〕は、口頸部の発達に特徴があり、形態からみて６世紀末の段階に属すことができる。〔Ｃ－3･4･5〕は、口径 9.5cm、器高11cm平均と小型であるが、形態としては〔Ｃ－1･2〕と変りはない。

直口壺　直口壺〔Ｄ－１〕はたゞ１個出土した。体部はほゞ球形で、口頸部は長く、外上方に直線的にのびる。この器形のものは、陶邑窯では６世紀中頃以降急速に減少するといわれるが、当古墳のばあい６世紀末までの存続は認めてよいであろう。

台付直口壺　台付直口壺〔Ｅ〕は、大・小２点の出土をみた。〔Ｅ－１〕は器高21cm、楕円気味の体部に、先端に至って内彎する長い口頸部と、長方形透しを３方にあける台脚部がつく。〔Ｅ－２〕は器高12cmを測って小型、肩部に刻目文帯を付し、脚柱部に小円孔を穿っている。形態からみて〔Ｅ－１〕を６世紀末に、〔Ｅ－２〕はそれに後続する段階に比定できよう。

平瓶　平瓶〔Ｆ〕は３点出土したが、これも大・小の２類に分けられる。〔Ｆ－１〕は体部最大径18.4cm、〔Ｆ－２〕は同じく14.8cmを測り、ともに背に環状の把手を付ける。これに対して〔Ｆ－３〕は体部最大径が11.9cmと小型で、口頸をめぐって円型の粘土粒を５個貼付する。平瓶は陶邑窯では６世紀末に初現するとされるが、〔Ｆ－1･2〕を６世紀末に、〔Ｆ－３〕を７世紀前半に位置づけたい。なお近傍の諸頭山２号墳から出土した平瓶（8･9）は、背に１個のボタン状突起をつけ、両者の間に入るとみてよい。

横瓶　横瓶〔Ｇ－１〕はたゞ１点の出土をみた。正面からみると体部は均斉な楕円形で、細長く次第に外反す

る口頸部を付ける。陶邑窯では、この器形は6世紀末以降減少するといわれる。やはり〔G－1〕も6世紀末のものとみなされよう。

II）土　師　器

壺〔H－1〕と埦〔I－1〕の2点出土している。壺は、球形の体部に、短く外反する口縁部がつく。埦は、丸い底部から体部が垂直にのび、口縁部はわずかに外反して、丸い先端に至る。ともに玄室奥壁前より、定置した状態のまま出土している。供献したものと思われる。

以上、坏（身・蓋）の推移、器形の消長をもとにして考えると、当古墳の須恵器は2群に大別でき、その2群はそれぞれ6世紀末と7世紀前半の2期に比定しうると思われる。したがって黄牛塚古墳は2次にわたって埋葬されたことになろう。また、開口部から出土した高台付の坏は8世紀代のものとみられ、第2次埋葬が終って後100年ほど経て最終的に閉塞したさい、残されたものと思われる。

なお、当古墳出土の須恵器について特に注目さるべきは、全搬的な小型化の傾向であって、それは坏、蓋のみでなく、高坏、鼎、台付直口壺、平瓶などの器種にも及んでいる。同様な傾向は、後述する当古墳近傍の中山古墳出土の須恵器にも認められ、同じく7世紀前半代に比定される。大津市坂本穴太町の飼込古墳出土のミニチュア炊飯具などとは無関係と思われるが、上記両古墳にみられる小型須恵器について、博雅の士のご教示を賜われば幸甚である。

Ⅲ）勾玉・鉄製品

勾玉　勾玉は2顆、玄室奥壁附近より出土した。石材は瑪瑙で、飴色を呈し、稜の磨消しは十分でない。

鉄製品　釘および刀子と思われる鉄製品が各1点ずつ出土した。ともに破片で、腐蝕も甚だしく、詳細は明らかでない。

（谷口義介）

参　考　文　献

田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ。

滋賀県教育委員会『甲賀郡甲西町狐栗古墳群調査概要』(1968.3)。

田中勝弘「諸頭山古墳群の発掘調査」（『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ)。

黄牛塚古墳出土須恵器説明表　（付、土師器）

図版No.	器形	土器No.	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴
8	坏（身）	A－1	＊口径 9.0cmと特に小型。 ＊立ち上りは、初めつよく内傾し、口端部に近く外上方にそれ、先端は鋭く収める。 ＊受部はやや長く、水平に外にのび、先端は丸い。 ＊体、底部は丸味をおびる。	＊底部はヘラ削りで、方向は時計逆まわり。	＊胎土は良好。 ＊焼成はなま焼け。 ＊色調は灰白色。 ＊羨道部、木炭層より出土。
8	坏（身）	A－2	＊立ち上りはつよく内傾し、高さ 0.5cm、先端は鋭い。 ＊受部はほぼ水平に外にのび、先端は丸い。 ＊口径は、10.9cm。 ＊受部先端と体部の境はつよく内屈して、凹線がめぐる状をなす。 ＊体、底部は丸く収める。 ＊底部内面中央のふくらみは気泡か。	＊底部はヘラ削り調整。方向は時計逆まわり。	＊胎土は石粒を多く混入。 ＊焼成は堅緻。重ね焼きのさいの破片が、体部に付着。 ＊色調は内部は灰青色、外表は自然釉で緑青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
8	坏（身）	A－3	＊立ち上りは矮小化し、高さ 0.7cmを測る。 ＊口径は、11.4cm。 ＊受部はやや外上方にのび、受部、口縁の先端は共に丸い。 ＊体、底部は丸く収める。	＊底部のヘラ切りは粗く、底部内面中央には仕上げナデを施さない。	＊胎土は、わずかに石粒混入。 ＊焼成は良好。 ＊色調は淡い灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
8	坏（身）	A－4	＊立ち上りは内傾度が著しく、高さは 7.0cm、先端はやや鋭く収める。 ＊受部は、ほぼ水平に外にのびる。 ＊口径は、11.3cm。	＊内面の横ナデは丁寧。	＊胎土は、わずかに石粒混入。 ＊焼成は良好。 ＊色調は淡い灰青色。 ＊玄室内、左袖部、および玄室・羨道間より出土。
8	坏（身）	A－5	＊立ち上りは、やや反り気味に内傾し高さ 0.7cmを測る。 ＊口径は11.2cm。 ＊受部はほぼ水平に外方にのび、先端は鋭い。 ＊受部先端と体部の境はわずかに内屈し、体部は丸味をおびる。	＊体部・口縁部、および内面は横ナデ調整。	＊胎土は良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。 〔A′－1〕蓋とセット。
8	坏（身）	A－6	＊立ち上りは、内傾度が著しく、高さは受部上面から 0.6cmを測る。 ＊受部は短く、外上方にのび、先端は丸く収める。 ＊口径10.2cm。 ＊体部はやや丸味をおび、底部は扁平をなす。	＊底部はヘラ削りせず、中央部のヘラ切りは粗い。	＊胎土は精良。 ＊焼成は良好。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
8	坏（身）	A－7	＊立ち上りは、初めつよく内傾し、中ほどから外上方にそれる。 ＊先端は鋭い。 ＊受部は、立ち上りとの境に浅いV字溝をめぐらし、やや外上方にのびる。 ＊受部先端から体部にかけてつよく内屈し、体・底部は丸く収める。 ＊口径11.1cm。	＊底部内面中央に仕上げナデ。	＊胎土に石粒混入。 ＊焼成は堅緻。重ね焼きのさいの破片が底部と口縁部に付着。 ＊色調は内部は淡い灰青色、外表の体・底部に淡緑色の自然釉。 ＊玄室内、左袖部より出土。
8	坏（身）	A－8	＊口縁部・底部に著しい歪みを生ずる。 ＊立ち上りは矮小化し、甚だ内傾、高さ 0.5cmを測る。 ＊口径は、11.2cm。 ＊先端は、口縁部・受部とも丸い。	＊内面底部に粘土紐のまき上げ痕をそのまま残し、未調整。	＊胎土に石粒多く混入。 ＊焼成は焼きひずみを生ず。 ＊色調は暗い灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。

8	坏（身）	A－9	＊立ち上りは、はじめ内傾部が甚しく、中ほどから角度を上向きにかえる。 ＊受部は短く、わずかに上方にのびる。 ＊体・底部は丸味をおびる。 ＊口径は、11.4cm。	＊底部中央のヘラ切りは粗雑。 ＊体部・口縁部および内面は横ナデ。	＊胎土は良。わずかに石粒混入。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
8	坏（身）	A－10	＊口径10.6cm。器高 4.7cmと底部はことに深い。 ＊口縁部は長く、やや外方に開きつつ立ち上り、先端は丸く収める。 ＊底部はゆるやかに丸味をおびる。	＊内外面とも丁寧に横ナデ調整。	＊胎土はわずかに石粒混入。 ＊焼成はなま焼け。 ＊色調は灰白色。 ＊玄室前部、右側壁附近より出土。 ＊〔A′－4〕蓋とセット。
8	坏（身）	A－11	＊口径15.7cm、器高 4.3cmと大型。 ＊体部はつよく外反しつつ立ち上り、口縁先端は丸く収める。 ＊底部と体部の内面境界は丸く屈曲する。 ＊高台は体部の直下に、わずかに外方に張って付く。 ＊脚端面は水平。	＊内外面とも丁寧に横ナデ調整。 ＊体部裾に、高台をはり付けたさいの痕を残す。	＊胎土はわずかに石粒混入。 ＊焼成は良好。 ＊色調は淡い灰青色。 ＊羨道開口部より出土。
8	坏（蓋）	A′－1	＊天井部はゆるやかに丸味をおび、二段の稜をなして口縁部に至る。 ＊口縁部はわずかに外方にひらき、先端は内向きの端面を有す。	＊頂部は粗くヘラ切りし、天井部にヘラ削り調整は施さない。	＊胎土は精良。 ＊焼成は良好。 ＊色調は淡い灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。 ＊〔A′－5〕身とセットをなす。
8	坏（蓋）	A′－2	＊天井部は丸く、むしろ尖り気味。口縁部は外下方に開いて、丸い端部に至る。 ＊4分の1欠損。 ＊端部はやや内屈。	＊天井頂部は粗くヘラ切り。 ＊内外面とも横ナデ調整。	＊胎土は良。わずかに小石粒混入。 ＊焼成は良好。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
8	坏（蓋）	A′－3	＊天井部はゆるやかに丸く、口縁部は外方に開いて、丸い先端に至る。 ＊天井部から口縁部にかけての稜は、粘土紐まき上げのもの。	＊天井頂部のヘラ切りは粗雑。 ＊内面中央に仕上げナデ。	＊胎土は良好。 ＊焼成も良好。 ＊色調は淡い灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
8	坏（蓋）	A′－4	＊天井頂部につまみをもち、つまみの中央部は深くくぼみ、端部は上方にのびる。 ＊天井部と口縁部の境は、つよく内屈する。 ＊口縁部に近く内面につくかえりは、口端部よりも下方に突出する。	＊天井部はヘラ削りで、方向は時計逆まわり。	＊胎土は不良。細砂を含む。 ＊焼成はなま焼け。 ＊色調は灰白色。 ＊玄室内、左袖部より出土。 ＊〔A－10〕身とセット。
8	坏（蓋）	A′－5	＊つまみは中央のくぼみは深く、端部は外方に開き、先端は丸く収める。 ＊口縁部に近く内面にかえりをもつが、かえりは口端部よりも下方に突出する。	＊天井部はヘラ削りで、方向は時計逆まわり。余は横ナデ。 ＊内面中央に仕上げナデ。	＊胎土は良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
8	坏（蓋）	A′－6	＊天井頂部のつまみは中央が浅くくぼみ、端部は外方に開く。 ＊口縁部内側にかえりをもち、かえりは口端部よりも下方に突出する。	＊天井部はヘラ削り調整、その上から回転を利用したカキ目を施す。 ＊口縁部、および内面は丁寧に横ナデ。	＊胎土は良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は暗い灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
8	坏（蓋）	A′－7	＊天井頂部につくつまみは、中央が浅くくぼみ、端部は外方に開く。 ＊口縁部に近く内側にかえりをもち、かえりは口端部よりも下方に突出する。 ＊口縁端部は焼けひずみのため歪む。	＊天井部はヘラ削り、その上からカキ目を施す。	＊胎土は良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は暗い灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
8	坏（蓋）	A′－8	＊天井頂部のつまみは、中央が浅くくぼみ、端部は外方に開く。 ＊口縁部内側のかえりは外反しつつ下方にのび、その先端は口端部より下方にある。	＊天井部はヘラ削り調整、その上からカキ目を施す。 ＊口縁部、および内面は横ナデ。	＊胎土は良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は暗い灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。

8	坏（蓋）	A′－9	＊つまみは中央部が浅くくぼみ、端部は外方に開く。 ＊天井部から口縁部にかけて、段をなす。 ＊口縁部内側のかえりはやや外反してのび、その先端の位置は口端部より甚だ下方にある。	＊天井部はヘラ削りで、方向は時計逆まわり。その上からカキ目を施す。	＊胎土は良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
8	坏（蓋）	A′－10	＊つまみ中央のくぼみはやや深く、端部はわずかに外方に開く。 ＊口縁部に近く内側にかえりをもち、かえりは口端部より下方に突出する。 ＊かえりの先端は鋭いが、口端部は丸く収める。	＊天井部はヘラ削りで、方向は時計逆まわり。 ＊その上からカキ目を施して、他の部分の横ナデとも丁寧な仕上げ。	＊胎土は良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は淡い灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
8	坏（蓋）	A′－11	＊天井頂部に付くつまみは中央が浅くくぼみ、端部は外方に開く。 ＊口縁部に近く内側にかえりをもつが、かえりは口端部より下方に突出する。 ＊かえりの先端は鋭く、口端部は丸い。	＊天井部はヘラ削りで、方向は時計逆まわり。 ＊その上から回転を利用したカキ目。	＊胎土は良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は暗い灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
8	高坏（無蓋）	B－1	＊口径11.5cm、器高12.6cm。脚部に比して坏部の発達が著しい。 ＊坏部は、体部に2段の高い稜がつき、外反しつつ口縁に至り、先端は丸く収める。坏の底部は扁平。 ＊脚柱部に長方形二段透しが2方にあく。 ＊脚裾部の開きは少なく、先端は下方にのみ突出する。	＊脚柱部から裾部にかけてカキ目を施す。	＊胎土は、細砂を含む。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰黒色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
8	高坏（有蓋）	B－2	＊口径11.8cm、器高16.5cmと大型。 ＊坏部の立ち上りは内傾度が著しく、立ち上りと受部の境に深いV字溝がめぐり、受部は外上方にのびる。 ＊脚柱部はラッパ状に外下方に開き、長方形二段透しが3方にあく。 ＊柱部と裾部の境に二段の稜。 ＊脚裾部はつよく開き、端部は上・下方に突出する。	＊坏底部はヘラ削り。 ＊坏内面は横ナデするが、わずかに叩き目を残す。 ＊脚部は丁寧に横ナデ。	＊胎土は良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は坏の体・底部の外表が淡緑色、脚部は灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
8	高坏（有蓋）	B－3	＊口径11.9cm、器高16.1cmと大型。 ＊坏部は、立ち上りは内傾、受部はほぼ水平にのびて、先端は共に丸い。 ＊脚柱部はラッパ状に外下方に開き、長方形二段透しが2方にあく。 ＊柱部から裾部にかけてつよく屈曲し、端部は下方のみやや突出して着地する。	＊坏底部はヘラ削り。 ＊坏の体部・口縁部，内面・脚部は丁寧に横ナデ。	＊胎土はわずかに石粒混入。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
8	高坏（無蓋）	B－4	＊口径 8.8cm、器高 9.4cm、坏の深さ 3.5cm。 ＊坏の体部中ほどにつまみ出し凸帯を付す。 ＊脚柱部は短く、長方形二段透しが2方にあく。	＊坏の体部と底部の境は、ヘラ削り調整。方向は時計逆まわり。	＊胎土は良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は暗い灰青色。 ＊玄室・羨道間より出土。
8	高坏（無蓋）	B－5	＊口径 8.8cm、器高 9.5cm、坏の深さ 3.2cm。 ＊体部中ほどに、つまみ出し凸帯。 ＊脚柱部に長方形二段透しが2方にあく。	＊坏底部はヘラ削り調整。	＊胎土は良好。 ＊焼成は、脚端部に焼けひずみ。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。

8	高坏（無蓋）	B－6	＊口径 9.7cm、器高 9.5cm、坏の深さ 3.9cm。 ＊脚部に比して、坏部が発達。 ＊坏部は、体部に２本の浅い凹線がめぐり、直立して、外反気味の口縁に至る。 ＊脚柱部は短く、長方形一段透しが２方にあく。 ＊脚裾部はほぼ水平にのび、端部は垂直。	＊体部と底部の間はヘラ削り。 ＊あとは丁寧に横ナデ。	＊胎土は精良。 ＊焼成は脚裾部が焼けひずみ。 ＊色調は灰黒色。 ＊玄室・羨道間より出土。
8	高坏（無蓋）	B－7	＊口径 9.6cm、器高 9.3cm、坏の深さ 4.0cm。 ＊脚部に比べて、坏部が発達。 ＊坏の体部は直立、中ほどに凹線が２本めぐる。 ＊脚柱部に、長方形一段透しが２方にあく。 ＊脚裾部は水平に外にのび、端部は外下方に突出する。	＊体部と底部の間はヘラ削り。	＊胎土は良好。 ＊焼成はなま焼け。 ＊色調は灰白色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
8	高坏（無蓋）	B－8	＊口径 9.6cm、器高 9.2cm、坏の深さ 3.8cm ＊坏の体部は直立、中ほどに凹線２条が平行、口縁先端はやや外にそる。 ＊脚柱部は短く、長方形一段透しが２方にあく。	＊体部と底部の間はヘラ削りし、その上からカキ目を施す。 ＊体部・脚部、および内面は丁寧に横ナデ。	＊胎土は精良。 ＊焼成は良好。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室・羨道間より出土。
9	䐜	C－1	＊口径12.3cm、器高16.1cm。 ＊口頸部は長く、一旦外彎してのち段をつくって、内彎気味に立ち上る。 ＊頸部と口縁部の境界、頸部中ほど、肩部、体部と底部の境界に計５本の深い凹線がめぐる。 ＊肩部は張り、底部は丸く、胴部に円孔を穿つ。	＊口縁部を垂直に近く折りまげているのは、大きく開いた口頸部の焼きひずみをふせぐため。	＊胎土は良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰黒色。 ＊玄室入口、右側壁寄りから出土。
9	䐜	C－2	＊口径11.9cm、器高14.7cm。 ＊口頸部は初め細く、一旦外彎してのち段をつくって、外上方にのびる。 ＊頸部と口縁部との境、および頸部中ほどにつまみ出し突帯。	＊頸部は、しぼりの技法によって極端に細くつくられている。	＊胎土は精良。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰黒色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
9	䐜	C－3	＊口径 9.6cm、器高11.2cmと小型。 ＊口頸・口縁部間の境界の屈曲は、〔C－３・４〕ほど著しくない。	＊底部はヘラ削り。	＊胎土は良。 ＊焼成はなま焼け。 ＊色調は灰白色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
9	䐜	C－4	＊口径 9.7cm、器高11.0cmと小型。 ＊口頸部と口縁部の境界はつよく屈曲、外表につまみ出し突帯。 ＊体部は楕円型、肩部に凹線がめぐる。	＊底部は回転を利用したヘラ削りで、方向は時計逆まわり。	＊胎土は良。 ＊焼成は口縁部に焼けひずみ。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
9	䐜	C－5	＊口径 9.5cm、器高10.9cmと、〔C－3〕とほぼ同サイズ。 ＊口頸部は、はじめ外上方にのびたのち急角度に折れ、再び屈曲して、外反する口縁となる。	＊底部はヘラ削り。	＊胎土は良。 ＊焼成はなま焼け。 ＊色調は灰白色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
9	直口壺	D－1	＊口径 9.0cm、器高16.7cm。 ＊口頸部は長く、外上方にほぼ直線的にのび、中間に平行凹線がめぐる。 ＊体部は球形、肩部に平行凹線。	＊体部下半から底部は、ヘラ削りで、方向は時計逆まわり。	＊胎土は、やや石粒混入。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は紫がかった灰黒色。 ＊玄室内、左袖部より出土。

9	台付直口壺	E－1	＊口径 7.8cm、台部先端径10.4cm、器高20.9cm。 ＊口頸部は長く、外反しつつ立ち上り、平行凹線が上・下方にめぐる。 ＊体部は楕円形で、凹線が２本。 ＊脚柱部に長方形一段透しが３方にあく。 ＊柱部と裾部の境に断面三角型のつまみ出し突帯。 ＊脚裾部先端は、内方に向く端面をもつ。	＊全体に丁寧に横ナデ調整。	＊胎土に細砂混入。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
9	台付直口壺	E－2	＊口径 5.0cm、体部最大径 8.1cm、器高12.3cmと超小型。 ＊口頸部は外反しつつ立ち上り、口縁部に至って直立。 ＊体部は球形で、肩部に刻目文帯を付す。 ＊脚柱部の中ほどに小円孔を穿ち、脚裾部は大きく外に開く。	＊体部下半はヘラ削りで、方向は時計順まわり。	＊胎土に細砂・石粒混入。 ＊焼成は、脚端部が焼きひずみ。 ＊色調は灰黒色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
9	平瓶	F－1	＊口縁部は欠損。 ＊体部上面に把手を付す。 ＊体部の最大径は18.4cmと大形。 ＊胴部と底部の境界はわずかに稜をなすが、底部は丸く収める。	＊肩部に叩き目痕を残す。 ＊体部下半と底部はヘラ削りで、方向は時計逆まわり。	＊胎土にやや石粒混入。 ＊焼成は良好。 ＊色調は淡い灰青色。 ＊玄室内、右側壁寄りから出土。
9	平瓶	F－2	＊外上方にひらく口縁部は、体部上面の中心からはずして接合する。 ＊体部上面に把手を付す。 ＊体部最大径は14.8cm。 ＊胴部と底部の境界は稜をもつ。 ＊底部は扁平。	＊体部は底部から上方へ順次成形、上面の開口部を円板でふさいだのち、中心をはずして口縁部を接合。 ＊開口部をふさぐ円板には、把手をとりつける。	＊胎土は良好。 ＊焼成のさい底部にふくらみ。 ＊色調は灰黒色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
9	平瓶	F－3	＊体部上面に円形の粘土粒を５個貼付する。 ＊体部上面は丸く、胴部は張り出し、底部はやや扁平をなす。	＊体部下半と底部はヘラ削り。 ヘラ削りの方向は時計順まわり。	＊胎土は細砂混入。 ＊焼成は良好。 ＊色調は淡い灰青色。 ＊玄室・羨道間より出土。
9	横瓶	G－1	＊体部最大径18.2cm、器高20.3cm。 ＊口頸部は細長く、次第に外反しつつ口縁部に至る。 ＊体部は均斉な楕円形。 ＊口頸部中ほど、体部両先端、体部中央にそれぞれ平行凹線を施す。	＊成形の過程は、俵状の胴に口頸部をとりつけたのち、胴部の左・右端を接着する。	＊胎土は石粒混入。 ＊焼成は良好。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室内、左袖部より出土。
9	壺（土師器）	H－1	＊口縁部は短く、外反して立つ。 中ほどにゆるやかな稜。 ＊体部はほぼ球形。 ＊口径10.0cm、器高 9.5cm。	＊外表はナデ、内面ははけ目。	＊胎土は石粒混入。 ＊焼成は不良。 ＊色調は褐色。 ＊玄室奥壁前より出土。
9	埦（土師器）	I－1	＊口径 9.1cm、器高 7.5cm。 ＊体部は直立、口縁部はわずかに外反しつつ、丸い先端に至る。 ＊底部は丸く収める。 ＊器壁は均しく厚い。	＊体部から口縁部にかけて、わずかにはけ目。	＊胎土に細砂・石粒混入。 ＊焼成は不良。 ＊色調は褐色。 ＊玄室奥右側壁より出土。

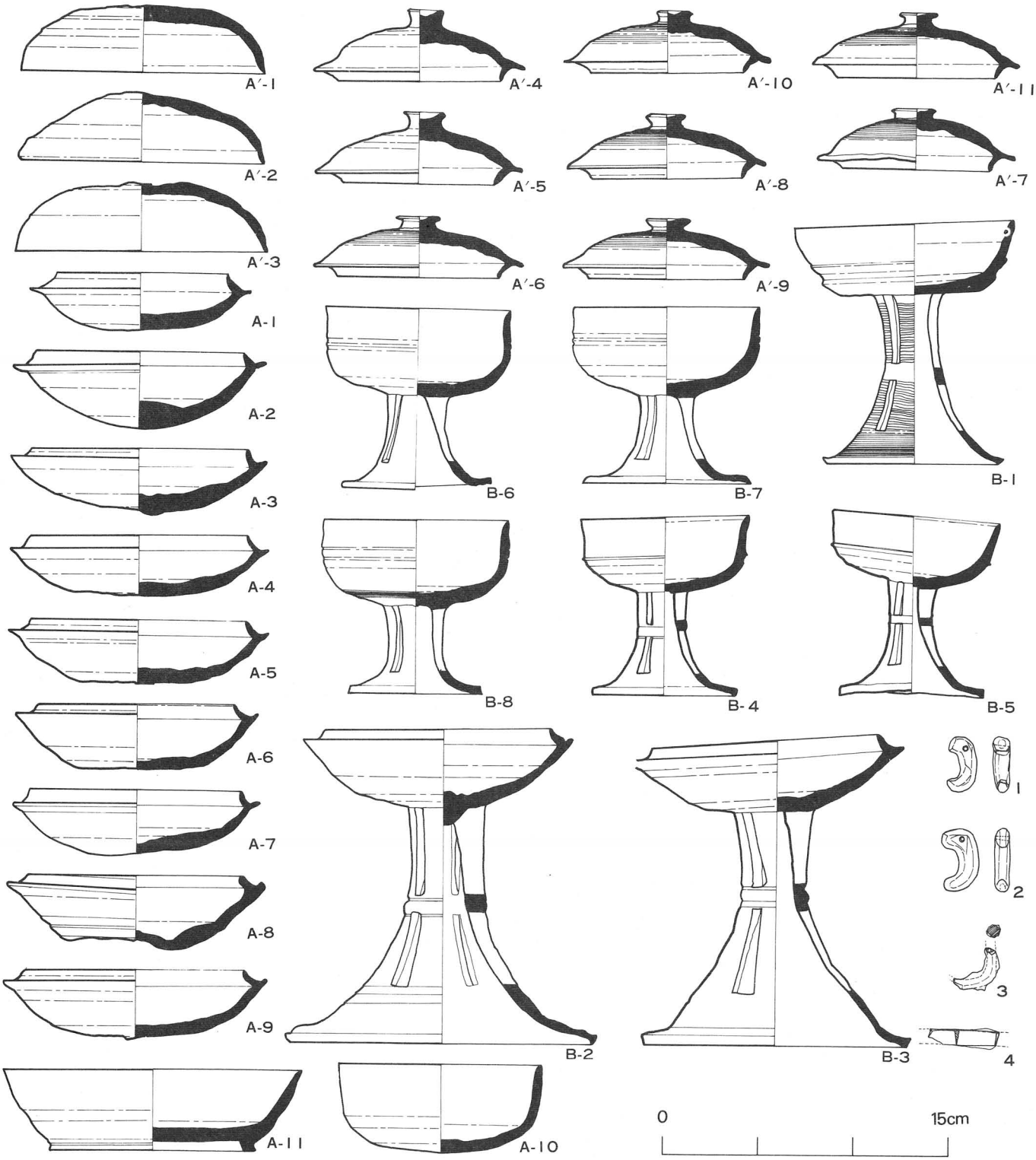


図8　黄牛塚古墳出土遺物実測図(1)

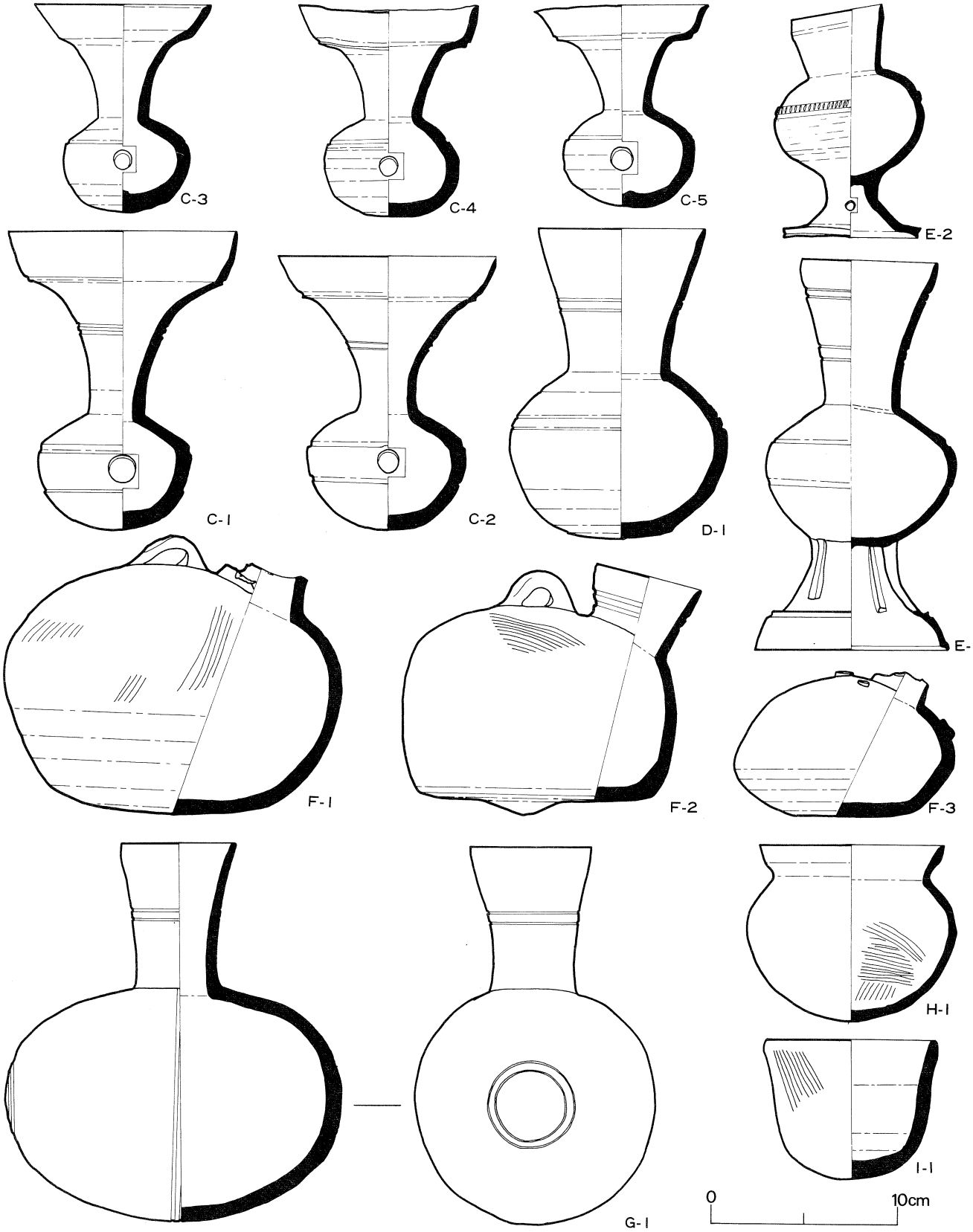


図9　黄牛塚古墳出土遺物実測図(2)

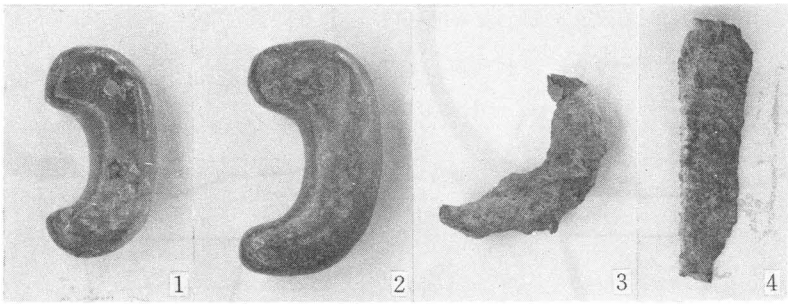
5. 考　　察

黄牛塚古墳出土の計43点の須恵器は「遺物」の項で詳細に論じられたように、新旧二期の遺物として把握できるであろう。すなわち、坏，高坏，平瓶等に典型的に見られるごとく、小型の丁寧なつくりの、一見して儀器としか考えられないものと、矮小化，退嬰化が明らかにみられるものの、まだ実用品としての形態を残す粗雑な成形痕しかみられないものとに区分されるのである。これらは陶邑古窯址のⅡ期末～Ⅲ期初頭に編年づけられるものと考えられ、実年代で６世紀末～７世紀前葉に当るものである。とくに後出的な杯（A－ロA′－b）のタイプに入る小型品は、長浜市小一条の中山古墳から出土した超小型品とともに、祭祀用ミニチュアとして一括することができると思われる。結局のところ、遺物からする当古墳の築造は６世紀末葉という時期が考えられ、７世紀に入って超小型のミニチュアが副葬されたものと考えられる。

以上のごとく、当古墳の遺物は少くとも二時期にわたる様相を示しており、その石室内には、当然複数の被葬者ということが考えられるが、当石室内にはこの事を直接的に明らかにできる遺骸や木棺等の資料は全く残存していなかった。だ傍証的な資料として、副葬時の位置を保っていると思われる土器及び被葬者の安置場所と密接につながる内部敷設である棺台を取り上げることができよう。無論、土器の出土状況に関しては、大半のものが後代に袖部付近に集められたものと考えられ、さらには盗掘等による攪乱なども推測され、十分に証明しうる資料でないことは言うまでもない。

しかし、玄室奥部の土壇上，棺台わきに対称的な位置におかれた土師器二点と勾玉二点の出土位置及び二列の棺台石列等から、奥壁に頭部を向けた棺台上の１～２棺の安置がまず想定され、玄室前半部右側壁沿と同中央・石室軸上に並ぶ副葬品から同じく１～２棺の埋納が予想される。

以上のように、当古墳には２棺以上の複数体の埋葬が確実視されるが、これらの被葬者は、当古墳の築造年代からして、通例のごとく一古代家族の家長(戸主)及びその家族成員と考えられ、家長の死とともに築造された当古墳内に、順次その縁故者が追葬されたものと解釈できよう。



挿図写真　黄牛塚古墳出土遺物　（１・２；勾玉，３・４；鉄製品

ところで、一般に横穴式石室の採用は、その墓室の形式にふさわしい、新しい儀礼をもたらしたと言われ、[①] 特に帰化系氏族の墳墓には炊飯具ミニチュアの副葬という事象に見られるように、その特色がことに著るしい。[②] そして、この新しい儀礼及び葬制に規定されて、石室内は明瞭に分割されていたのであって、そこには被葬者の死後の世界が堅固な姿で構成されていたものと推定される。

横穴式石室の内部空間の構成について、福岡澄男氏は大津北郊の古墳を対象に鋭い視点から解明され、石室形態とその内部敷設は被葬者の埋葬と儀礼とに深く関わっていることを指摘された。[③]

黄牛塚古墳の場合は、大津北郊の古墳に見られたような敷石(棺床)による石室内空間分割は見られなかったがこれにかわって、土壇と棺台とによる石室内空間構成が見られるようである。

すなわち、奥壁沿いに築かれた土壇は儀器たる土師器２点がすえられていたことから推測されるように、遺骸

安置の場所ではなく、安置に先立つ儀礼の場と言えよう。そして儀礼の場の前方の二列の石列こそが、木棺安置用に設けられた棺台と判断されるのである。

実際に第一次埋葬者たる家長の葬送経過を想像するならば、まず木棺搬入の前に、玄室奥部土壇に儀器たる土師器がおかれ、所定の儀礼が行なわれ、そののち棺台上に被葬者を納棺した柩が置かれ、最後に木棺側辺及び玄室前半部に須恵器等の副葬品が置かれ、再び所定の儀礼がとり行なわれて終了したものと思考される。

さて、長方形プランの玄室奥部に当古墳のような、儀礼，埋葬に伴う特別な敷設を設けた例は、一般には石障とか石棚などの敷設がこれに該当するものと推定されるが、特別な敷設物を設けないまでも、柩安置に先だって儀礼をとり行う空間を設けたと考えられる一例として、甲賀郡甲西町の孤栗古墳群第B－2号古墳をとり上げることができる。④棺台上の被葬者に伴う副葬品と推測されている、奥壁附近の土器群が木棺安置に先だって置かれたものと考えることが許されるならば、当古墳にも上述したごとき、空間分割が存したものと想定される。

したがって言いかえるならば、黄牛塚古墳の土壇と棺台による石室内空間構成は、以上のような当時における儀礼と葬制にまつわる慣習に規定された結果生じたものと言っても過言ではないであろう。

なお、先に取上げた石棚はマキノ町所在の斎頼塚古墳にその例を見るが、石障については、従来、坂田郡誌において石棺と解釈されていた近江町能登瀬の山津照神社古墳の石室内構築物は、その記述からすれば、⑤むしろ石障と考えられる可能性が大きく、⑥その周囲から副葬品の出土をみたことと相まって、黄牛塚古墳と同様な儀礼空間の成立が推察されることを附言しておきたい。

以上、要するに黄牛塚遺跡は複数体の被葬者を納めた6世紀末7世紀前葉の径11m程度の小円墳であったが、その内部は特別な構築物が造作されており、死後の世界に対する豊かな観念が読みとられる注目すべき古墳であった。このような小円墳は横山古墳群にも数多く見られ、いずれも6世紀以降のあらたな生産力の飛躍を踏まえて成長してきた、共同体内の有力家族の墳墓と見られ、当古墳も附近の新興有力家族の築造になるものと考えられる。しかし一方、当古墳は継起して築造された古墳を伴なわない単独墳であり、この点において、当古墳近辺の諸頭山古墳群、船崎古墳郡等の後期古墳群や後別当古墳群他の旧息長村周辺の首長系譜のものと考えられる各古墳とは異質であり、当古墳の被葬者たる一古代家族の性格と消長を暗示しているように感ぜられる。なお、このような横山古墳群の諸相に関する一考察を別稿として試みたので参照されたい。　（別所健二）

註

① 小林行雄『古墳の話』

② 水野正好「滋賀郡所在の漢人系帰化族とその墓制」（『滋賀県文化財調査報告書』第4冊　滋賀県教育委員会）。

③ 福岡澄男「内部構造をめぐる諸問題」（『滋賀県文化財調査報告書』第4冊所収　滋賀県教育委員会）。

④ 水野正好他『甲賀郡甲賀町狐栗古墳群調査概要』（滋賀県教育委員会）。

⑤ 『改訂近江国坂田郡志』　第一巻。

⑥ この点について丸山竜平氏の示唆をえた。

第2章　中　山　古　墳

1. 位　置　と　環　境（図1・図10）

中山古墳は行政上長浜市小一条町中山にある。昭和49年度に、北陸自動車道関連遺跡として発掘調査を実施した同市諸頭山古墳群とは小谷をはさんで、北東200ｍの所に位置する。現在独立丘として南北に細長い丘を形成しているが、本来、北に向けて舌状に突出した丘陵であったと思われ、古墳はその北端部に位置する。丘陵は頂部が何時の時点かに削平されており、他に数基の古墳が築成されていた可能性も考えられるが、現在では証明できない。

中山古墳の発見によって、周辺には、布勢古墳、諸頭山古墳群、時期不明の船崎山古墳群と、3～4グループの後期古墳群が知られるようになった。いずれも6世紀末～7世紀初当のもので、長浜平野南部における古墳時代後期の墓制、ひいては、村落共同体のあり方について、より詳細に検討できるようになろう。

2. 調　査　経　過

昭和50年9月上旬、長浜市小一条町の通称中山北端の丘腹部において、地元の中学生3名が須恵器片を発見し、以後数日にわたり多量の各種須恵器、ガラス製丸玉2個を採取した。現場は北陸自動車道建設にともなう土取り場で、大型ブルドーザーによって、採土作業が行なわれていたのである。小一条区長より報告を受けて、調査が開始されたのは9月12日である。

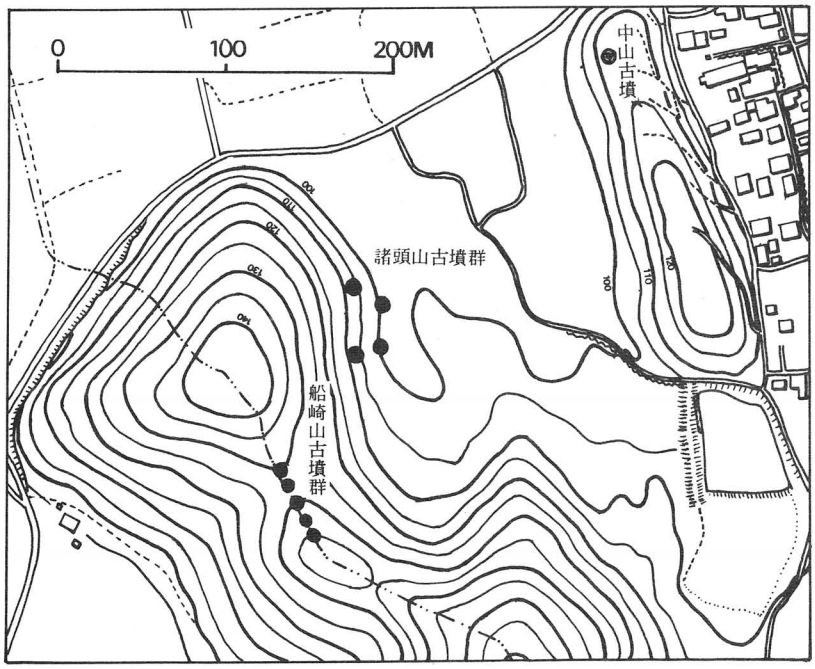


図10　中山古墳附近地形図

遺物の発見地点は、ブルドーザーによって削り取られた急角度の斜面端部にあり、3個の東西に並ぶ列石がみられ、さらに、この延長上約4ｍの地点に、一個の石が露出していた。

この列石はおそらく石室の一部が露出しているものと推定し、南側を平面的に順次、掘り下げることにした。石室内部と思われる部分は、10～20cmを計る砕石が一面に散乱していた。しかしこれは土採作業によるものではない。石室の周囲は元来の自然地形を残さず、平坦な地形であり、以前から籾干し場として利用されていたもので、

当古墳は、この丘頂部を削平した際に破壊されたものと考えられる。このため古墳としての形状を全く保たず、地元の古老の間にも当古墳の所在は伝えられていなかったのである。

発見者によって、すでに30数点にのぼる各種須恵器（坏身、坏蓋、高坏、瓶、壺、提瓶等）、と2個のガラス製丸玉がとり上げられていたが、さらに石室内部に散乱する大小の砕石をとり除いていくと、かなり破損してはいるが、20点を数える各種須恵器の出土をみた。そして数日のうちに地山を削平した床面があらわれ、側壁は一部を除いて、最下段の石材を遺存するのみであることが判明した。また床面からは、ガラス製小玉 114点、金環2点、丸玉2点、鉄環1点等が発見された。

また墳丘封土の遺存の有無を確かめるため石室に直交するトレンチを北へ延長したところ、石室より約23m北の斜面下部において黒色表土内より、10数点の須恵器片、石鏃1点、石製紡錘車1点、土師器片数点の出土があった。しかし墳丘の周囲では封土の痕跡は全く無く、地山岩盤上に数センチの表土が堆積するのみであった。

当初、調査期間は9月末日までを予定していたが、遺構の保存状態が非常に悪かったにもかかわらず、遺物の出土数が多かったため実測、写真撮影等に期日を要し、10月8日になって調査を完了した。　　（鬼柳　彰）

図11　中山古墳地形測量図

3. 遺　構

1） 墳　丘（図11）

墳丘は現在全く遺存しない。当古墳は以前から籾干し場として利用されている平担部にあり、墳丘を思わせるような起伏等は全くみられないのである。石室に直交するトレンチによって観察したところ、石室周囲では、わずか数センチを計る表土があるのみで以下は全て地山岩盤であった。しかし土取り作業以前の地形図（図11）をみると、西側に石室をとり囲むような形の等高線が現れており、これが墳丘の裾、あるいは封土の流失したものであったということが考えられる。この地形と発見された石室の規模からみると、径20ｍほどの墳丘があったものと推定できるのである。

2） 主体部（図12）

掘り方内部の削平された地山上に石室北側壁の最下段、一部で二段のみが遺存する。石

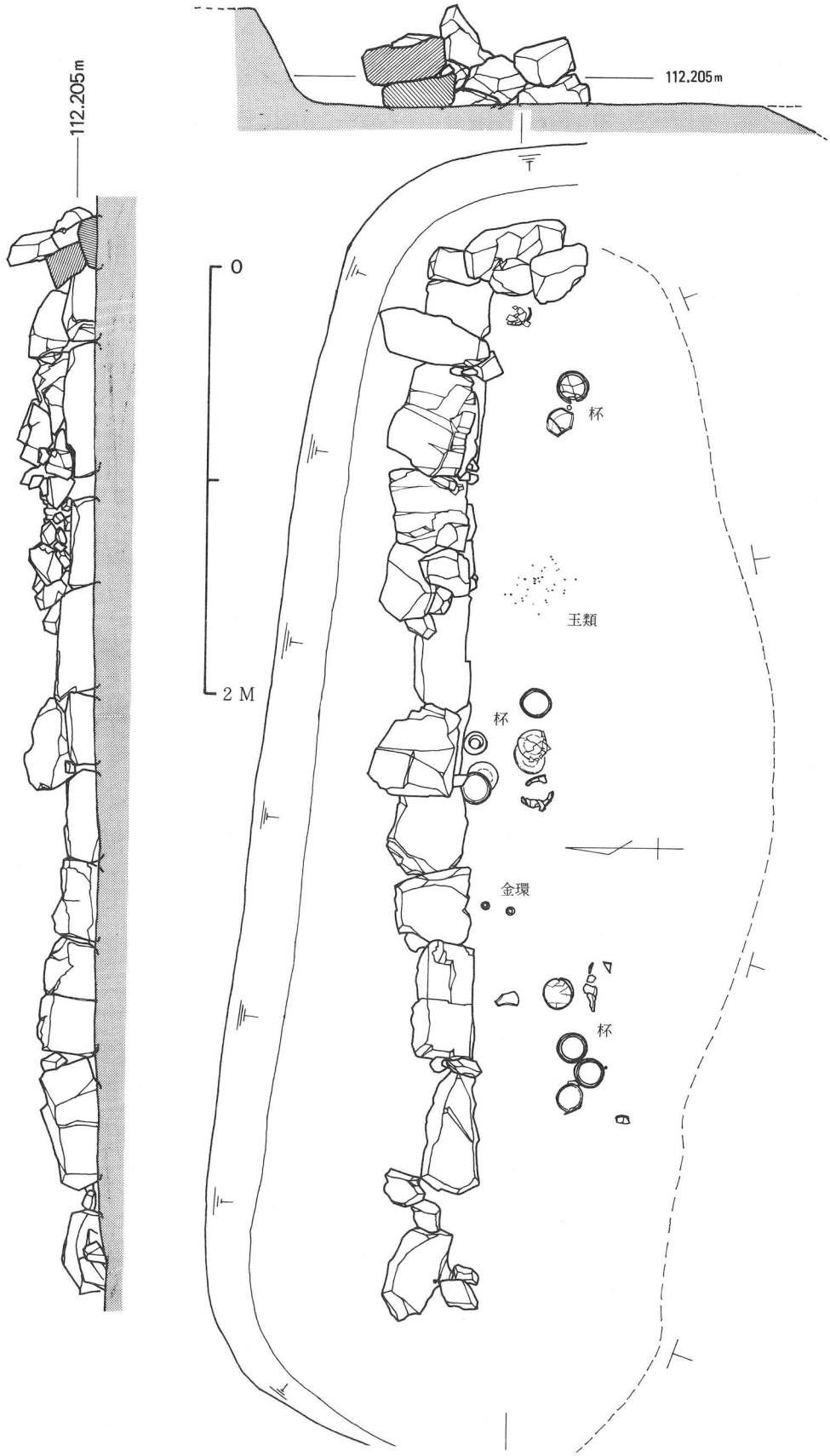


図12　中山古墳石室実測図

材は軟質のチャートで地山岩盤上に直接置かれている。石材は長径50cm程度で長さ5m50cmにわたって直線上に並べられている。主軸方向は、ほぼ東一西方向にある。この列石の東端ではこれと直角に数個の石材がみられ、奥壁の一部と思われる。また列石の南側は1m～1m40cmの範囲でほぼ水平に削られているがこれが石室床面となっている。表面は安定した地山で、遺物もこの直上に置かれているものが多かった。

石室の規模について考えてみよう。わずかに遺存する側壁最下段をみると、石材は約40cmから60cm程度であり、しかもこれを主軸方向へ向けて並べている。石室全長は掘り方からみると、最大に見積っても6mほどである。この数値は黄牛塚古墳主体部の8mと比べると短いが、先年調査された諸頭山古墳主体部の5.6mを超える。しかし諸頭山古墳では1mを超える石材が利用されているのに対し当古墳石室では、最大でこれの半分しかないのである。石室幅は推定の域を出ないが、床面の遺存する最大幅1.4mほどであろうと思われる。また玄室と羨道の区別は判断し難い。側壁中央付近より西半部がわずかに南へ寄るともみられるが、この部分を袖部と考えるには無理があろう。右片袖式の石室とも考え得るが、遺存部分の石材が、玄室、羨道を意図していないようにみうけられるところから、無袖であったと考えたい。（鬼柳　彰）

3．遺　　物

1）遺物出土状態（図12）

遺物の半数以上が発見者によって採取されたものである。これを次に列記する。

坏身、7点（A-1　A-2、A-3、A-6、A-7、A-12、A-13）

坏蓋　9点（A′-2、A′-5、A′-6、A′-10、A′-12、A′-13、A′-14、A′-15、A′-16）

高坏　5点（B-1、B-2、B-4、B-5、B-6）

瑳　1点（C-1）

壺　7点（F-1、F-2、F-3、F-4、F-5、F-6、F-7）

提瓶　2点（G-1、G-2）

ガラス製丸玉　2点（4、5）

これらの遺物は出土状態を記録することは、できなかったが、主に石室西半部に集中していたとのことである。調査が開始されてから発見された遺物には次のものがある。

坏、　7点（A-4、A-5、A-8、A-9、A-10、A-11、A-14）

坏蓋　7点（A′-1、A′-3、A′-4、A′-7、A′-8、A′-9、A′-11）

高坏　1点（B-3）

壺　2点（D-1、E-1）

ガラス製丸玉　2点（6、7）

ガラス製小玉　114点

金環　2点

鉄環　1点

これらの遺物は土採作業が行なわれたため破損が著しく、須恵器の完形品は数点を数えるに過ぎない。須恵器の出土地点は玄室奥部、中央部、西部の3カ所に集中している。先ず玄室奥壁近くで、坏2組が出土、中央部で

は坏身３点、坏蓋２点、直口壺一点、西部では坏身２点、坏蓋２点が発見された。これらは、床面上数センチ以内に正立して出土したものが多く、副葬された当時の状態を、大きく変えていないものと思われる。

また、装飾品のうち、金環２点と、ガラス小玉 114点は上述した須恵記出土地点の中間で発見された。すなわちガラス製小玉は奥壁より径 1.5ｍの地点に集中しており、金環は同３ｍの地点に約10cmほどの間隔をおいて出土した。

またガラス製丸玉は、一点が西部床面上に発見されたが、調査前に採取された２点もこの付近にあったものと思われる。他の一点は掘り上げた土の中からみつけられたものである。（鬼柳　彰）

2）　遺　　物（図13・図14）

Ⅰ）須　恵　器

中山古墳からは、48個の須恵器が出土したが、この中には欠損品を実測して原図を描いたものもあり、他に復元不可能な破片も沢山ある。48個の須恵器の詳細については、後掲の説明表に記してあるので参照願うとして、ここでは全体的な特徴と推移を述べる。また当古墳と黄牛塚古墳は近距離にあり、築造年代も相い近いと考えられるので、黄牛塚古墳出土の須恵器との比較を通じて、大体の時代を推定しておこう。

坏　坏の身〔A〕は14個出土しているが、２類に大別できよう。

(1)立ち上りはやゝ内傾し、高さは受部上面から 1.0cm平均を測る。口径は12～13cm。〔A-1～７〕。

(2)立ち上りは内傾度がきつく、低くなり、受部とも矮小化の傾向にある。口径も11～12cmと小型化。〔A-8～14〕。

両者のうち、坏(2)は黄牛塚古墳の坏(イ)に対応できるので、実年代では６世紀末に比定され、坏(1)はそれに先行する段階に位置づけられよう。

蓋　坏の蓋〔A′〕は計16個出土し、大別して３類に分けられる。

(Ⅰ)天井部は丸く、口縁部は外下方に開く。口径平均14cm、器高 4.5cmを測る。〔A′-3 〕が〔A-6〕と、〔A′-9〕が〔A-4〕と一対をなすので、当然坏(1)と対応する。〔A′-1・2・3・6・9〕の５個。

(Ⅱ)天井部は扁平気味で、口縁部はほゞ垂直に先端に至る。口径平均13cm、器高４cmと小型化する。坏(2)と対応すると思われる。〔A′-4・5・7・8・10・11〕の６個。

(Ⅲ)口径10cm平均、器高 3.5cm平均を測って超小型。口縁端部の内側が突出するもの(〔A′-12〕)があり、同じ形態のもの（〔A′－10〕）を承けると考えられる。黄牛塚古墳における７世紀前半のミニチュア化と関連があろう。〔A′－12～16〕の計５個。

高坏　高坏〔B〕は計６個の出土をみた。無蓋高坏４点のうち、〔B-2〕は長脚二段透しで、坏の口縁部が直立、口縁部と底部の境に２段の凸帯と櫛描き刺突文が施されている。〔B-1〕も同じく長脚二段透しであるが、坏の口縁部が外上方に開き、２段の稜とヘラ描き斜線文が口縁部と底部を区切っている。〔B-3〕の坏部口縁は直立し、〔B-4〕は外上方にのびるが、ともに脚部は短く、透しは穿たれていない。脚部に透しのない高坏は７世紀代に入って多くなるので、〔B-3・4〕ともその時期に位置づけられよう。また〔B-1〕は、坏部口縁の外反度が黄牛塚〔B-1〕に類似するため、同じ６世紀末に、〔B-2〕は、口縁の立ち上りや櫛描き刺突文といった特徴から、陶邑窯ＴＫ43に並行するとみて、６世紀後半に実年代を求めうる。ちなみにＴＫ43につづくＴＫ209（６世紀末）には、〔B-1〕類似の高坏が出ている。これらのほか、有蓋短脚の高坏が２個出土している（〔B-5・6〕）。短脚というよりむしろ脚柱部をもたず、直接坏底部と裾部とが連続するといった方が適当で、黄牛塚〔B-2 3〕の有蓋長脚二段透し高坏とは別系統のものとみるべきであろう。

瑞　瑞〔C-1〕はたゞ1個出土した。口頸部以上が欠損しているため器高は測りがたいが、体部最大径 6.4cm と超小型の瑞である。黄牛塚古墳のミニ瑞〔C-3・4・5〕の最大径が7cm前後とこれに類似し、同じく7世紀前半に位置づけることができる。

壺　壺類は総計9個出土している。有蓋短頸壺〔D-1〕は、肩の張りがきつく、丸底の体部に直立する口縁がつく。体部最大径は肩の高さで測り、14.1cm。口径より器高の方が長い。直口壺〔E-1〕は、球状の体部に、はじめ外反気味で中ほどから直立する口頸部がつく。黄牛塚古墳〔D-1〕が口頸部と肩部に平行凹線をめぐらせるのに対し、一切装飾はなく、それよりさらに小型である。壺〔F-1・2〕のうち、〔F-1〕は口縁部が広く、口端内外で段をつくり、最大径は体部の中ほどの高さで11.3cmを測る。底部の乱方向のヘラ削りが、壺〔F-4〕と共通する。〔F-2〕の方は口径6cmと口縁部が狭く、肩部が張り出し、肩部と口縁先端近くに凹線をめぐらしている。〔F-3〕は、口頸部は欠失して不明だが、肩部がやゝ張って最大径11.3cmを測り、体・底部は丸く収める。肩部にカキ目を施し、体部はヘラ削りしている。〔F-4・5〕はともに完形で出土したミニチュア壺である。〔F-4〕は器高 8.7cmに対し、口径 7.1cmと、口頸部の発達に特徴がある。〔F-5〕は最大径 7.6cmのやゝ扁平な体部に、中軸線を外れて短い口縁部がつく。両者ともカキ目が施されている。〔F-6・7〕はともに口頸部が欠失しているが、前者の体部最大径が 8.0cm、後者が 7.4cmとミニチュア壺である。〔F-7〕の肩部には斜行する刺突文が施されている。以上4個のミニ壺は、蓋(Ⅲ)の小型品、〔C-1〕小型瑞とともにミニチュア化の特徴を均しくする。

提瓶　提瓶〔G〕は2点の出土をみた。ともに環状の把手を肩部両側につけている。〔G-1〕は、口縁端部に段をつくらず、頸部と口縁部を平行凹線によって区切っている。6世紀後半に比定できよう。〔G-2〕は口頸部が欠損するが、体部最大径12.2cmと小型化する。陶邑窯では提瓶は7世紀代には消滅するといわれるから、〔G-2〕は6世紀末に位置づけるべきかもしれない。

以上をまとめてみると、総計48個の須恵器は3グループに大別できる。そしてこの3群はそれぞれ6世紀後半、6世紀末、7世紀前半の3期に比定できると思われる。したがって須恵器資料を基準に考えると、当古墳は3次にわたって埋葬が行われたとみてよいであろう。　　(谷口義介)

Ⅱ) 装 身 具 類

ガラス製小玉　114点を数えるガラス製小玉は、径3～5mm、厚さ1～3mm程度で、色は、青、青緑、黄、である。青色のものは透明なものが多い、緑、黄のものは不透明である。原材は鉛ガラスであろう。次に計測値を上げる。

No.	外径	内径	厚さ	色
1	3.5	1.5	4.0	青
2	4.5	1.5	3.5	青・緑
3	4.3	1.2	3.2	青
4	4.0	1.7	2.8	青
5	4.8	1.7	2.5	青
6	3.8	1.5	2.5	青
7	4.5	1.0	3.0	青
8	4.0	1.0	2.2	青
9	4.2	1.6	2.0	青
10	4.5	1.3	3.0	青
11	4.0	1.3	2.8	青

No.	外径	内径	厚さ	色
12	4.7	1.7	2.9	青
13	3.5	1.0	3.0	青
14	3.5	0.8	3.0	青
15	4.0	1.7	2.8	青・緑
16	3.8	1.5	2.8	青
17	3.9	1.6	3.2	青
18	3.5	1.3	2.3	青
19	3.8	1.2	2.2	青
20	4.5	1.6	3.3	青
21	3.4	1.2	1.7	青
22	3.0	1.3	2.0	青

No.	外径	内径	厚さ	色
23	3.3	1.0	2.7	青
24	3.0	0.9	2.0	青
25	4.5	1.8	3.0	青
26	3.2	0.8	2.5	青
27	3.2	0.8	2.5	青
28	3.0	0.9	1.2	青
29	3.5	1.2	2.0	青
30	3.5	1.5	2.7	青
31	3.2	1.5	1.6	青
32	3.5	1.0	1.8	青
33	3.5	1.3	2.2	青

No.	外径	内径	厚さ	色
34	3.0	1.2	1.5	青
35	3.0	1.0	1.6	青
36	4.0	1.8	1.5	青
37	2.9	0.8	1.5	青
38	3.2	1.3	3.0	緑
39	4.2	2.0	2.8	青・緑
40	3.5	1.3	2.5	青・緑
41	4.0	1.0	2.3	緑
42	3.0	1.0	1.5	青
43	3.3	1.2	2.8	緑
44	3.5	1.3	1.5	青
45	4.0	1.7	4.2	青・緑
46	2.5	1.3	2.2	青
47	3.3	1.3	2.3	青
48	3.5	1.2	3.0	青
49	3.5	1.5	3.8	青
50	3.0	1.3	3.5	紫紺
51	2.8	1.0	1.3	青
52	3.2	1.2	3.5	青
53	3.3	1.3	2.1	青
54	3.0	1.5	2.2	緑
55	3.8	1.3	2.4	緑
56	3.5	0.8	2.2	緑
57	3.8	1.5	2.5	緑
58	3.5	1.5	2.2	緑
59	3.5	1.0	2.6	緑
60	3.3	1.2	2.1	緑

No.	外径	内径	厚さ	色
61	4.0	1.6	2.3	緑
62	3.8	1.2	3.3	緑
63	4.0	1.3	3.0	緑
64	3.5	1.7	2.3	緑
65	3.5	1.0	2.5	緑
66	4.3	1.0	4.0	緑
67	3.2	1.6	4.4	緑
68	3.4	1.3	2.3	緑
69	3.8	1.4	4.3	緑
70	3.5	0.9	3.9	緑
71	4.0	1.7	2.3	緑
72	3.5	1.3	2.4	緑
73	3.0	1.5	3.5	緑
74	3.5	1.2	1.9	緑
75	2.9	0.8	1.5	緑
76	2.3	0.6	2.5	緑
77	3.0	1.2	2.2	緑
78	3.5	1.5	2.1	緑
79	3.0	0.9	2.0	緑
80	2.9	1.1	1.5	緑
81	2.2	0.6	1.9	緑
82	2.9	1.1	1.0	緑
83	2.5	1.0	2.0	緑
84	3.3	1.1	2.1	緑
85	3.5	1.2	4.0	緑
86	3.5	1.8	2.5	緑
87	2.9	1.0	1.5	緑

No.	外径	内径	厚さ	色
88	3.0	1.0	2.6	緑
89	2.4	0.8	2.5	緑
90	3.5	1.3	2.7	緑
91	3.3	1.3	2.1	青・緑
92	2.5	0.8	2.7	緑
93	2.6	1.2	2.0	青・緑
94	3.3	1.5	2.2	緑
95	2.6	0.8	2.1	青・緑
96	2.2	1.1	1.8	緑
97	2.8	1.0	2.2	緑
98	3.0	0.9	2.5	緑
99	2.1	0.6	2.2	緑
100	3.2	1.1	2.3	緑
101	3.2	1.0	1.5	緑
112	4.5	1.2	2.5	緑
103	3.0	1.0	1.4	緑
104	4.0	1.5	2.0	黄
105	3.5	1.0	1.5	黄
106	3.4	1.7	2.1	黄
107	2.9	1.1	1.3	黄
108	3.1	1.1	1.5	黄
109	3.1	1.0	2.1	黄
110	3.3	1.0	2.2	黄
111	2.6	0.9	1.4	黄
112	3.3	0.9	1.5	黄
113	2.5	0.7	2.1	黄
114	2.3	0.5	2.2	黄

（数値単位はmm）

金環（図13の２、３）地金は銅、金箔は一部を除いて剝離している。２は長径 2.6cm、短径 2.5cm、３は長径 2.6cm、短径 2.4cmをはかる。

ガラス製丸玉（図13の４～７）紫紺色、４は整美な形態を有するが６はゆがんだ四辺形を示している。管状の吹ガラスを切断したものと思われる。

鉄環（図13の８）指環と考えられる。金か銀の箔をかぶせたものであろうが、全く残っていない。

石製紡錘車（図13の１）滑石製、表面、裏面共鋸歯文の線刻がある。（トレンチで出土）　（鬼柳　彰）

中山古墳出土須恵器説明表

図版No.	器形	土器No.	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴
13	坏（身）	A－1	＊立ち上りはやゝ内傾し、高さは受部上面から 0.9cmを測り、先端は丸く収める。 ＊受部は短く、水平に外にのび、先端はあまい。 ＊口径は11.9cm 。 ＊体部は丸味をおび、底部はやゝ扁平。	＊底部の⅔が欠損するため定かでないが、ヘラ削り調整は施してない模様。	＊胎土は不良。細砂を含む。 ＊焼成はなま焼け気味。 ＊色調は灰白色。
13	坏（身）	A－2	＊立ち上りは内傾度が著しく、高さは 0.9cm、先端は丸い。 ＊口径は11.2cm。 ＊受部は短く、水平にのび、先端はあまい。 ＊体・底部は丸く収める。	＊ヘラ削りの痕は認められない。 ＊底部中央は粗雑な仕上げ。	＊胎土は不良。細砂を含む。 ＊焼成は良。 ＊色調は灰青色。
13	坏（身）	A－3	＊立ち上りは受部上面から 1.2cm を測り、わずかに内傾、器厚は先端に近づくにつれて急に薄くなる。 ＊受部は外上方にのび、先端は丸く収める。 ＊口径は11.9cm。 ＊受部先端から体・底部にかけて、やや内屈気味に連なり、底部中央は尖る。	＊底部は¾ほどヘラ削り調整、方向は時計逆まわり。 ＊粘土紐まき上げ自体が粗雑なため、体・底部が不自然な形を示し、内面も強く屈曲する。	＊胎土は良好。 ＊焼成も良好。 ＊色調は灰青色。
13	坏（身）	A－4	＊立ち上りは受部上面から 1.1cm、全体に内傾するが、中ほどからやゝ上方にそれて丸い先端に至る。 ＊口径は12.2cm。 ＊受部はほぼ水平にのび、先端は丸く収める。 ＊受部先端から体部にかけて丸く接続するが、底部は焼成のさい著しい歪みを生じている。	＊内・外面ともに横ナデ調整。 ＊外表底部にもヘラ削りの痕は認められず、ただロクロ回転を利用した凹線が一条めぐる。	＊胎土は良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室奥壁前より出土。 ＊〔A′－9〕蓋と1セット。
13	坏（身）	A－5	＊立ち上りは内傾度が著しく、高さは受部上面から 0.8cmを測る。先端は鋭い。 ＊口径は11.0cm。 ＊受部は、立ち上りとの境に凹線をめぐらし、水平にのびて、先端は丸く収める。 ＊受部先端と体部との境界はやゝ内屈するが、体・底部は丸く収める。 ＊器壁は厚い。	＊体部の一部と底部全面にわたって、ヘラ削り調整。 方向は時計順まわり。	＊胎土は良好。 ＊焼成も良好。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室奥壁附近より出土。
13	坏（身）	A－6	＊立ち上りは高さ 1.1cm、内傾し、先端は丸く収める。 ＊口径は13.4cm。 ＊受部は、立ち上りとの境に凹線をめぐらし、外上方にのび、丸い先端に至る。 ＊体部は、粘土紐まき上げの痕を残して屈曲し、底部は扁平をなす。	＊底部の¾ほどヘラ削り調整で、方向は時計逆まわり。 ＊底部のヘラ切りは粗雑。	＊胎土は良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰青色。 ＊〔A′－3〕蓋と1セットをなす。
13	坏（身）	A－7	＊立ち上りは内傾するが、中ほどから外方にそれ、丸く収める端部に至る。 ＊口径は13.1cm、高さ 1.1cm。 ＊立ち上りと受部の境に深い凹線をめぐらし、そのため受部の先端は上方に稜をなすかたちを示す。 ＊受部先端から体部にかけて強く内屈しつつ接続し、体・底部は丸く収める。	＊底部の⅔ほどヘラ削り調整。 方向は時計逆まわり。 ＊体部・口縁部外表、および内面は丁寧に横ナデ仕上げ。	＊胎土は良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰青色。

13	坏(身)	A－8	＊立ち上りは矮小化し、高さは 0.7cm、内傾度も著るしい。 ＊口径は11.8cm。 ＊受部は、立ち上りとの境に凹線をめぐらすが、深い部分と逆に全く認められない一部分とがある。 ＊丸く収める受部先端から体部にかけて内屈し、体・底部間は段をなして接続する。	＊底部外表は、粗雑にヘラで削り落し、その上から簡単にナデる。 ＊受部上面の凹線はヘラを立てて施す。	＊胎土は精良。 ＊焼成は良好。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室中央部より出土。
13	坏(身)	A－9	＊立ち上りは、受部上面から高さ 0.9cmを測り、内傾度が著るしく、先端は鋭く収める。 ＊受部は短く、外上方にのび、先端は丸い。 ＊口径は、11.4cm。 ＊受部と体部の境界は強く内屈し、体・底部は丸く収める。	＊底部はわずかにヘラ削りで、仕上げは粗雑、ヘラ切りの痕を残す。 ＊体部・口縁部外表、および内面は横ナデ調整。	＊胎土は不良。細砂を含む。 ＊焼成は良好。 ＊色調は灰青色。
13	坏(身)	A－10	＊立ち上りは内傾度が著しいが、先端近くで垂直をなす。 ＊口径は11.2cm。 ＊受部は水平にのび、先端は丸く収める。 ＊受部先端から体部にかけて内屈して接続し、体・底部は丸味をおびるが、一部分扁平をなす。	＊体・底部の間はヘラ削りするが、甚だ粗雑に仕上げる。 ＊内面底部中央の仕上げナデも粗雑。	＊胎土は良。わずかに石粒を含む。 ＊焼成は良好。 ＊色調は灰青色。
13	坏(身)	A－11	＊立ち上りは強く内傾するが、先端近く外にそれ、先端は鋭く収める。 ＊受部は水平に外にのび、先端はあまい。 ＊口径は、10.9cm。 ＊体部は丸味をおびるが、底部はやゝ尖った感じに収める。	＊粘土紐まき上げの痕を内・外面に明瞭に残す。 ＊底部はヘラ削りでなく、指で直かに調整したらしく、指の腹をずった痕と指紋が残る。	＊胎土は良。わずかに小石粒を含む。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰青色。
13	坏(身)	A－12	＊立ち上りは内傾度が著しく、受部上面から高さ 0.9cmを測り、先端に至って尖る。 ＊受部はやゝ外上方にのび、先端は丸く収める。 ＊口径は、11.0cm。 ＊体部は丸味をおびるが、底部は扁平に近い。	＊内面は丁寧に横ナデ調整。 ＊体・底部の境界にヘラ削り。	＊胎土精良。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は、内面は灰青色。体・底部外表は自然釉が吹き出して黄緑色。
13	坏(身)	A－13	＊立ち上りは著しく矮小化し、高さは受部上面から 0.7cmを測る。 ＊口径は、11.9cm。 ＊受部は、立ち上りとの境にヘラで深い凹線をめぐらすため、先端は上方にのびる形を示す。 ＊体部と底部は強い稜をなして連なる。	＊底部の調整はヘラを用いるが、ロクロ回転は利用せず、縦横不定方向の痕を残す。	＊胎土良好。 ＊焼成も良好。 ＊色調は灰青色。
13	坏(身)	A－14	＊立ち上りは矮小化して、高さ 0.7cm、先端は鋭い。 ＊口径11.6cm。 ＊受部は外上方にのび、先端は丸く収める。 ＊体部は丸味に乏しく、底部と明確な稜をなして連なる。	＊体・底部の間は粗雑にヘラ削りし、外表にも粘土紐のまき上げ痕を残す。	＊胎土は良。やゝ小石粒を含む。 ＊焼成は良好。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室中央部附近より出土。
13	坏(蓋)	A′－1	＊天井部は丸味をおび、体部はわずかに屈曲、口縁部はほぼ垂直をなす。 ＊口縁先端は丸く、端部内面に凹線がめぐる。	＊天井部は粗雑にヘラ削りで調整、方向は時計順まわり。 ＊内面は横ナデ。	＊胎土は良。わずかに石粒をまじえる。 ＊焼成は良好。 ＊色調は灰青色。

13	坏(蓋)	A′—2	＊天井部はゆるやかに丸味をおび、なだらかに口縁部に連なる。 ＊口縁部は外方に開き、先端は丸く、端部内面はわずかに段をなす。 ＊器厚は薄く、ほぼ一定。 ＊大型で、口径14.6cmを測る。	＊天井部は丁寧にヘラ削り調整し、ヘラ削りの方向は時計逆まわり。 ＊内面は丁寧に横ナデして仕上げる。	＊胎土は良。わずかに石粒をまじえる。 ＊焼成は良好。 ＊色調は灰青色。
13	坏(蓋)	A′—3	＊天井部はゆるやかに丸く収め、口縁部は垂直をなす。 ＊口縁先端は丸いが、端部内面は浅く広く凹む。 ＊器厚はほぼ一定。 ＊大型で、口径は14.7cm。	＊天井部はヘラ削り調整で、方向は時計逆まわり。	＊胎土は良。わずかに石粒を含む。 ＊焼成は良好。 ＊色調は灰青色。 ＊〔A—6〕身とセット関係。
13	坏(蓋)	A′—4	＊天井部は扁平をなし、体部は内屈し、口縁部は垂直。 ＊口縁先端は丸い。	＊天井部はヘラ削り。	＊胎土は良。 ＊焼成は良好。 ＊色調は薄い灰青色。
13	坏(蓋)	A′—5	＊天井部・体部は丸味をおび、口縁部は垂直をなす。 ＊口縁端部は、先端は丸く、内傾する端面を有し、凹線がめぐる。	＊天井部は雑にヘラ削り。 ＊体・口縁部外表、および内面は丁寧に横ナデ仕上げ。	＊胎土精良。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰青色。外表½ほど灰黒色。
13	坏(蓋)	A′—6	＊天井部はゆるやかに丸味をおび、天井・体部間は一部わずかに内屈する。 ＊口縁部は外方に開き気味で、先端は丸い。 ＊口径は、14.0cm。	＊天井部はヘラ削りで調整、方向は時計順まわり。	＊胎土は不良。細砂・石粒を含む。 ＊焼成良好。 ＊色調は薄い灰青色。
13	坏(蓋)	A′—7	＊天井部は丸く収めるが、ヘラ削りでやゝ扁平を示す。 ＊天井部と口縁部は丸味をおびて接続し、口縁部は垂直に先端に至る。 ＊先端は丸い。	＊天井部はヘラ削り調整。 ＊方向は時計逆まわり。 ＊内面は横ナデして仕上げる。	＊胎土良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室奥壁前より出土。
13	坏(蓋)	A′—8	＊天井部は丸味をおび、天井部と体部との境界に浅く広いくぼみがある。 ＊口縁部はわずかに外方に開き、先端は丸く収める。	＊天井部はヘラ削りで調整。 ＊方向は時計逆まわり。	＊胎土は良。 ＊焼成は良好。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室奥壁前より出土。
13	坏(蓋)	A′—9	＊天井部はゆるやかに丸く収め、口縁部はほとんど垂直をなす。 ＊口縁先端は内傾する面を有し、浅く凹む。	＊天井部は粗雑にヘラ削り、方向は時計逆まわり。	＊胎土は良。 ＊焼成良好。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室奥壁前より、〔A—4〕身とセットをなして出土。
13	坏(蓋)	A′—10	＊天井部は中央に近く扁平で、天井部から体部・口縁部にかけて屈曲をくり返す。 ＊口縁端部は内傾する端面を有し、凹線が一条めぐる。 ＊口径は、13.2cmとやゝ小型。	＊天井部中央は雑にヘラ切り、仕上げナデを施す。 ＊内面は丁寧に横ナデ調整。	＊胎土精良。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰青色。
13	坏(蓋)	A′—11	＊天井部・体部・口縁部と全体に丸味をおびる。 ＊口縁部先端は丸く収める。 ＊口径は、12.3cm。	＊天井部はわずかにヘラ削りの痕がある。 ＊体・口縁部外表、および内面は横ナデ調整。	＊胎土は良。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰青色。 ＊玄室奥壁前より、⅓欠損して出土。
13	坏(蓋)	A′—12	＊天井部はゆるやかに丸味をおび、口縁部はやゝ外方に開いて下降する。 ＊口縁先端は面をなし、口端内側は突出する。	＊天井部はヘラ削り。 ＊正円の沈線が一条めぐる。	＊胎土はわずかに石粒混入。 ＊焼成は良好。 ＊色調は内面は灰青色。外表は自然釉が吹き出してやゝ緑色。
13	坏(蓋)	A′—13	＊天井部は丸く、天井部と口縁部の境はわずかに凹む。 ＊口縁部はほぼ垂直に下方にのび、先端は丸く収める。 ＊端部内面は段をなす。 ＊口径10.5cmと超小型。	＊天井部は頂部をのぞいてヘラ削り。残りは横ナデ。 ＊天井部に3本の平行沈線が放物線状に付く。	＊胎土は石粒・細砂を含む。 ＊焼成は良好。 ＊色調は灰青色。

13	坏（蓋）	A′—14	＊全体の⅔以上が欠損。 ＊天井部は扁平、口縁部はわずかに外方へ開きつゝ端部に至る。 ＊先端は丸いが、口端部内側に段をなす。 ＊口径10.5cmと超小型。	＊天井部と体部の境はヘラ削り、残りは両面とも横ナデ調整。	＊胎土は細砂・石粒混入。 ＊焼成は良好。 ＊色調は灰青色。
13	坏（蓋）	A′—15	＊口径 9cmと超小型。 ＊天井部と体部の境界にわずかに丸味をもつもの、頂部はほぼ扁平。 ＊口縁端部は面削りが施されている。	＊天井部から口縁まで横ナデのみ。 ＊内面は全面横ナデのあと、天井部を仕上げナデ。	＊胎土は良。 ＊焼成は良好。 ＊色調は外面灰緑色、内面は灰青色。
13	坏（蓋）	A′—16	＊最大径 9.9cmの超小型。 ＊ほぼ垂直に立つ口縁体部に扁平な天井部がつく。 ＊口縁端部は、段状の面がとられている。	＊天井部と体部境目あたりヘラ削り、内面天井部に同心円状のあて木痕が残る。	＊胎土は細砂混入。 ＊焼成は良好。 ＊色調は灰白色。
13	高坏（長脚無蓋）	B—1	＊坏部¼、裾部¼が欠損。 ＊坏部は、口縁部と底部とが２段の稜とヘラ描き斜線文とによって分けられる。 ＊口縁部はわずかに外反して立ち上り、先端は丸く収める。 ＊脚柱部は細く長くのび、長方形二段透しを２方にあける。 ＊脚裾部はほゞ水平に外にのび、端部は上方にのみ突出する。	＊外表・内面とも横ナデ調整。 ＊透しの穿孔も丁寧。	＊胎土良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は薄い灰青色。
13	高坏（長脚無蓋）	B—2	＊坏部の口縁部はほぼ垂直に立ち上り、口縁部から底部にかけて、つまみ出し凸帯が２段めぐり、その間に斜行する櫛描き刺突文を施す。 ＊脚柱部は〔B—1〕に比べて短く、長方形二段透しが２方にあく。 ＊脚裾部は外下方にひらき、端部は下方にのみわずかに突出する。	＊外表・内面ともに丁寧に横ナデ調整。	＊胎土は良、わずかに細砂をまじえる。 ＊焼成良好。 ＊色調は濃い灰青色。
14	高坏（無蓋）	B—3	＊坏部の⅔が欠損。 ＊口縁部は長く、垂直に立ち上り、先端はやゝ尖る。 ＊脚柱部は太く短く、透し孔は見られない。 ＊脚裾部はつよく外下方にひらき、端部は下方にのみ三角に尖る。	＊坏底部がヘラ削り調整。あとは横ナデ。 ＊内面は自然釉が吹き出して判明しないが、おそらく横ナデ。	＊胎土良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰黒色。
14	高坏（無蓋）	B—4	＊坏部と脚柱部をわずかに残して、以下欠損。 ＊口縁部はわずかに外反しつゝ立ち上り、先端は丸く収める。 ＊底部は丸味をおびる。 ＊脚柱部に透し孔はなく、凹線が一条めぐる。	＊坏底部がヘラ削り、あとは横ナデ調整。	＊胎土良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰黒色。
14	高坏（短脚有蓋）	B—5	＊坏部立ち上りは内傾し、受部上面から高さ 1.0cmを測り、口縁先端は丸く収める。 ＊受部はわずかに外上方にのび、先端は丸く収める。 ＊底部は丸味をおびる。 ＊脚柱部は短く、外方に下降し、裾部は柱部を受けてより開くが、端部は内屈して先端に至る。 ＊脚裾部に円形の透しが二方にあく。 ＊接地面は内方を向くため外先端部のみ着地し、内先端部は突出する。	＊坏底部はヘラ削り調整。 ＊脚部のはりつけは丁寧。 ＊坏底部以外は丁寧に横ナデして仕上げる。	＊胎土良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰青色。

14	高坏（短脚有蓋）	B－6	＊坏部の⅔、脚裾部の⅓が欠損。 ＊坏部立ち上りは内傾し、高さは10.0cm、先端は丸く収める。 ＊受部はやゝ外上方にのび、先端は丸い。 ＊脚柱部と裾部はまっすぐ連続して外方に開く。 ＊接地点は浅く広く凹んで外方を向き、内先端部のみ着地、外先端部は甘い。 ＊脚裾部に不定形の透しが３方にうがつ。	＊坏底部はヘラ削り調整、坏内面中央に同心円叩き文がつく。 ＊その他は横ナデ。 ＊脚裾部の不定形透しは、粗雑に穿孔。	＊胎土良好。 ＊焼成も良好。 ＊色調は灰青色。
14	鼎	C－1	＊口頸部以上が欠損。 ＊体部はほゞ球形。 ＊最大径 6.4cmと超小型。	＊体・底部はヘラ削り調整。 ＊肩部にカキ目。	＊胎土は細砂を含む。 ＊焼成は良好。 ＊色調は灰青色。
14	短頸壺（有蓋）	D－1	＊口縁部は短く、垂直に立ち、先端は丸く収める。 ＊体部は肩の張りがきつく、無文。底部は丸く収める。	＊口縁部・肩部・体部は横ナデ調整。 ＊内面も同様。 ＊底部はヘラ削りで、方向は時計逆まわり。	＊胎土は良。わずかに石粒混入。 ＊焼成良好。 ＊色調は灰青色。
14	直口壺	E－1	＊口頸部は、はじめわずかに外反気味で、中ほどから垂直に立ち上る。 ＊体部はほゞ球状。 ＊口頸部・体部とも一切施文しない。	＊底部はヘラ削りするが、ロクロ回転を利用したものではない。 ＊その他は横ナデ調整。 ＊内面底部中央は粘土紐のまき上げの痕を仕上げナデせず、そのまゝ残す。	＊胎土はわずかに石粒混入。 ＊焼成良好。 ＊色調は淡い灰青色。 ＊玄室奥壁前より出土。
14	壺	F－1	＊全体の¾欠損。 ＊体部最大径11.3cm。 ＊口頸部は外反。 ＊口縁部内外に段をつくり、先端は尖って、断面は鏃状を呈す。 ＊肩部はやゝ張り出し、体・底部は丸く収める。	＊内・外面とも横ナデ調整。 ＊底部の仕上げは、欠損して不明。	＊胎土は良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰黒色。
14	壺	F－2	＊口頸部は短く、外反しつゝ立ち上がり、口縁部に浅い凹線がめぐり、内側は稜をなして底部に至る。 ＊口径 6.0cm。	＊体部・底部はヘラ削り調整。	＊胎土は精良。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は下半分が灰青色、上半は自然釉が吹き出して黄緑色。
14	壺	F－3	＊口縁部および肩部の一部欠損。 ＊肩部はやゝ張り出して最大径11.3cmを測り、体・底部は丸く収める。	＊肩部はカキ目、体部はヘラ削り調整。 ＊内面は横ナデ。	＊胎土はわずかに石粒混入。 ＊焼成は良好。 ＊色調は灰青色。
14	壺	F－4	＊体部に比して口頸部は長く、やゝ外反して立ち上り、口縁部は垂直をなす。 ＊肩部の張り出しはやゝ強く、最大径を測る。 ＊口径 7.1cm、器高 8.7cm。	＊口縁部から体部にかけてカキ目調整。 ＊底部はヘラ削りするが、ロクロ回転を利用しない。 ＊底部内面中央に、粘土紐まき上げの痕をそのまゝ残す。	＊胎土良好。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は濃い灰青色。
14	壺	F－5	＊口縁部は短く、やゝ外反して立ち上り、端部は丸く収める。 ＊口縁部は体部の中心からわずかにずれて付く。 ＊口径 3.6cm、器高 6.4cm、体部最大径 7.6cmと超小型。	＊口縁部と肩部にカキ目。 ＊体部はヘラ削り。	＊胎土はわずかに石粒混入。 ＊焼成は堅緻。 ＊色調は灰青色。
14	壺	F－6	＊全体の⅔欠損。 ＊最大径 8.0cmと超小型。 ＊体部はほゞ球形につくり、口頸部は外反気味に立ち上る模様。	＊底部はヘラ削り調整。 ＊その他および内面は横ナデ。	＊胎土はわずかに細砂混入。 ＊焼成良好。 ＊色調は灰青色。
14	壺	F－7	＊口頸部、および肩部の一部欠損。 ＊肩部はやゝ張り出し、最大径 7.4cmを測る。	＊肩部に斜行する刺突文。 ＊底部は粗雑にヘラ切り。	＊胎土は細砂混入。 ＊焼成は良。 ＊色調は薄い灰青色。

14	提瓶	G－1	＊体部の側面が一部欠損。 ＊頸部はやゝ外反して立ち上り、口縁部は垂直にのびて、丸い先端に至る。 ＊肩部両側に環状の把手が付くが、欠損。 ＊体部はほゞ正円をなす。 ＊体部前面のふくらみは顕著で、背面のふくらみは少ない。	＊体部前面は回転を利用してカキ目調整。	＊胎土は細砂・石粒を含む。 ＊焼成良好。 ＊色調は灰黒色。器表に自然釉が吹き出して、やゝ緑色。
14	提瓶	G－2	＊口頸部、体部⅓欠損。 ＊肩部両側に環状の把手が付くが、一方は欠損。 ＊体部前面のふくらみはわずかで、背面もやゝふくらむ。	＊体部前面は回転を利用してカキ目調整。 ＊背面と側面の接合部はヘラ削り。	＊胎土精良。 ＊焼成は良好。 ＊色調は灰青色、一部灰黒色。

参考文献

田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ。

横山浩一「手工業生産の発達―土師器と須恵器―」・「古墳時代須恵器の編年略表」(『世界考古学大系』日本Ⅲ、古墳時代)。

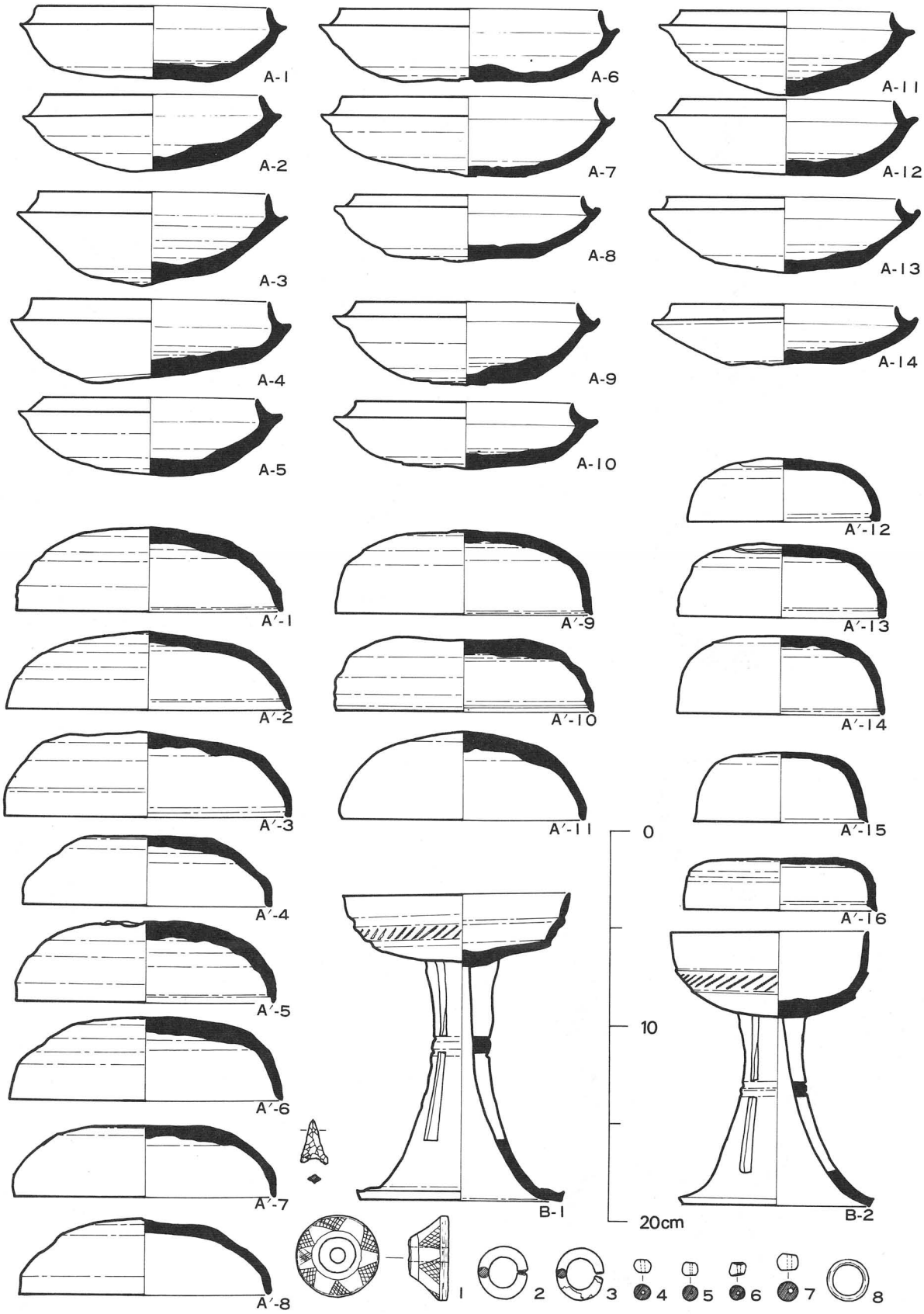


図13　中山古墳出土遺物実測図(1)

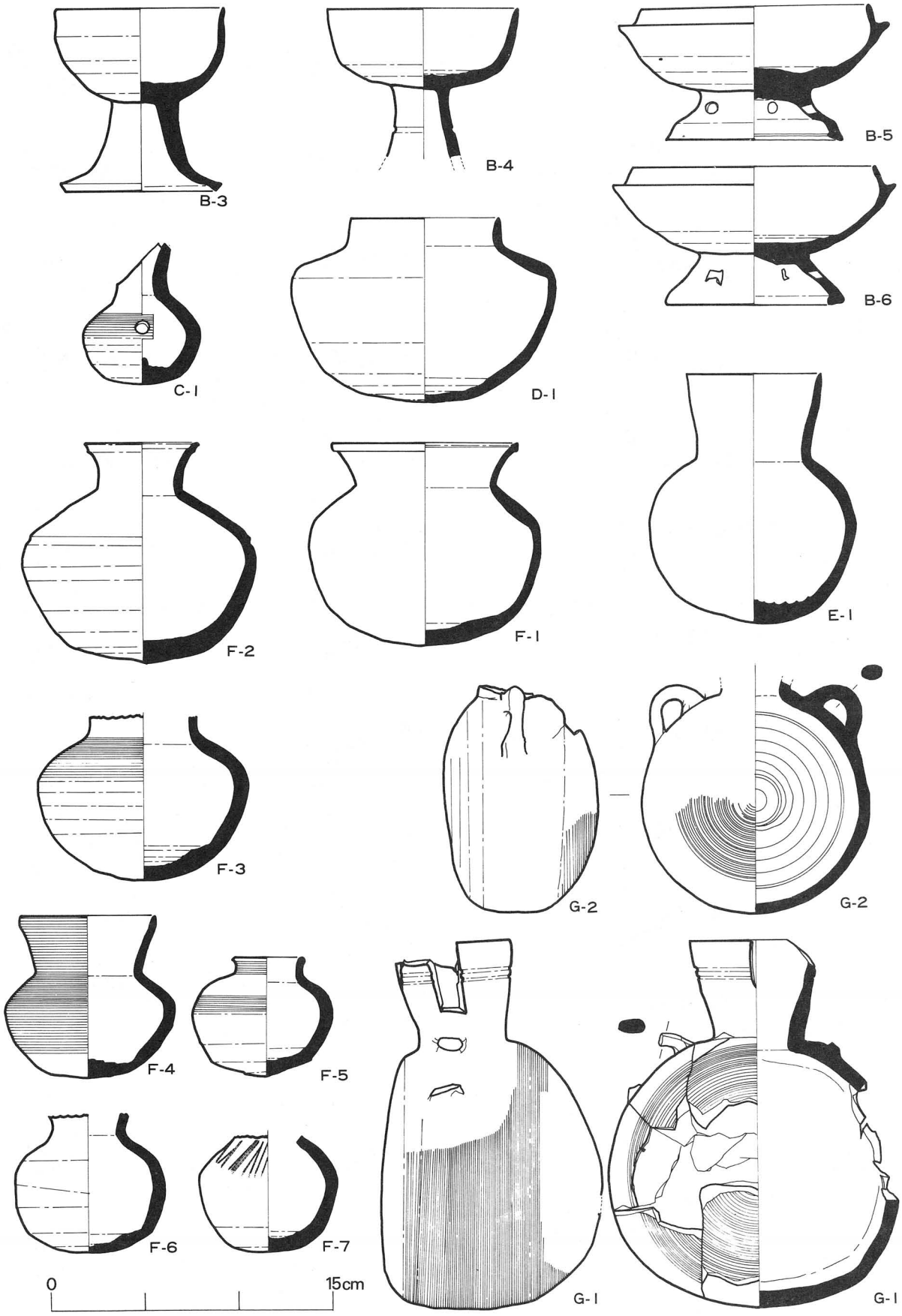


図14　中山古墳出土遺物実測図(2)

4. 結　　語

前述のように当古墳では3次にわたる埋葬が行なわれたと考え得る。遺物の出土状態をみれば、石室内より出土したものでは、奥壁部の坏2点が6世紀後半に比定されるものであり、石室中ほどから前半部にかけてのものは第2次、第3次埋葬時のものと思われる。発見者によって採取された30数点の須恵器類は、3次のものが混在している。これらのうち調査後発見されたものは、副葬時の位置をそれほど変えていないものと思われる。ここで棺体の置かれた位置を示唆するのは、ガラス製小玉と、金環の出土位置である。前者は石室床面上数センチの範囲内に、径30～40cmの円内にその全てが発見されたのであるから、遺体の位置を示しているものと思われる。次に金環は小玉より西で発見され、ほぼ同一レベルに10cmほどの間に置いて出土した。これは小玉とは 2.2m の位置にあるのだから、別の被葬者のものと思われる。また奥壁においては、坏と共に鉄環が発見され、これは第一次の被葬者のものと思われる。

以上のことから、当古墳では遺物の出土状態から見ても3次にわたる埋葬が推定し得るのである。石室の構築年代は、第一次埋葬の時からして、6世紀後半と考えるのが妥当であろう。

当古墳は諸頭山古墳群のうち先年調査されたものより、築造年代がわずかに早いものと考えられるが、果して古墳群を形成していたものであろうか。中山では以前から古墳の分布は知られておらず、また地図、空中写真等によっても、全域が後世の削平を受けているために、判断し得ない。しかしながら、付近に分布する船崎山古墳群、諸頭山古墳群とも、4基～7基ほどを数えるのだから、当中山でも、後期古墳群として数基の分布があったとしてもよい。調査中、トレンチを掘った部分では、黒色土より、かなりの数にのぼる須恵器類が出土している。即ち、後世の削平によって、数基の古墳が破壊された可能性は考えられるのである。今回調査された石室でも、わずかに石室最下段を遺存するのみであったことを考えると、他には完全に破壊されたものもあったとも考えられる。

（鬼柳　彰）

第3章　上ノ山古墳群

はじめに

当報告書は、7基より構成される上ノ山古墳群のうち北陸自動車道の路線内にかかる1号墳及び2号墳の発掘調査記録である。調査は京都産業大学考古学クラブの協力を得て実施し、地元教育委員会、坂口区の方々の多大な援助を得た。また、地元の文化財専門員平野市介氏には当古墳群出土資料や附近の遺跡分布に関する情報の提供を受けた。最初に記して謝意を表します。

1．位　置　(図15)

上ノ山古墳群は行政上、滋賀県伊香郡余呉町坂口上ノ山に属する。姉川本流、高時川、草野川、余呉川等の諸河川で形成された湖北平野はその北端を木ノ本町黒田附近で集束し、以北、すなわち余呉川上流は伊吹山地の断層谷である柳ガ瀬地溝帯へと続く。地溝帯の南方、今市、中ノ郷及び下余呉にかけては盆地状の小平野が形成されているが、下余呉以南黒田以北にかけては東の大箕山、西の大岩山にはさまれて再びせまい谷筋を形成している。この狭い谷筋に坂口の集落があり、上ノ山古墳群は谷筋の東側、大箕山の西側山裾に位置する。大箕山は標高532mで、周囲に幾つもの舌状台地を張り出しているが、上ノ山古墳群はその東側中程の一つの端部に形成され、標高 156m～163m の間にある。

坂口の地は、余呉川に沿って北上し、柳ガ瀬越から橡木峠、木ノ芽峠を経て越前国に至る古来よりのルートである北国街道の南の基部にあたり、交通路の要所である。福井県武生市まで約40kmの里程である。

2．歴史的環境(図15)

広大な湖北平野はその北端を木ノ本町黒田にもつが、その北方、余呉川の中、上流域では、下余呉から今市にかけての間で小盆地状の平野部を見る以外、狭い断層谷があるだけである。その他では、中ノ郷から東に入って下丹生、上丹生にわずかな谷平野を見るにすぎない。遺跡の分布もこの小盆地と谷平野部に限られ、余呉川上流の柳ガ瀬地溝帯には現在のところ知られていない。

まず、古墳の分布であるが、余呉川東岸で、上ノ山古墳群に南隣する丘陵尾根上に東野古墳群（円墳4基)、北隣に大門古墳（円墳、横穴式石室）があり、北上して、下余呉に北畑古墳群（円墳数基)、崩れ谷古墳、中ノ郷に日槍塚古墳（円墳)、今市に孤塚古墳（円墳)、塚谷古墳（円墳）と続く。余呉川の西岸では、現在のところ、上ノ山古墳群の西面、大岩山の東側の一支丘に円墳6基（内2基に横穴式石室確認)、小谷をはさんで北隣の支丘端で円墳1基、さらに、これらの両支丘の基部で前方後円墳かと思われるもの1基を発見したのみで、余呉湖北方において、確実な古墳の存在を知らない。また、この古墳群の南方では、大岩山の南側の一支丘上に木ノ本町黒田古墳群（円墳6基）が存在するだけである。従って、北国街道沿いでは、その入口たる大箕山と大岩山の両丘端

に集中して分布し、北方では、余呉川東岸に限って点在するという状況を示している。これら諸古墳の年代は、知り得る限りで、横穴式石室を有し、又、須恵器の出土を見ている。古墳群中に前方後円墳かと思われるものを含むが、そのクビレ部に当る部分に大型の石材が露頭しており、あるいは横穴式石室を有する可能性の強いものである。従って、おおよそ、後期古墳と考えてよく、北国街道の必要性に関する政治的な背景を示唆するものとして興味深い。

これら諸古墳よりさかのぼる古墳の存在は、現在のところ知らないが、東尾古墳群の南側台地小字桜内で土師器を中心とする1万平方メートル以上に及ぶ散布地を確認した。北国街道沿いの集落跡としては、下余呉の余呉川西岸で蔵方遺跡が知られているが、出土遺物は須恵器の平瓶、埦等で、古墳時代後期である。新たに発見した桜内遺跡は、土師器片を中心として散布しており、蔵方遺跡よりさかのぼる可能性が強く、周辺諸古墳の出現に先行する集落跡の発見は、今後この地域の発展過程、すなわち、北国街道の街道筋としての位置を考える上に重要な問題を提示するものと思う。

弥生時代までさかのぼる遺跡は、余呉川沿い（北国街道沿い）において、現在のところ知らない。ただ、中ノ郷より東に入り、丹生川の上流、下丹生において、弥生時代土器を出土するにすぎない。また、縄文時代遺跡は皆無であるが、今回調査した上ノ山1号墳の封土中より、後期の土器片が出土しており、今後、その周辺で発見される可能性が出てきた。

以上、北国街道沿いにおいて、現在のところ、遺跡の中心は古墳時代にあるといえる。主に古墳の築造は、後期に下り、街道の東側で坂口から今市までに点在し、また、入口たる大箕山、大岩山の南半山裾に4～8基からなる古墳群が各2カ所ずつ存在し、北国街道の歴史的な位置づけに重要な意味を持っようである。これら古墳の被葬者達の生活基盤たるべき集落跡についても、古墳時代後期の蔵方遺跡の他、前期までさかのぼる可能性の強い桜内遺跡が発見され、今後、この地域の調査如何によって、余呉川沿いの歴史的な発展過程、延いては、北国街道の歴史的な位置付けが可能になろう。

3．上ノ山古墳群（図16）

上ノ山古墳群は現存数6基の円墳から構成されている。標高およそ 163mから156m の間に、舌状台地を取り囲むように、その端部に築成されている。各古墳の規模は墳丘径10～18mと小さい。1号墳と5号墳とが比較的大規模なもので、墳径16～18mを計り、また、1号墳が古墳群中最高所に位置し、5号墳は最低所にある。3号・4号・6号の3墳は墳径15mで、ほぼ同一等高線上に並ぶ。2号墳は径11mと最も規模が小さく、3号墳等より若干高位にある。各古墳の位置関係については、2号墳と3号墳、4号墳と5号墳が墳丘裾を接して位置し、1号墳と6号墳とは隣接するものと若干の距離を持っている。主体部の構造については、今回調査した1号墳と2号墳は入口を南面させた横穴式石室であることが明らかとなったが、他のものについては、3号墳が墳頂部の大きな陥没壙と石材が露頭しているところから横穴式石室であることが確実である。4～6号墳については、いずれもほぼ完存しているところから明瞭でない。

以上は当古墳群の現状であるが、5号墳と6号墳の北側で、現在開墾して水田となっている所で、開墾時に遺物の出土を見たという教示を得た。その位置は、およそ標高 150m附近で、5号墳よりも低位にあったことになる。出土遺物は須恵器杯1点、蓋2点の他に直刀らしい鉄製品もあったという。また、開墾時には石材はなかったとのことであり、木棺の直葬墳であった可能性が強い。出土遺物は6世紀前半のものであり、後述するが、1

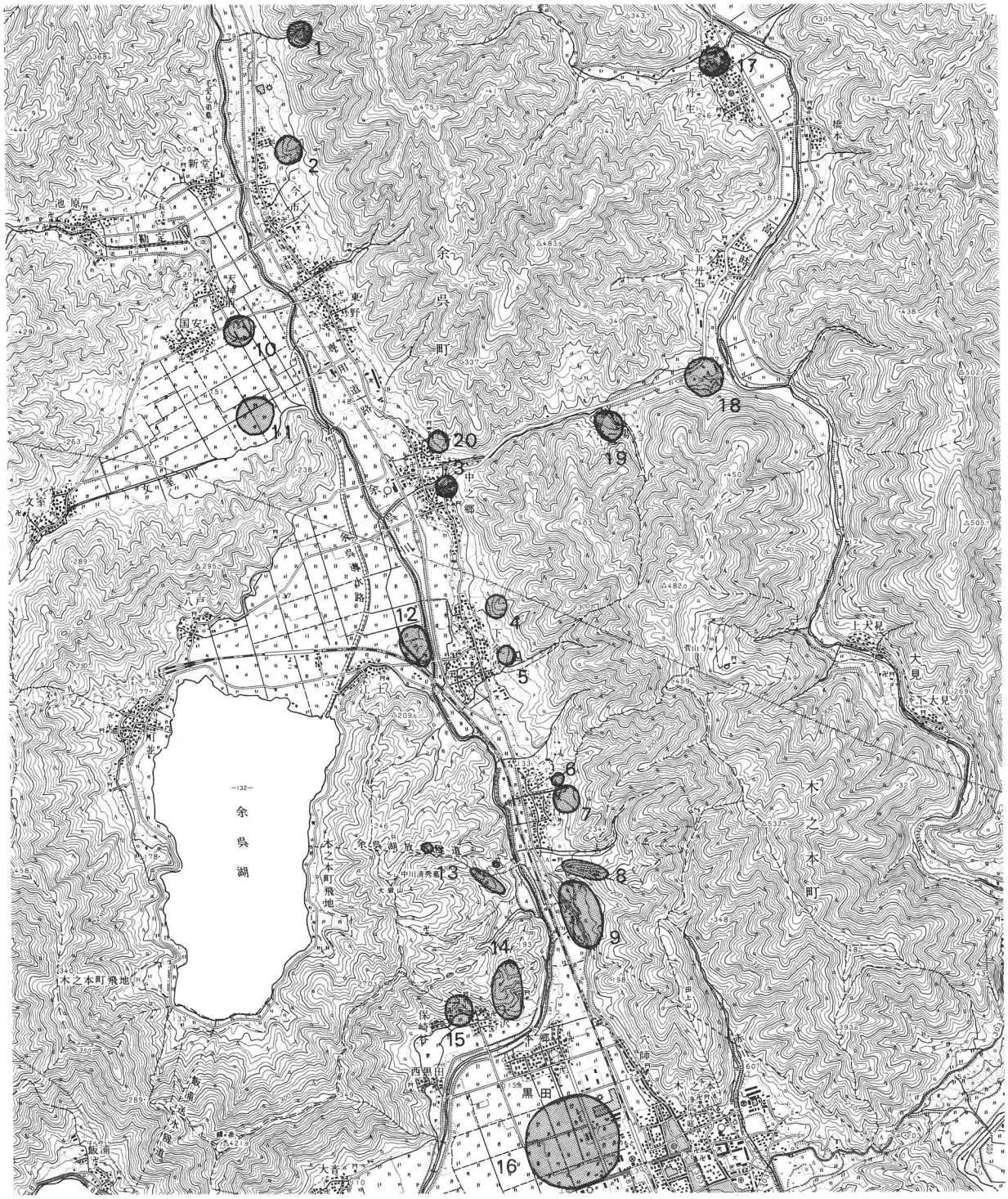


図15　上ノ山古墳群位置図

NO	遺跡名	所在地	立地	種類	時代	備考
1	塚谷古墳	余呉町今市		円墳	古墳時代後期	
2	狐谷古墳	〃 〃		〃	〃	
3	日槍塚古墳	〃 中ノ郷大将軍		〃	〃	
4	崩谷れ古墳	〃 下余呉崩れ谷		〃	〃	
5	北畑古墳群	〃 〃 北畑		円墳数基	〃	須恵器提瓶・台付壺・勾玉・金環
6	大門古墳	〃 坂口大門		円墳	〃	横穴式石室
7	上ノ山古墳群	〃 〃 上ノ山	丘稜端部	円墳7基	〃	本報告書
8	東尾古墳群	〃 〃 東尾	丘稜尾根	〃 4基	〃	
9	桜内遺跡	〃 〃 桜内	台地	集落跡	古墳時代前期	土師器片散布
10	松田遺跡	〃 〃 東野	平地	〃	奈良時代	須恵器・土師器・墨書土器
11	ナラ寺遺跡					
12	蔵方遺跡	〃 〃 蔵方	平地	集落跡	古墳時代後期	須恵器平瓶・埦
13	西山古墳群	〃 〃 坂口	丘稜尾根	円墳8基	〃	
14	黒田古墳群	木ノ本町黒田森崎山	丘稜尾根	円墳数基	〃	
15	黒田観音堂遺跡	〃 〃		寺院跡		
16	黒田遺跡	〃 〃	平地	集落跡	弥生時代	
17	高木塚遺跡	余呉町上丹生				
18	下丹生遺跡	〃 〃 下丹生	台地	集落跡	弥生時代	弥生式土器
19	榎尾遺跡	〃 中ノ郷榎尾		窯跡？		
20	笠山遺跡	〃 〃 笠上	山腹	墓跡	室町時代	中世古墓2基・土堀墓1基・灯明皿・管玉・勾玉

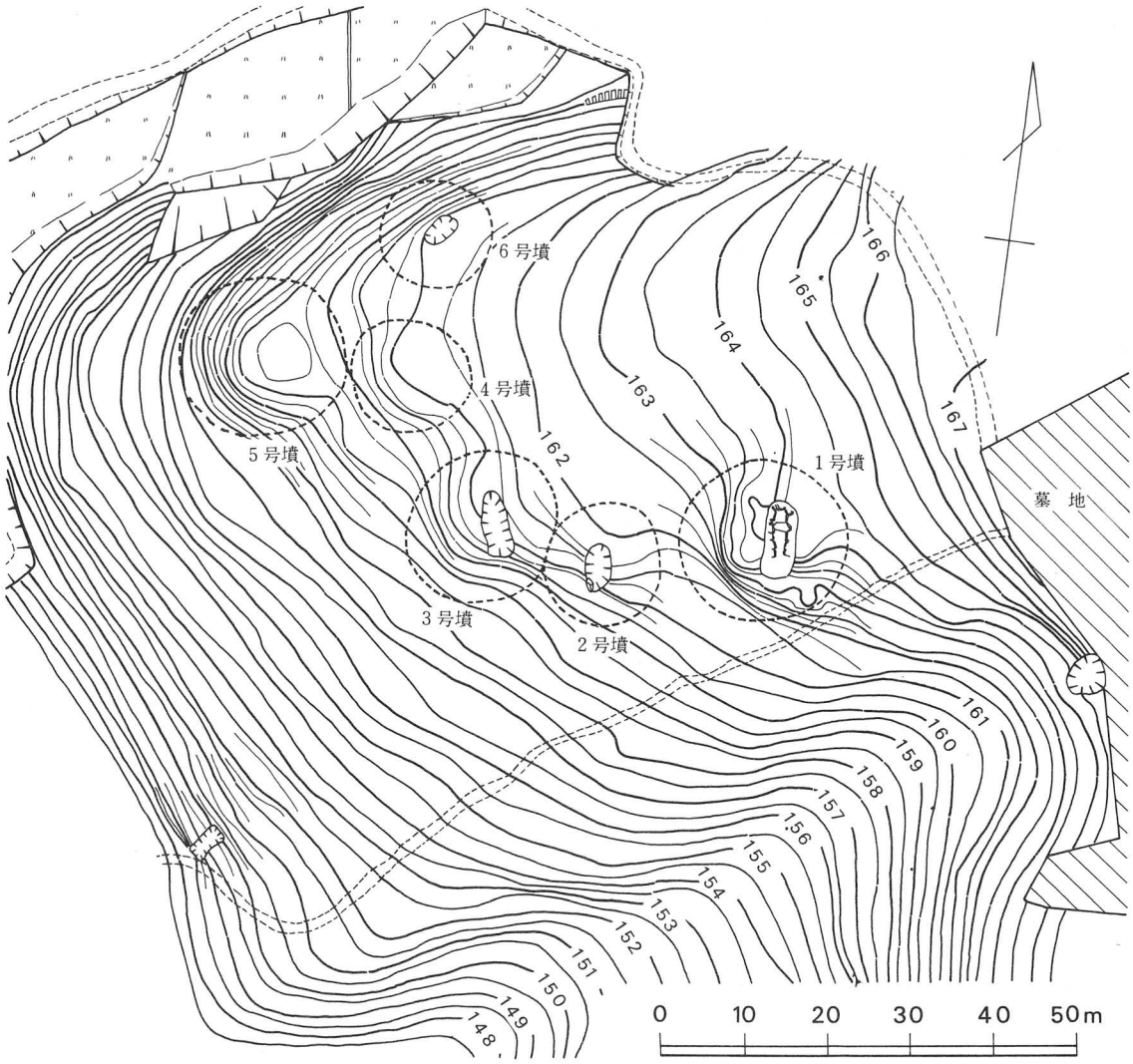


図16　上ノ山古墳群地形測量図

号墳が6世紀後半後葉のものであるところから、当古墳群形成初期の段階と以後との葬法形態の変化は注意すべき点である。

以上、当古墳群は、本来7基から構成されていた古墳群であり、その形成は6世紀前半にまでさかのぼるものである。

4．上ノ山1号墳(図17)

1号墳は群中最高位にあるもので、群の東端に位置している。調査前に、すでに盗掘を受けており、ずり落ちかけた天井石と玄室側壁の一部が露頭していた。しかし、一枚であるが天井石が遺存しているところから石室の遺存状態は良好であると思われ、墳丘もほぼ完存していると思われた。

調査は、まず、被掘壙内の埋土の除去作業から開始し、石室の輪郭を明瞭にすることにつとめた。次いで、石室の主軸に直交する方向と並行する方向の3カ所のトレンチを墳丘に設定し、各トレンチの断面土層の観察から

墳丘の築成方法を追求した。

1） 墳　丘　（図18）

墳丘径16.6mの円墳である。墳丘高は、墳丘が南西方向に下る緩斜面に築造されているため、高所側で 1.0m、低所側で 2.4m を計る。

外部施設としての葺石や列石等を持たず、また、周溝等も見出し得なかった。

以下では、石室中軸線に直行する東及び西トレンチ、並行する北トレンチの３カ所の断面土層の観察結果をのべ、石室の構築と墳丘の築造との関係に触れることにする。

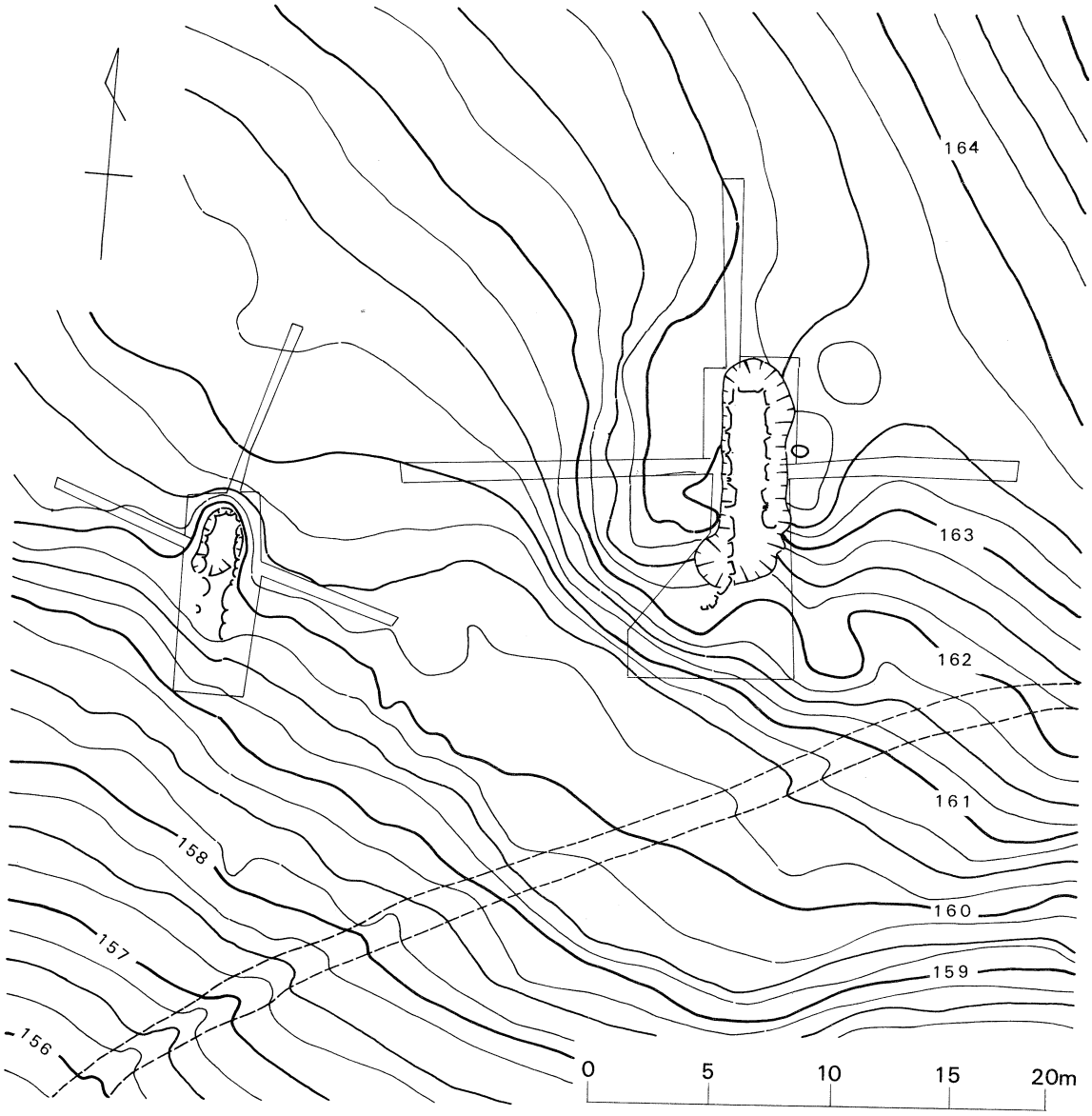


図17　上ノ山１号墳、２号墳、墳形測量図

Ⅰ）東トレンチ

東トレンチは台地緩傾斜面の高所側に当り、自然傾斜面を最高約１ｍ程の深さで、巾約６ｍの範囲にわたって掘搾し、掘搾面がほぼ水平になるように整地している。自然傾斜面の整形は石室を構築すべき部分に及び、東側壁の部分で、さらに、約80cmの深さに掘り込んでいる。この掘り込みは、西トレンチの断面土層の観察で、石室の西側壁下面で自然傾斜面に移行している。

石室の高さは、天井石の遺存状況から考えて、約1.8ｍを計り、東トレンチの部分では、下段を高さ約80cm、上段を約１ｍの二段の石材を用いて構成している。墳丘の築成はこの側壁石材の構築と密接な関連を有している。下段石材は自然傾斜面の掘り込みの内側に設置されるが、石材の規模が掘り込みの深さとほぼ等しく、石材後方に生じた掘り込み内の空所に６層（図18―東トレンチ断面土層図の３～７、以下土層番号のみ記す）にわたる版築状の土砂の充填がなされる。これは掘り込み壁を利用して石材を固めたものであろう。上段の石材は下段石材の後方を埋めた土層上に及ぶ大型石であるが、この石材の後方にも巾約1.9ｍにわたり７層（９～13）の盛土が４半円形状になされ、石材の外側からの押えとしている。

この二段階の盛土で石室側壁石材の積み上げが終了するが、次いで墳丘の形状を形成すべく２層（14～30）の盛土がなされる。この場合、最厚85cm程を計り、ほぼ二段目側壁石材の高さに等しく盛土し、さらに、側壁石材附近では高さを40cm程減じている。この段落内側には６層（33～38）の版築状の盛土が厚さ約60cmにわたってなされている。段落内側の盛土については、ちょうど側壁石材後方の盛土法と同様のものであるが、この部分は側壁はなく、天井石が設置されるべき高さであり、従って、この盛土は天井石の周囲を固めるべく盛土されたものと考えられる。また、14～32までの盛土は墳丘の盛り上げを意図するとともに、その高さを側壁高にあわせているところから、天井石の運搬に供すべく盛土されたものと思われる。

以上の過程を経て側壁の積み上げ、天井石の設置が終り、石室が完成するが、墳丘の形成については、まず39～44の盛土を行なって墳形を整える。この場合、盛土は天井石上面を同時に覆いかくさず、天井石の外周附近で終っている。すなわち、東トレンチの断面土層の観察によって、これら天井石の外周でとどまり、また、遺存高で約20cmにわたって高さを減じ、天井石の外周も含めてその上方に凹所を形成していたと考えられる土層を検出し得たのである。そして、さらに、この凹所に充填されたと思われる44・45の２層を観察し得た。従って、墳丘の最終的な形成に、天井石上方を除いた39～44の盛土の段階がまずあり、最後に45・46の盛土で天井石を覆いかくし、墳丘を完成させたようである。

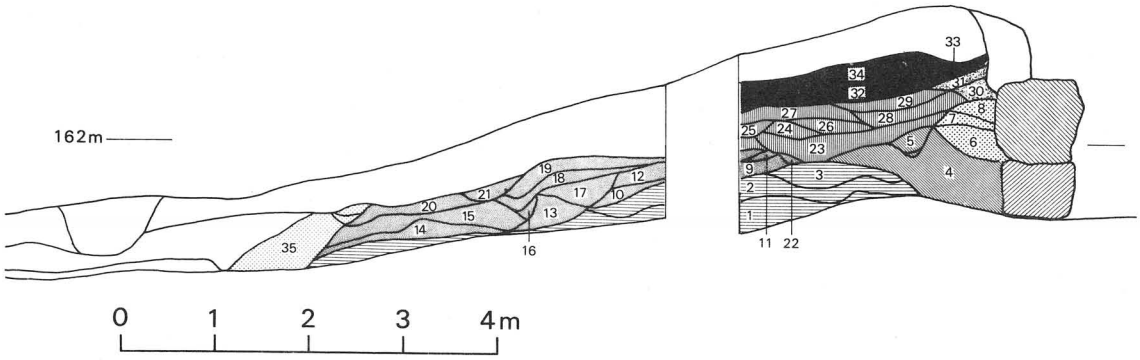


図18　上ノ山１号墳墳丘断面実測図

Ⅱ）西トレンチ

西トレンチでは、墳丘基盤が自然傾斜の低位側に当るため、地山の整形はほとんどなされておらず、自然傾面が残っている。

石室の側壁石材は二段分が遺存しているが、石室高からして、本来三段積みの側壁であったことが知れる。側壁の構築と墳丘の築成との関係は東トレンチの所見と基本的に同様であるが、墳丘基盤たる地山面に整形がなされていないこと、側壁石材が三段積みであること等の点で若干の差異が認められる。

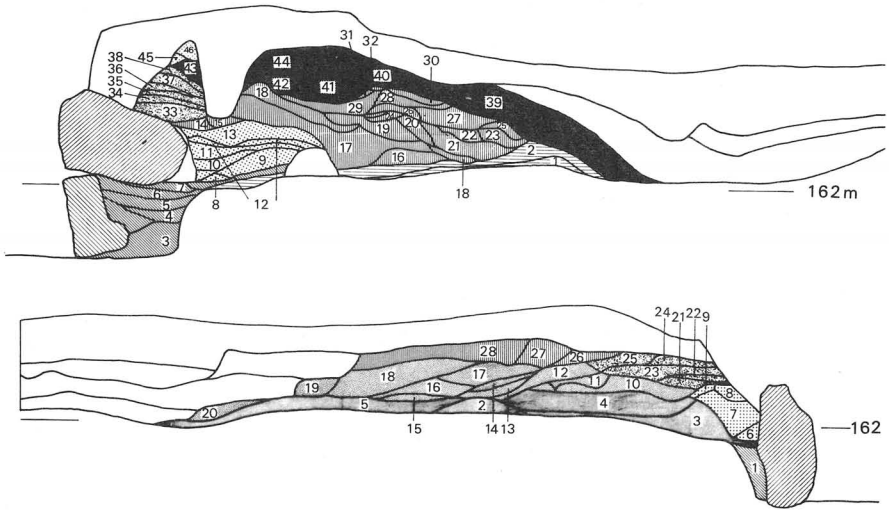
墳丘の盛土は、まず、側壁最下段石材後方に巾１ｍ程の空所を残して１～３（図18－西トレンチ断面土層図土層番号、以下同じ）の盛土がなされている。この３層は最厚60cm程であるが、その高さは下段石材の高さに等しい。次いで石材後方の空所に４・５の土砂が充塡されている。１～３の３層は東トレンチにおける自然傾斜面の石室部分における段落の役割りを負わせているものと思われる。

下段石材後方の固めのための盛土が４・５であるが、この土層は巾約1.9ｍ程、最厚70cm程有り、下段石材の高さより30cm程高かくしている。また、中段石材後方に当る巾60cm程の部分では石室内側に向って漸次厚さを減じ、側壁に接する部分で、ほぼ下段石材の高さと等しくしている。従って、中段石材後方に巾60cm程の凹所が形成される。この凹所に６～８の３層を約70cmの厚さに充填して中段石材の後方固めとしている。この石材後方を固めるため凹所を設ける盛土法は東トレンチでは、下段石材部分の自然傾斜面の段落がそれに当るが上段石材後方の盛土では認められないものである。

１～３層の上方には９～22の墳丘裾近くまで及ぶ盛土がある。巾5.3ｍ、厚さ70cmにわたるものであるが、高さについては1～3の3層よりわずかに高い程度であり、墳丘を高かくするものであるとともに、石室側壁の中段石材の運搬をも考慮した盛土であろう。従って、この盛土は中段石材後方の６～７の盛土に先行してなされたものと考えられる。

９～22と４～８との間に23～29の土層がみられる。高さは中段石材とほぼ等しい程度であるが、石材後面まで及んでおらず、巾70cm、深さ20cm程の凹所をつくっている。この凹所に30・31の盛土がある。一部中段石材の後方にかかるが、大半は中段石材以上にあり、やはり、上段石材後方の固めの盛土である。

32～34は東トレンチの39～44に当るものと思われる。35は墳丘途中で欠失しているが、東トレンチから見る限り、32～34と同一段階、すなわち、墳形を形成すべき東トレンチの39～44の盛土の段階にあたるものと思われる。



Ⅲ） 北トレンチ

墳丘基盤の自然傾斜面の整形は認められない。石室を構築すべき部分では、東トレンチ同様約90cmの深さに掘り込み、段落を設けている。北トレンチは石室の奥壁に対して直交するトレンチであるが、奥壁石材に一枚石が使用され、その規模は側壁に対して1.5～2倍の高さを有している。この石材の大きさのためか、石材後方の固めの盛土に、東・西両トレンチで認められなかった2回にわたる盛土がなされている。まず、東トレンチ同様に、石材後方の段落内に生じた空所に土砂（図18－北トレンチ断面土層図の1、以下土層番号のみ記す）が充塡される。奥壁石材の高さは1.3m程あるため、空所への土砂の充塡は石材の2分の1程にしか達していない。石材上半分に対しては、西トレンチにおける下段石材に対する盛土法をとっている。すなわち、石材上半分後方に巾70cm、深さ40cm程の空所を残して、墳丘裾部に対する2～5の盛土を行ない、次いで、空所に6－7の土砂を充塡して奥壁石材上半分後方を固めているのである。

奥壁は石室高から判断して、下段石材の上方にはもう一段の積み上げがあったと考えられる。このことは、巾1.5m、厚さ30cmにわたる21～25の盛土の遺存からも、奥壁が石材の二段積みで構成されていたことが知れる。この場合も10～20の土砂を奥壁下段石材の高さ程に置き、上段石材の運搬を考慮している。

これら土層の上方に26～28の3層にわたる盛土の遺存をみたが、これは東トレンチの39～44、西トレンチの32～34に対応し、天井石上面を除く墳丘形成時の盛土と考えられる。しかし、北トレンチの場合、この盛土は墳丘裾部を形成しない。

2） 主体部（図19）

主体部は南面する入口を持つ両裾の横穴式石室である。墳丘のN―Sの中心線に対し、それにほぼ接して東側に構築されている。また、自然傾斜面に対して約40度ほどのかたむきを持つ。

Ⅰ） 石室規模

石室床面における内法規模は、全長7.68m、玄室長3.84cmを計り、玄室と羨道の長さはほぼ等しい。玄室巾は奥壁に接する部分で1.28m、中央で1.56m、玄門部で1.44を計る。羨道は玄室に接する部分で1.18mを計る。東側壁が一部破壊されていて入口の巾は不明だが、西側壁が遺存しており、復原すると1.44mを計る。

なお、羨道は、西側壁で、4石までが直線的に配列され、これより外方で弧状の列石が遺存している。羨道長は側壁が直線的に広く4石目までの計測値である。弧状列石までを含めると5.32mを計る。

石室の高さは天井石が完存していないため明らかでないが、玄室に遺存していた天井石の状況より、玄室で約1.8mを計ることができる。羨道については明らかでないが、東側壁で二段積みの部分が遺存していたが、墳丘の状況、玄室との対比から、この高さで羨道の高さとでき、約1.45mを計る。

Ⅱ） 床面

礫敷き、間仕切り、排水溝等の施設は検出できなかった。すでに盗掘を受けているが、本来なかったようである。

床面は自然傾斜面を東トレンチで約80cm、西トレンチで26cm、北トレンチで約90cmの深さに掘り込んで形成されたものである。ほぼ水平であるが、わずかに1.5度程入口に向って傾斜している。入口外方では床面レベル以下の自然傾斜面が不整形に残されており、従って、急角度で傾斜している。

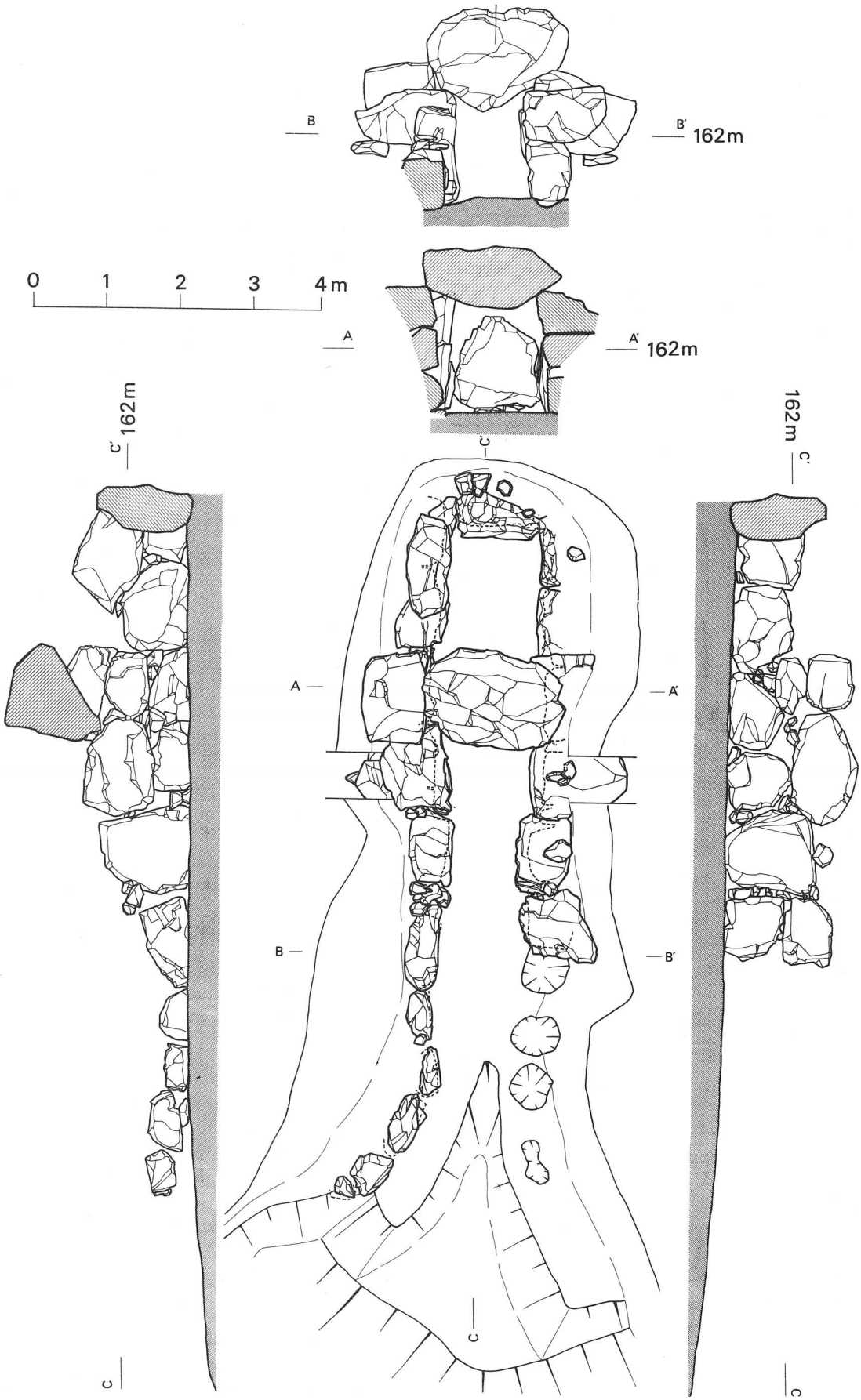


図19　上ノ山１号墳石室実測図

Ⅲ） 玄　　室

各側壁の下部は完存し、東西両側壁において、一部に最上部までの完存を見た。また、この完存部分で、ずれてはいるが、天井石が遺存していた。

奥壁は最下段に扁平な大型石材を使用している。

側壁は東西両壁とも下段に４石を用い、２～３段積みで構築している。下段は、概して長方体の石材を用い、横位に置いている。石材相互の重なり具合等から判断すると、まず、奥壁を両側からはさみ込むように置き、次いで、一石分をあけて置かれる。このあと、空所に石材を置いて玄室の輪郭を完成している。石材の規模は、東側壁ではほぼ大同小異で、高さは奥壁のほぼ３分の２程度のものを用いている。西側壁では、奥壁石材の２分の１程の高さの石材３個と、これらの倍近い大形石１個を使用している。

側壁の上方部については、部分的に二段積み、あるいは三段積みと異る。東側壁では、羨道側の下段二石の上方に大型石一石を置き、羨道側より二石目と三石目との間に小型石を二段に積み上げている。西側壁では、羨道側の下段二石の各々の直上に二段ずつ積み上げ、最奥部のものは下段の二石にまたがって大型石が置かれている。側壁の上方部石材設置順序については、西側壁において、下段同様、最奥部より一石分の空所を残して二段目石材が置かれ、次いでその空所をつめるとい方法がとられているようである。三段目については、二段目石材の規模に応じて三段目石材を要する部分にのみ設置される。東側壁については明瞭でないが、同様の方法をとっているものと思われる。

なお、東西両側壁ともほぼ垂直積みで、また、石材相互の空所には詰め石を行なってその安定を図っている。

Ⅳ） 羨　　道

玄門石は東西両側壁ともほぼ同規模の石材を用い、玄室の下段石材設置後に置いている。玄門石以外の側壁石材は、西側壁では、最下段のみ遺存していたが、長方体の石材を横位に置き、入口に向って規模を小さくしている。東側壁では玄門石に隣接する部分のみ、二段積みの状態で遺存していた。

Ⅴ） 天　井　石

玄室で一石のみ遺存していた。入口側に傾むき、また、西側壁からずり落ちた状況にあった。石室内面が平担で、横断面三角形状を呈している。

3） 遺物 （図20）

すでに盗掘に会っており、出土遺物の大半は石室外の弧状列石前方部の埋土中よりのものである。石室内からは、原位置を保っていなかったが、帯金具と辻金具の残欠の出土を見た。

Ⅰ） 須恵器

壺（１～５、10）　口縁部のみが３点ある。１は直線的に開き、端部をＳ字状に屈曲させている。中程に一条の凹線が施されている。２も直線的に開き、端部で屈曲させている。上半部に二条の凹線を施している。３は外弯して開く。等間隔に三条の凹線がみえ、その間に櫛状工具による波状文と刺突文を施している。

４、５は壺の底部及び胴部である。５は外底面をヘラ調整している。

10は小型広口壺で、口縁部は短かく直線的で、わずかに開く。胴上方部で最大径を取る。

なお、器高48cm、胴部最大径41.5cmの大形壺（図版三十七）が１点出土している。

杯（7～9）　7は蓋で、口縁部と天井部の境界を押えて凹め、一応の区別がみられる。天井部は丸いが、最上部は粗くヘラ調整して平担になっている。

8、9は杯身で、受部の立ち上りはともに短かく内傾している。受け部の端部はわずかに上方に向き、短かく外方へのびる。

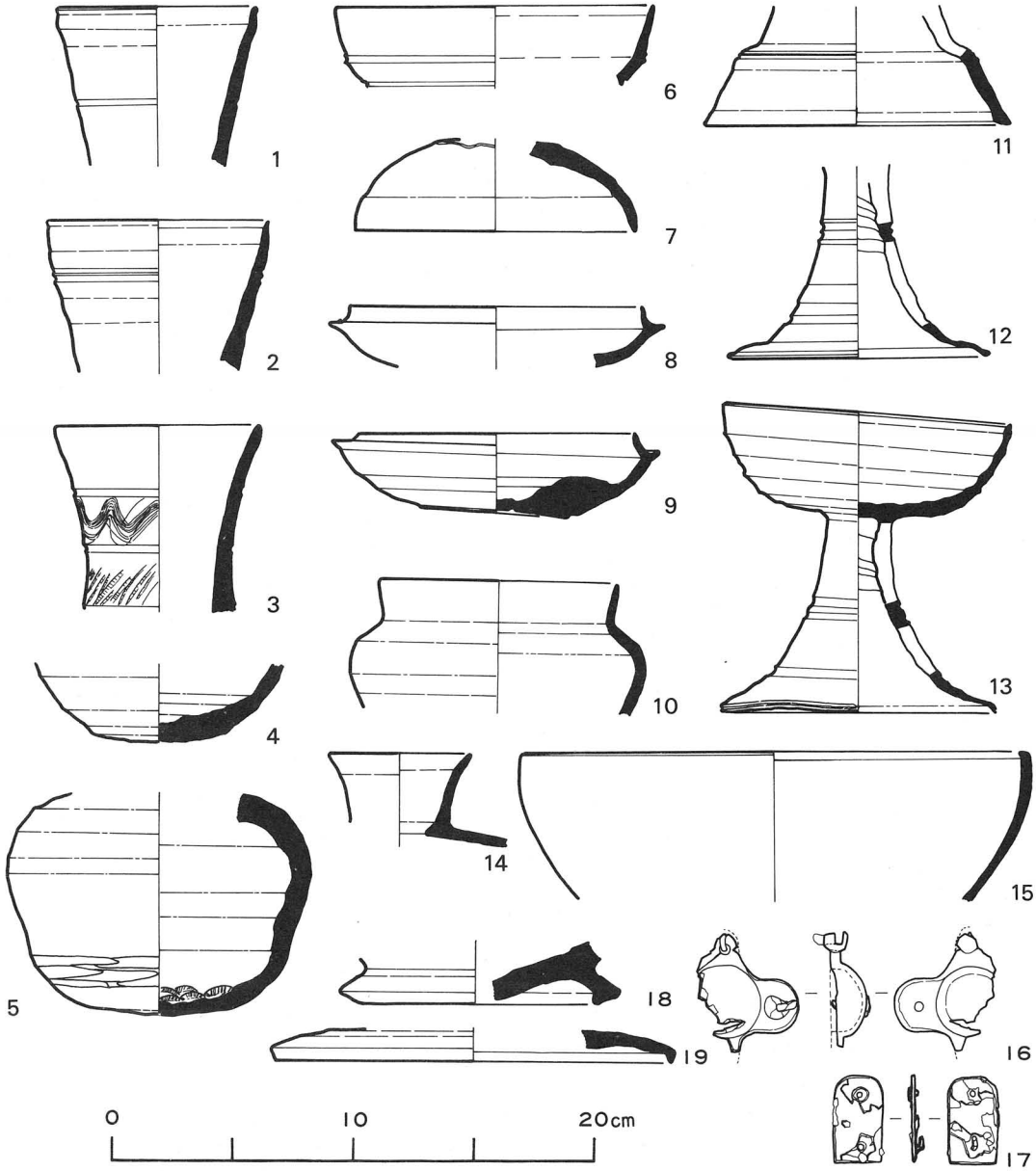


図20　上ノ山1号墳、2号墳出土遺物（1～17は1号墳、18、19は2号墳）

高杯（6、11～13）　6は杯部。直線的に開く口縁部を持ち、底部との境界を帯状に凸線をめぐらして区別している。また底部との境界附近に一条の凹線をみる。

11は脚部で、筒部と裾部との間で大きく屈曲させている。裾端部は平担で左右に肥厚している。筒部に長方形の透しを持つ。12は長方形の二段透しを持つ脚部。透しの間に二条、筒部の下方部に1条の凹線を見る。裾部は水平近かくまで開く。この脚部の形態は13も同様であるが、13の場合、裾部端面に一条の凹線が施されている。杯

部は底部より内弯気味に開く。口縁部と体部との境界は明瞭でない。口縁端部は内外両面からヘラで削っている。

平瓶（11）　内弯気味に開く口縁部を持ち、体部は水平近くに平いている。平瓶の可能性の強いものである。

鉢（15）　薄手で、仕上りは丁寧である。口縁部は外弯し、体部最大径より小さくなる。口縁端部は平担で、内方に肥厚させている。

Ⅱ）馬　具（16・17）

辻金具と帯金具である。辻金具(16)は径３cmの無文の半球体に、四方に脚をつけたものである。３分の１程の残欠で、脚に一本ずつの鋲を残す。鉄地金銅張りである。帯金具(17)は長さ 3.6cm、巾２cmの鉄地金銅張り製で、両端に各１個ずつの鋲を残す。

Ⅲ）縄文式土器

墳丘の封土中よる破片が２点出土した。小片で形状は不明。

5．上ノ山２号墳（図17）

２号墳は１号墳の西方約８ｍのところに位置する。調査前では墳丘はわずかな盛り上りを残すのみで、主体部と思われた部分も大規模な被掘壙があった。今回の調査においても、墳丘の上半部は失なわれ、主体部も横穴式石室の石材の抜き跡を検出し得たにすぎない。

1）墳　　丘（図21）

墳丘の北・東・西の三方にトレンチを設定し、その断面土層を観察した。その結果、墳丘は40～60cmの厚さで遺存していたにすぎなかった。しかし、墳丘裾部の遺存から墳丘径11.5ｍの円墳であることが知れた。

Ⅰ）東トレンチ

厚さ約60cm、９層の遺存。自然傾斜面の整形は、トレンチ部分でほぼ水平であるため、なされていない。石室を構築すべき部分で約20cm程度掘り込み、段落を設けている。

墳丘は、まず、石室側より巾約 2.5ｍにわたって、厚さ約20cm程盛り上げている（図21－東トレンチ土層断面

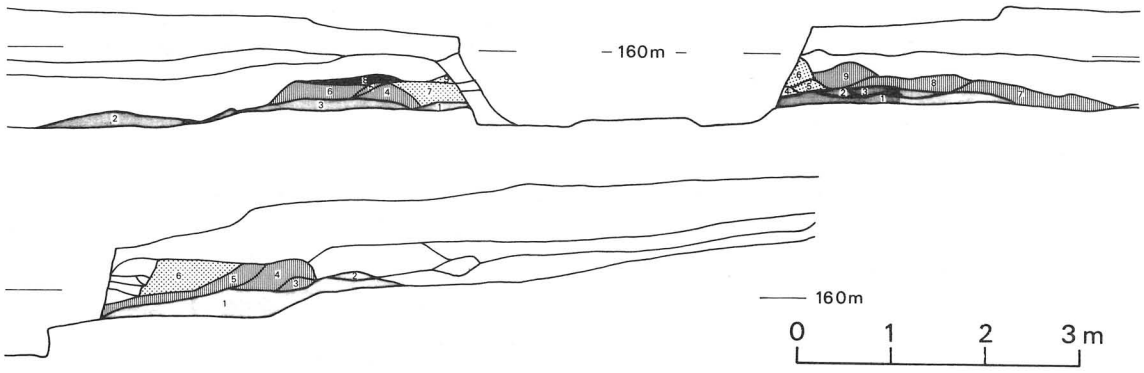


図21　上ノ山２号墳墳丘断面実測図

図の土層番号1～3、以下土層番号のみ記す)。次いで、巾約 0.5m、厚さ約40cmの3層（4～6）にわたる盛土が見られる。ここまでの土層は、1～3の厚さと段落の深さをプラスしたものが約40cm、4～6の厚さが約40cmで、4～6が石室石材後方を固める場合の通有の盛土方法であること、後述する石室石材の平面規模等からして、1～3までが石室最下段石材の高さに、また、4～6が二段目石材の高さに対応するものと思われる。

こののち、墳丘外方より順次、7～9の盛土があり、7が墳丘裾部を形成するとともに、全体として、二段目石材の高さ近くまで墳丘を盛り上げている。以上の墳丘については遺存を見ない。

II）**西トレンチ**

墳丘の外方約2分の1程は最下層の一層を残すのみで、欠失の度合いがはげしい。

自然傾斜の整形は東トレンチと同様、石室を構築すべき部分で約20cm程の段落を設けている。

墳丘は石室側2分の1程の範囲で、厚さ約10cm程の盛土（1、3）があり、次いで、石室側に巾約80cm程を残して、厚さ約30cm程の三層（4～6）の盛土を行い、空所に新たな土砂を充塡（7）している。

以上の状況からして、段落と1、3までは石室最下段石材に、7は二段目石材に対応するものと思われる。

なお、墳丘外側約2分の1程の範囲に、厚さ約20cm程の盛土が一層（2）のみ遺存していたが、墳丘裾部はこの2の外端部に求めた。

III）**北トレンチ**

ここでは、石室を構築すべき部分に、深さ約30cmの段落が設けられている他、段落より墳丘外方に向って巾約2m、深さ約30cmにわたる範囲で自然傾斜面の整形が認められる。

墳丘は、この整形部分を覆って、厚さ約30cmの盛土がある（1、2)。次いで、3～6の盛土が厚さ約40cm程なされる。北トレンチの場合、石室の奥壁の後方に当るが、石室後方部分の欠失がはげしく、石室石材との関連は明瞭でない。ただ、1、2が最下段石材に対応する盛土であろうことは推察される。

なお、石室床面より遺存盛土の上端までは約1.05mあり、東・西トレンチ部分が60～70cmであるのに対し40～30cm程高い。従って、東西両トレンチ部分では、少なくとも三段の石材の積み上げがあったと考えられる。また、北トレンチでは、東西両トレンチの二段目石材に対応する高さは、ほぼ、5の高さであり、5が通有の石材後方固めの盛土と異るところから、石室奥壁最下段の石材には、石室東西両側壁の二段分程の大型石材を使用したものと思われる。

2）主　体　部（図22）

主体部は大きく攪乱を受けていたが、攪乱層床面で石材の抜き取り壙を検出し、横穴式石室を有していたことが知れた。

石材の抜取り壙は奥壁で2壙、東壁で9壙、西壁で7壙を確認した。東壁のものはほぼ連続していて、長径(南北長)60cm前後、短径(東西長)60～30cm。西壁では奥壁より5壙が連続していて、長径50～90cm、短径35～55cmを計る。奥壁のものは長径（東西長）45cm、短径（南北長）20～30cmでほぼ同規模である。石材の高さについては、墳丘の土層よりして、奥壁で2段以上、東・西両壁で3段分の高さが1.05mと考えられ、各々およそ40cm前後と推察される。従って、石材の規模は、長さ60cm前後、巾、高さとも40cm前後の比較的小規模な石材を使用していたものと思われる。

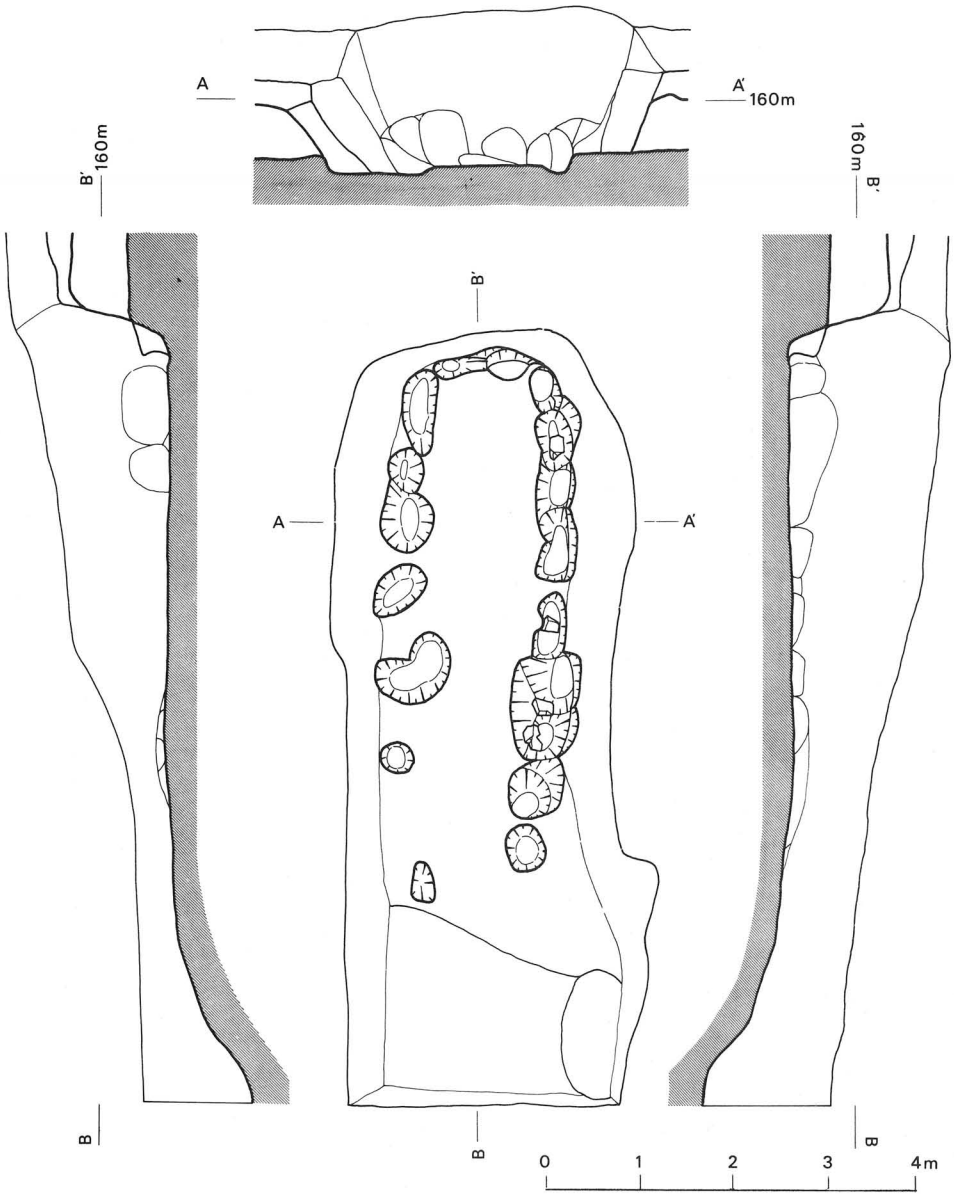


図22　上ノ山２号墳石室実測図

抜き取り壙の内法規模については、東西両壁の奥壁より四壙目までがほぼ直線的に並び、東西両壁の壙の内端巾が約1.1m前後である。五壙目では、東西とも内方に寄って狭まくなり、約0.7mを計る。六、七壙目は、西壁では連続しないが、東壁では五壙目に連続して一直線に並ぶ。長さは、東壁の一～八壙までが5.2m、一壙から四壙までが約3m、西壁の一壙から七壙までが5.5m、一～五壙までが3.4mを計る。

被掘壙床面は東壁の一～八壙目までほぼ水平で、以降南方に向ってゆるかに傾斜し、八壙目より南方1m程のところから急角度に傾斜して、自然傾斜面に移行している。

以上の状況よりして、東壁の八壙目までが石室東側壁の位置を示すものであり、西壁の七壙目は床面の傾斜部に位置しているとこから、石室とは関係がないと思われる。また床面はその傾斜状態よりして、石室床面を遺存させているものと思われる。従って、石室は床面の水平部分、東壁抜き取り穴の八壙目までで、全長約5.2mの規

模とすることができる。

玄室と羨道の区分については、東西両壁とも五壙目が内方に寄っており、東壁の五壙目以降が一列に並ぶところから、一～四壙目までが玄室、以南部が羨道に当るものといえよう。又、五壙目の東西両壁とも内方に寄るところから両裾を有すると考えられる。従って玄室長約３ｍ、巾約1.1ｍ、羨道長約2.2ｍ、巾0.7ｍ、入口巾は不明とすることができる。

3） 遺　　物（図20）

出土遺物はすべて埋土中のもので、須恵器破片２点のみである。

杯蓋(18)　口縁部にかえりを持たず、端部を下方に折り曲げただけのもの。口縁端部の横断面は三角形状を呈し、天井部は水平で、口縁部との境界はわずかに屈曲している程度で、明瞭でない。器高1.5cm程で扁平である。

台付壺(19)　壺の高台部と思われるもの。外方に大きく踏んばった高台は、その端部で大きく内方に肥厚させている。貼り付高台である。

お　わ　り　に

今回調査を実施したのは、7基の円墳より構成された上ノ山古墳群のうち、東端に位置する第１号墳及び第２号墳の２基である。まず、両墳の築造年代であるが、両墳とも盗掘の憂き目に会っており、直接年代を決定する資料を欠いている。１号墳では、羨道入口附近で、辻金具と帯金具の残欠片の出土を見たが、もとより原位置を保持したものではない。ただ、羨道入口の西側、弧状列石の前方部で、埋土中より須恵器及び土師器の出土を見ており、年代を考える上に間接資料となり得る。遺物は須恵器の杯身、蓋、高杯、壺、平瓶、鉢、大型壺、土師器の甕あるいは壺の破片である。杯身は外底面の粗いヘラ調整と全体的に扁平な形態、口縁部が短かく内傾して立ち上り、水平からやや上方に短かくのびる受部を持つ。蓋は天井部に丸味があり、口縁部との境界は調整の違い程度で明瞭でない。高杯は杯部、脚部とも二形態があるが、一つは外弯気味に開き、裾部で大きく屈曲させた二段透しを持つ脚部と埦形の杯部を持つものであり、他は筒部と裾部の境界で二段に屈曲させた脚部を持つものである。これら杯及び高杯の形態は大阪府陶邑古窯跡のものと比較するとＴＫ109及びＴＫ217の特徴を持ち、高杯はＴＫ 109に、杯はＴＫ 217に近い形態といえる。

小型広口壺及び鉢について、陶邑のＴＫ 217及びＭＴ21の須恵器杯身を共存するもので比較すると、広口壺は肩部が明瞭な稜を取り口縁部は短かく内弯して、端部に面を取っている。鉢は最大径が全体の３分の１上方にある。これに対し、当古墳の場合、広口壺は最大径の位置は同じであるが肩部は丸味を持ち、口縁部は直線的である。鉢は口縁径と胴部最大径がほぼ等しく、口縁端部は面を取り、内方に肥厚する。これらにより、当古墳出土の広口壺及び鉢はＴＫ 217及びＭＴ21より古式の特徴を持つといえる。

以上の杯、高杯、広口壺、鉢等の形態は陶邑古窯跡においてはⅡ期末、６世紀末葉の一時期のものと考えられる。他に大型壺、壺等の出土を見ているが、ほぼ同様の時期のものと考えて大過なかろう。従って、弧状列石前方部埋土中の出土品は６世紀末葉の一時期のものであり、当古墳の築造年代についても、それに近いものと考えられる。

２号墳は、被掘壙の埋土中より須恵器杯蓋と壺の高台かと思われるものの２点を出土したにすぎない。杯蓋は口縁部の残欠で、端部に折り曲げただけのものである。高台部は踏んばりが大きく、端部を内方へ肥厚させてい

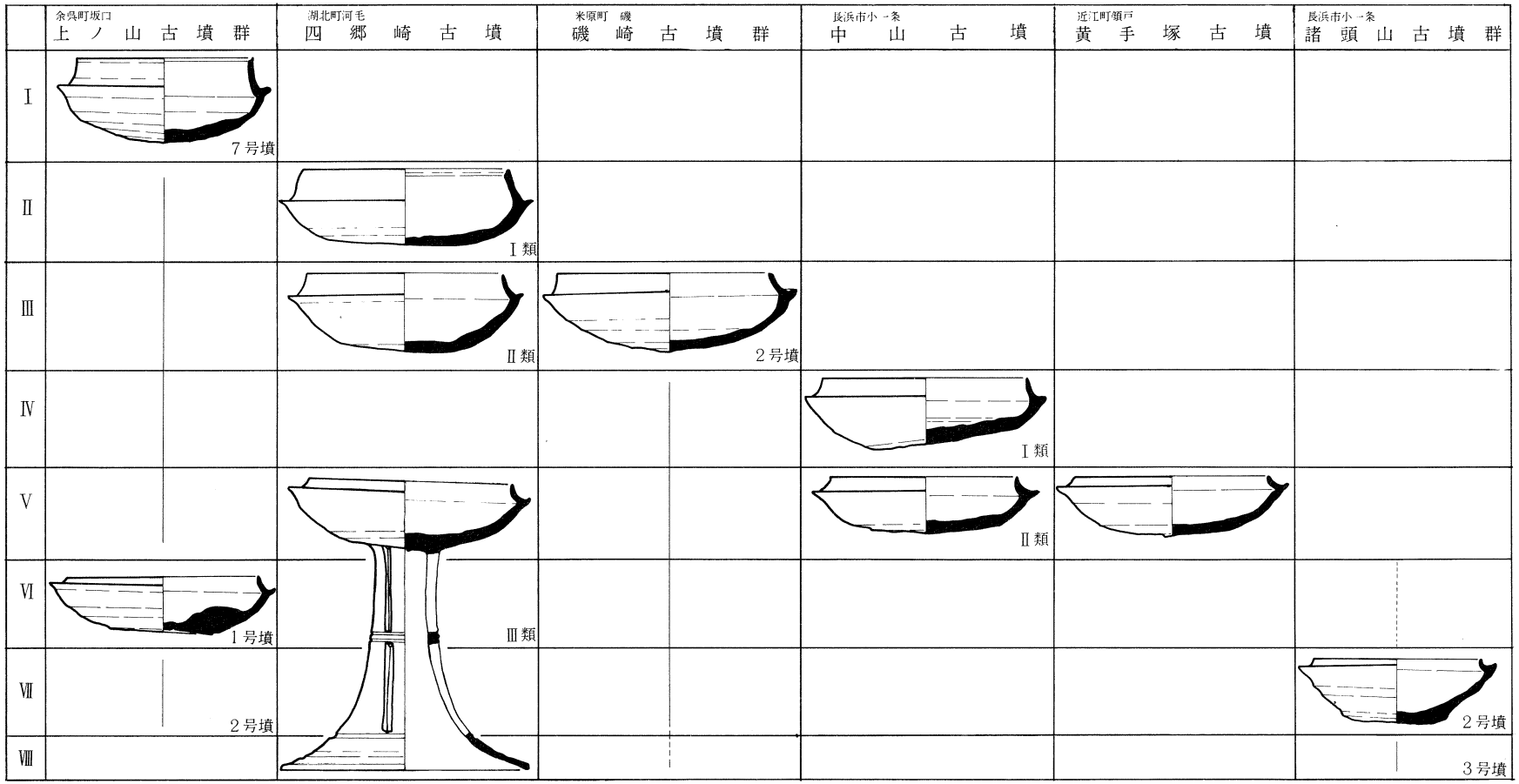


図23　湖北地方主要古墳出土須恵器杯身編年表

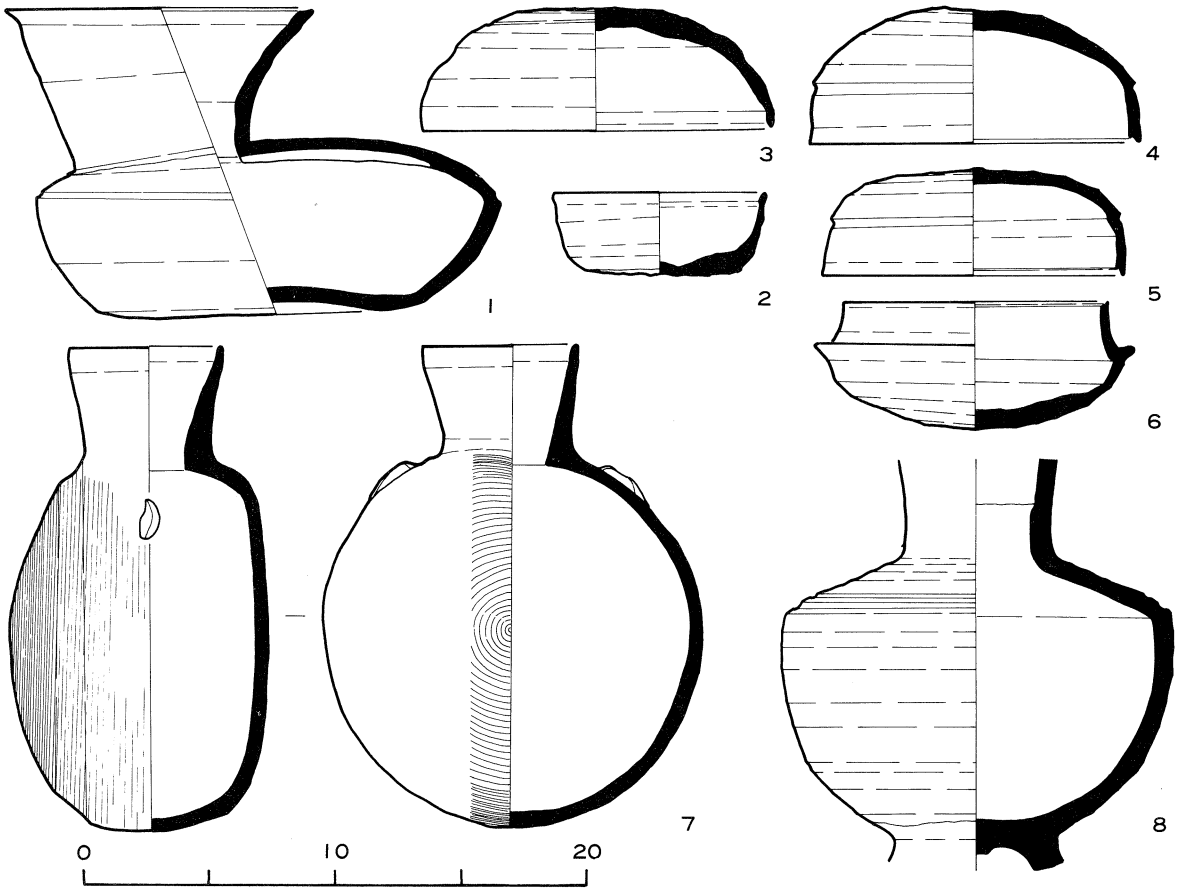


図24　上ノ山古墳群周辺遺跡出土遺物実測図(平野市介氏蔵)(1、2、蔵方遺跡、3～6、上ノ山7号墳、7、8、北畑古墳)

る。およそ、奈良時代前半のものであろう。

以上、1号墳、2号墳の年代について、1号墳は6世紀末葉に比定できるが、2号墳からは奈良時代遺物の出土を見ており、その使用下限を示すにすぎない。しかし、およそ、その石室規模等よりして、1号墳より新しいと考えられるが、奈良時代の築造になるとは考えられず、7世紀の前半代に置くのが隠当であろう。

次に、上ノ山古墳群の群形成の様相について触れ、その問題について若干の考察を加えたい。古墳群は調査時点で6基が遺存していたのであるが、地元の平野市介氏の御教示により、6基の北側で、さらに、1基の存在していたことが知れ、当古墳群は、本来、7基から構成されていたことが明らかになった。古墳群中1～3号墳については、主体部に横穴式石室を持ち、特に、今回調査した1号墳及び2号墳は6世紀末葉～7世紀前半の築造になるものと考えられた。3号墳についても、およそこの間に入るものと思われる。しかるに、平野氏御教示の消滅墳（7号墳）については、開墾により破壊した時点では石材等の出土を見なかったとのことであり、直葬墳であった可能性が非常に強い。その際に出土した遺物は須恵器杯身・蓋、鉄刀等で、そのうち、須恵器は平野氏の保管になる。杯身(図24-6)は1点あり、口縁部径10.7cm、器高5.2cmで比較的小型である。形態は、やや内傾気味であるが、長い立ち上りを持ち、端部は内側に傾斜させ、段を持つ。受部はやや上方に短かくのび、端部は丸く仕上げている。底部はヘラ削りが約3分の2に及んでいる。蓋は2点あり、一つは身とセットをなすもの(図24-5)で、口縁部径12.1cm、器高4.3cm、天井部はやや扁平である。天井部と口縁部を分ける稜は突出し

ない。他（図24-4）は口縁部径13.3cmで大型化の傾向にあり、器高は 5.5cmあって、天井部は丸い。口縁端部は内側に傾斜し、浅い凹みを持つ。これらは、陶邑古窯跡ではＴＫ47型式の特徴を多く持ちながら、ＭＴ15型式にも近似するもので、両者の過渡的な様相を示す。いわゆるＩ期末～II期初当に当るもので、およそ６世紀前葉に比定できるであろう。

このように、消滅した７号墳は６世紀前葉にさかのぼり、当古墳群形成初期のものといえる。しかも、主体部に横穴式石室を持たず、直葬墳であった可能性が極めて強いものである。従って、当古墳群は６世紀前葉～７世紀前葉の間に７基の古墳が築成され、その初期段階では直葬墳の形態を取る。横穴式石室の導入は、６世紀中頃階については不明であるが、おそくとも１号墳の６世紀末葉に下り、以降、２号墳、３号墳と少なくとも２基が継続的に築成されている。すなわち、当古墳群に限ってみるなら、群形成初期には単次葬、後半で復次葬の形態を取るとするとこができ、その変化は６世紀後半とし得る。

湖北において、後期古墳群の調査例は極めて少ないが、近時調査された二・三の資料により、上述の上ノ山古墳群に見る様相に関して、若干の問題点を指摘してみたい（以下図23を参照）。

さて、湖北において、古式の須恵器を出土する横穴式石室としては、まず、湖北町河毛の四郷崎古墳がある。当古墳は長方形の玄室の長辺に羨道が取り付くタイプの横穴式石室を有するものである。副葬品に多量の須恵器が出土したが、それらは形態上３類に区別でき、各々時期差を持つことが明らかである。特に杯の身について見ると、Ｉ類は立ち上り端部を内側に傾斜させ、浅く凹ませる。受部はほぼ水平に短かくのびる。II類では立ち上がりがＩ類より短かく、また、内傾度が若干大きい。端部は丸く仕上げて面を取らない。III類に当る杯身はないが、有蓋高杯の杯部の形態では、立ち上りは短かく、内傾度は一層強い。底部はヘラ削り巾が小さく、とがり気味である。これらの特徴からＩ類→III類へと年代が新しくなることが指摘できよう。陶邑古窯跡で比較すると、Ｉ類は口縁部径12.5～13.5cmと大型化しており、ＭＴ15に近似する。II類は立ち上り端部に面を取らなくなっているところからＴＫ10に、III類はおよそＴＫ43あるいはＴＫ 209に比定でき、およそII期の初当～後葉の間に入る。このように、四郷崎古墳は最古のＩ類土器の時期に築造され、III類土器の副葬まで少なくとも三世代の使用がうかがえる。Ｉ類土器について上ノ山７号墳出土の杯身に比較すると、７号墳のものはまだ大型化しておらず、四郷崎古墳のものが後出といえる。

四郷崎古墳の石室は長方形の玄室の長辺に羨道の取り付く古式の横穴式石室であるが、近似するものに米原町磯の磯山に所在する磯崎古墳群中の２号墳がある。２号墳は玄室が正方形プランで両裾を持って羨道が付く横穴式石室である。当古墳出土の遺物については明瞭でないが、古墳群より出土したものとして磯崎神社及び地元磯崎文五郎氏の保管になる須恵器類がある。新旧混在し、またいずれの古墳から出土したか明瞭でないが、これらのうち最古式と思われるものを見ると、杯身では、口縁部径13cmあって大型であり、立ち上りは内傾が強く、受部は上方に短かくのびる。底部のヘラ削りは２分の１程で、ややとがり気味である。これは四郷崎古墳出土須恵器でII類としたものに比べると立ち上りの内傾度は一層大きく、底部がとがり気味で整形も粗雑であって、やや新しい要素を持つ。III類のものより古く、陶邑古窯跡においてはＴＫ10～ＴＫ43に当るものといえる。

これらの他に長浜市茶臼山古墳附近出土と伝えるものや近江町山津照神社古墳出土と伝えるものの中に、上ノ山７号墳出土と同時期と考えられる古式の須恵器が出土しているが、前者については当該古墳が不明である。

以上の一・二の例であるが、横穴式石室を伴うもので出土した須恵器を比較した場合、上ノ山７号墳出土の杯類より新しく、従って、現在のところ、湖北における横穴式石室の初現は四郷崎古墳であって、６世紀初当にさかのぼらない。

このように、湖北においては、横穴式石室は四郷崎古墳以降磯崎２号墳に見るように間断なく採用され、６世紀後葉に入ると、上ノ山１号墳をはじめ、調査された例では、近江町顔戸黄牛塚古墳、長浜市小一条諸頭山古墳群、中山古墳、布勢古墳、米原町石淵山古墳群等その数量を増して築造され、諸頭山３号墳や上ノ山２号墳のように竪穴式小石室の形態、あるいは規模を小さくした横穴式石室を採用するなどして７世紀前葉で消滅の方向に向う。横穴式石室はこうした消長の傾向を持つと考えられるのであるが、大和朝廷が在地の共同体を解体することなくその支配体制の中に組み入れていくための施策の顕現として考えられている古墳時代後期の群集墳の形成に対しては、こうした横穴式石室の消長の傾向とは、特にその初期の段階において若干のずれがあるように思われる。たとえば、上ノ山古墳群においては、群の形成が６世紀初当にまでさかのぼるが、横穴式石室の導入は１号墳の６世紀後葉を待たねばならない。すなわち、群形成の初期段階では単次葬たる直葬の形態を取り、６世紀後葉に至って横穴式石室を採用して複次葬を可能たらしめているのである。

現在のところ最古の横穴式石室を有する四郷崎古墳の場合６世紀前葉にさかのぼり、上ノ山７号墳に近い時期に複次葬の形態を取っている。しかし、当古墳は虎御前山の北端に築造された単独墳であり、以降の継続は認められない。一方、磯崎古墳群は、知り得る限り２号墳が最古形式の石室を持ち、附近よりの出土遺物からしても６世紀中葉をさかのぼらない。附近出土遺物には７世紀初当までのものが見られ、また、磯崎氏によれば、いずれも横穴式石室からの出土であり、２号墳築造以降、７世紀初当まで継続して横穴式石室を採用していった古墳群であるとすることができ、四郷崎古墳の場合と様相を異にする。

以上のように、横穴式石室の採用と群形成とのからみにおいて、湖北の後期古墳群にいくつかのタイプがあることが知れる。一つは、上ノ山古墳群のように、群形成が６世紀初当までさかのぼり、その初期段階で単次葬の形態を取り、６世紀後葉に至って横穴式石室を採用して複次葬を可能にしたもの、二つは、四郷崎古墳で、６世紀前葉に早くも複次葬のできる横穴式石室を採用するが、単独で群を形成しないもの、三つは、磯崎古墳群例でみるように、横穴式石室の採用と群形成の段階が軌を一にし、以降、継続して横穴式石室を築造していくもの、四つ目は、三つ目と同様であるが、群の形成が６世紀後葉まで下るもの、である。この中で四つ目のタイプが最も一般的で、一つ目及び二つ目にも群形成の後半のものを取り上げれば四つ目のタイプに入る。

さて、これら各タイプで特にここで注意したいのは一つ目及び二つ目のタイプである。一つ目の上ノ山古墳群については、６世紀中葉の時点で単次葬から複次葬へと埋葬形態の変化のあったことが知れる。二つ目の四郷崎古墳については、最も早く横穴式石室を採用しながらも継続して古墳を築造していない。副葬品から見る限り、当古墳の石室は三世代で６世紀後葉までの使用が認められる。古墳群が一般化する段階で使用が中止されているのである。このように見てくると四郷崎古墳の場合、６世紀後葉より一般化する横穴式石室と性格を異にする可能性もでてくる。すなわち、上ノ山古墳群の場合、横穴式石室を採用するまでの間は単次葬の直葬墓を順次形成していたと考えられるのであるが、その時期は１号墳の築成まで、６世紀の後葉までとし得る可能性が強い。一方四郷崎古墳はその使用が三世代で６世紀前葉から後葉の間で、上ノ山古墳群の１号墳築成までの時期に相当する。従って、四郷崎古墳の場合、早い段階で複次葬の可能な横穴式石室を採用したが、それは、上ノ山古墳群のように、世代変りごとに新たに直葬墳を築成せず、同一石室を再利用していったのではないか。四郷崎古墳が６世紀後葉以降にも古墳を築造せず、また、附近にいくつかの古墳群が認められることからも、一般的な後期古墳の横穴式石室と性格の異るものである可能性が非常に強い。

このように、後期群集墳の中には、いわゆる家族墓的性格を持たないものがある。上ノ山古墳群のように直葬墓を順次築成する場合と四郷崎古墳のように横穴式石室を採用し、新たに墳墓をつくらないものとの差異がみら

れるが、いずれも6世紀初当〜前葉までさかのぼるものである。群形成初期より横穴式石室を採用している場合は、磯崎古墳群が最も古いと思われるが、6世紀中葉に下る。6世紀後葉以降に群形成初期の段階を持つ多数の後期古墳群はいずれも横穴式石室を採用しているのである。すなわち、6世紀中葉の段階で、後期古墳群の性格が単次葬から複次葬へと変化していく過程が考えられるのである。このような変化は、単に横穴式石室の一般化に対応するだけのものとは考えられず、むしろ、6世紀中葉を境にして、群集墳形成に横穴式石室を必要とする何等かの契機があったのではないか。古墳の量的増加がやはりこの時点を境にしていることもみのがせない。群集墳の形成が没共同体的な家族の独立を意味すると考えられるが、その家族の支配体制下への把握の方法がこの時点で変化していったのではないか。湖北の群集墳の最盛期は6世紀後半とすることができ、群集墳成立の前提が共同体の階層分化であることには異論はないが、その場合、上ノ山古墳群のように6世紀前葉にその形成初期があり、かつ、形成初期のものが単次葬の形態をとっているのであり、6世紀中葉を境にして、古墳に葬られ得た階層がより下位に及んでいったと考えざるを得ない。

以上、今後考究すべき問題であるが、特に湖北において、後期群集墳の盛期は6世紀後半にあるが、その形成初期が、6世紀前半にさかのぼるものが存在し、かつ、単次葬という形態を取る可能性があることが指摘できる。群集墳の成立が共同体の階層分化を反映したものであると考えた場合、6世紀中葉を境にした群集墳の有り方の差異は、その分化過程、延いては、大和朝廷の在地共同体の支配体制の変化過程を知るに重要な問題となろう。

（田中勝弘）

第4章　大　東　遺　跡

1．方形周溝墓（図25）

既に報ぜられたごとく(『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ)、大東遺跡第２次発掘調査において、方形周溝墓と推定される方形周溝遺構２基が検出された。

２基とも建物跡Ｔ１とＴ５の中間点地付近に、約６ｍの間隔をあけて平行して掘込まれていた。１号方形周溝墓ＨＳ１は一辺約７ｍの南東部にいわゆる陸橋部の見られるものである。残存規模を示せば、南北の最大幅９ｍ、東西の最大幅 8.6ｍであり、内側台状部では、南北幅７ｍ、東西幅 6.9ｍを測り、ほゞ正方形プランと見てよいものである。なお、周溝は最少幅 0.5ｍ、最大幅 1.5ｍを測るが、東辺及び北辺が比較的幅が広く、南辺東端陸橋部はもっとも狭くなっている。溝の深さも均一でなく、概して東辺・北辺が深くなっているが、深いところでも30㎝を測ることはなかった。また、内側台状部に主体部と考えられる遺構は存在しなかった。

２号方形周溝墓ＨＳ２は、東半部が未発掘のため、全容を明らかに出来なかったが、検出部分での規模は、南北最大幅11.7ｍ、内側台状部では 8.8ｍの幅を有し、ＨＳ１に比べひとまわり大きい周溝墓であろうと考えられる。溝幅は最大２ｍ最少 1.2ｍを測り、深さは最大60㎝を測るが、凹凸があり、北辺から西辺までが一段深く、西辺南半から南辺が浅い。西辺周溝内堆積土上層及び下層より弥生式土器が出土したが、特に甕形土器Ｂ、Ｃは、溝底に密着して出土した保存度のよいもので、流入物としての可能性が低く、当周溝墓の築成時期を示すものと考えられる。またＨＳ２の周溝断面からすれば、早い時期に周溝を埋めたような形跡は見えず、周溝は序々に埋没したものと考えられる。なお、両基の肩部や台状部に多くのピットや溝状遺構が掘込まれていたが、いずれも後代のものと考えられるのである。

時期差が土器上から指摘されよう。すなわち、ＨＳ１西辺の周溝出土の小型壺形土器他一点は弥生後期終末に比定されるに対し、ＨＳ２の出土遺物にはこれより古い型式のものが見られ、若干先行する時代のものと考えられる。

（別所健二）

図25　大東遺跡方形周溝墓実測図

2. 遺　　物

1） 第1号方形周溝墓出土遺物(図26)

壺形土器（2）細頸小型壺形土器で、器高13.3㎝。直線的に開く口縁部と横に張った胴部を持つ。胴部最大径は中位にあり、器高とほぼ同じである。底部は下方に突出し、高台風に周縁が高い。口縁部から底部までほぼ全面に刷毛目による調整がなされているが、口縁端部附近と頸部上方はヨコナデされ、底部は指による圧痕を見る。胎土は細かく、焼き上りは硬質である。第1号方形周溝墓の西辺溝内よりの出土である。

甕型土器（1）頸部の弯曲部よりさらに口縁部を外開きを残して内に屈曲させていわゆるS字状の口縁部を持つ。屈曲した口縁外面に篦によるクサビ形の刺突文をめぐらしている。胴部の張り具合は欠失していて不明だが、肩部上端に櫛状工具による6条の条痕をめぐらし、さらにその下方に、口縁部と同様のクサビ形刺突文をめぐらしている。胎土に砂粒が多い。

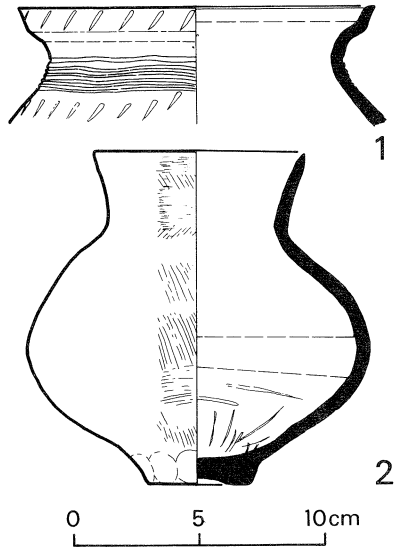


図26　大東遺跡1号方形周溝墓出土遺物実測図

2） 第2号方形周溝墓出土遺物(図27)

壺型土器A（6）「く」の字状に屈曲した厚手の口縁部で、直線的に短かく開く。刷毛でヨコナデしたあと、下半に指痕を残している。胴部は、下半については不明だが、球体に近い形状をなすものと思われる。胎土に砂粒が目立つ。

壺型土器B（5）横によく張った胴部と小さな円底を持つもので、細長い筒形の口縁部をもつ形態であろう。内面に胴部と底部との接合痕を残し、接合部より上方外面を刷毛目、下半を篦で調整している。砂粒の多い胎土で、赤褐色を呈している。

甕型土器A（4）短かく、大きく外方へ弯曲した口縁部を持つ。胴部に張りがなく、口縁部よりわずかに大きい程度で、細長い器形である。口縁頂部は平坦にしている。

甕型土器B（8）脚台を有するもの。口縁部は、短く頸部より屈曲して開き、端部をわずかに上下に肥肥させている。胴部は中位に最大径を有し、球体に近いが、下半部がやや細長い。脚台は器高31.3㎝に対し5㎝程で小さい。ハの字形に直線的に開き、端部を内側に肥厚させている。器面全体に刷毛目調整を施しているが、肩部上端をヨコナデし、脚台の接合部に指痕を見る。内面は篦削している。

甕型土器C（7）甕型土器Bと近似しているが、脚台を持たない。口縁部は「く」の字形に屈曲し、端部に櫛状工具による刺突文を施している。胴部の最大径が中位よりやや上方にあり、甕型土器Bより細長い。底部は平底で、ヘラ磨きしている。口縁部より底部まで全面に刷毛目調整痕を残す。内面は口縁部を残して刷毛目調整を施している。胎土に破粒が多く、仕上りは硬質で良好である。

器台型土器（1～3）3点出土しているが、いずれも同一タイプである。外弯して開く脚台部に直線的に開く

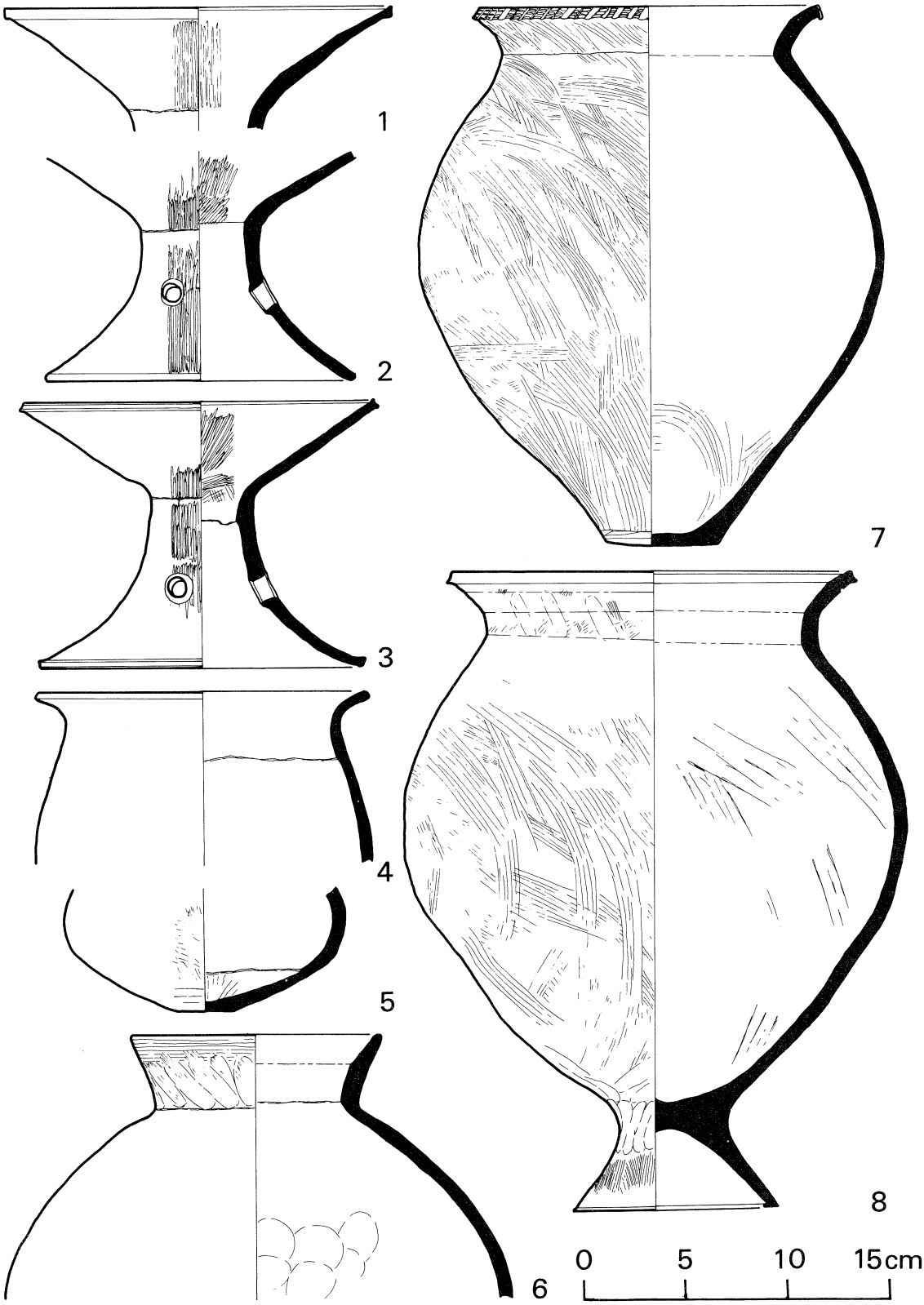


図27　大東遺跡２号方形周溝墓出土遺物実測図

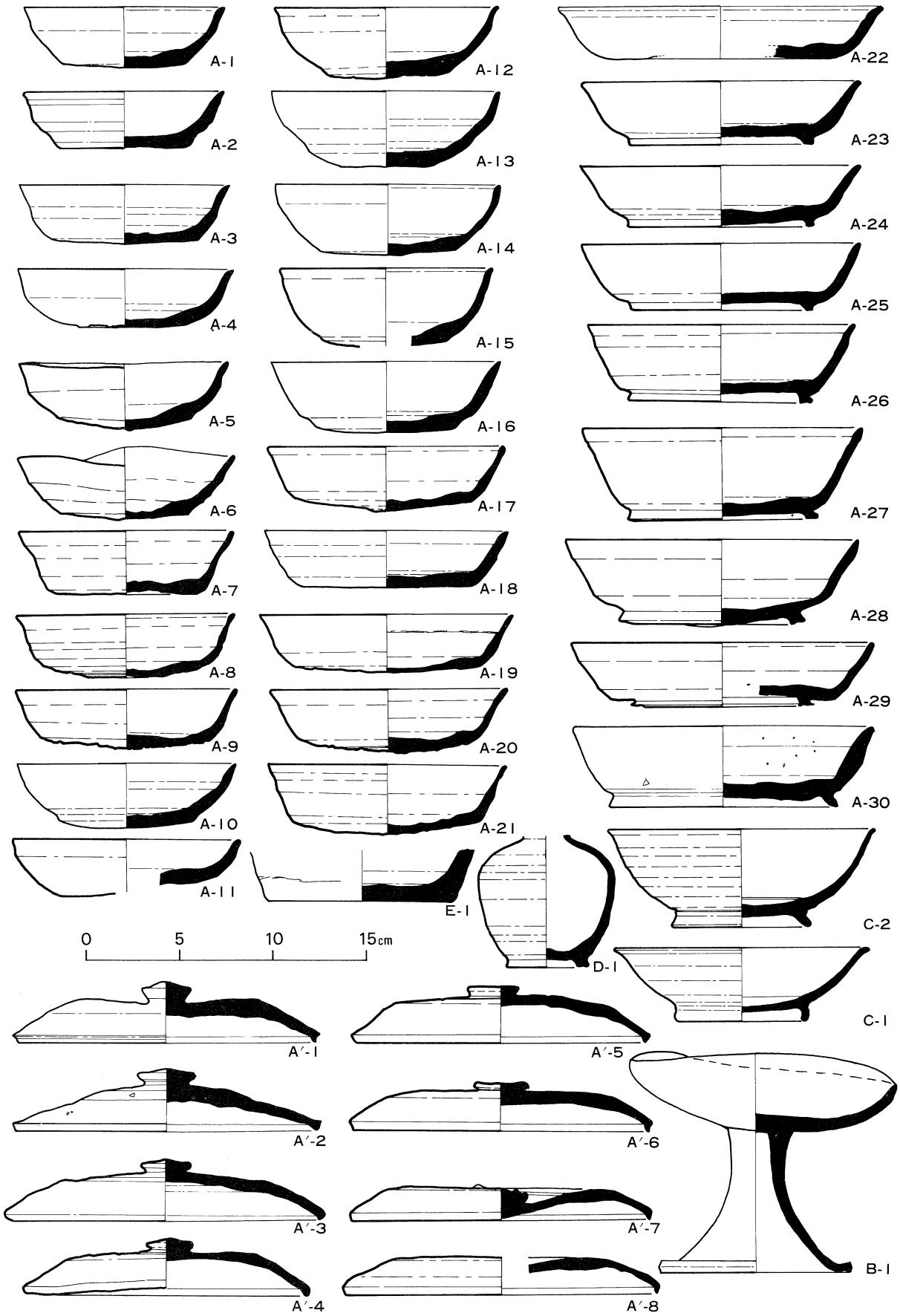


図28　大東遺跡出土遺物実測図 (1)

皿状の受皿部を取り付けたもの。脚台部には３個の透孔がうたれ、端部をわずかに上下に肥厚させている。受皿部は直線的で、端部を上下に肥厚させている。外面と受皿部内面は丁寧な篦磨きが施され、脚台部内面はココナデしている。いずれも胎土の細い硬質の焼上りで、仕上げも非常に丁寧である。

（田中勝弘）

３）その他　土器類（図28・図29）

第２次調査によって検出された遺物のうち、土器類について簡単な説明を加えておきたい。出土地点は、Ｃ地区内の溝17・18を中心とした瓦溜りの範囲である。

坏の身〈Ａ〉　は30点を数えるが、大別して２類に分けることができる。

(1)口縁部に立ち上りをもたず、底部に高台をつけない。計22個。口径は最小10.8cm～最大13.6cm内に、深さは3.2cm～ 4.1cm内に収まる。(ただ〔Ａ－22〕は皿とも思えるが､破損品であるため明らかでない)。体部はおおむね直線的に外上方にのびるが、口縁部に至つつわずかに内彎するものが２、３ある。先端はすべて丸く収める。体部から底部にかけては、丸味をもって屈曲するものと、角をなすものとがある。底部は平底のものと、扁平に近い丸底のものがある。内面および体部外表は丁寧に横ナデ調整するが、底部のヘラ切りは粗い。胎土はおおむね良好で、灰青色を呈し、焼成も堅緻といえる。

(2)底部に高台を有するもの。８個。底部と体部の境はつよく屈曲するものと、丸味をおびるものとがある。体部は口縁部に向って外反気味にのびるが、その角度には差異がある。端部はすべて丸く収める。高台はすべて貼付けで、下方に垂直にのびる短いものと、外方にふんばるものとがあり、体底部の境も ｉｃ はその内側に位置している。また端部が外に肥厚し、接地面がへこむ高台が２、３ある。口径は最大のもので16.1cm、器高5.0cm を測る。

坏の蓋〈Ａ′〉　８点のうち、天井頂部が欠失して不明な１点をのぞいて、すべて扁平な宝珠つまみをもつ。また、口縁部先端近くのかえりは消失している。口径は16cm平均を測る。口縁先端は下方に短く屈曲する。天井部は平坦をなすものと、ゆるやかに丸味をもつものがあるが、均しくヘラ削りし、内面は横ナデ調整後、仕上げナデを施す。つまみは比較的丁寧なつくりで、宝珠つまみが次第に扁平なものに移行する。

高坏〈Ｂ－１〉は、坏部が著しく焼けひずみ、上方からみると楕円形を呈している。口径に比して、坏部は浅い。口縁部は短く、内彎しつつ外上方にのびる。坏底部はヘラ削り。柱部は中空状であるが、透し孔を穿たない。脚柱部は細く、ラッパ状をなして裾部に広がる。裾部先端は肥厚し、端面は垂直状をなすが、わずかに稜をつくる。

埦は陶器で、２点を掲げる。〔Ｃ－１〕は口径13.7cm、器高4.0cm、〔Ｃ－２〕は口径14.4cm、器高5.3cm。ともに体部は内彎気味に外上方にのび、口端部に至って外反する。〔Ｃ－２〕は体部外表に手ナデによる凹凸を生ず。高台は、〔Ｃ－１〕は直立し、〔Ｃ－２〕は外へふんばるが、ともに後から貼付けている。釉は褪せて分明でない。

小型瓶〈Ｄ－１〉は、口頸部を欠失する。体部は肩がやゝ張り出して、最大径7.3cmを測る。底部に高台を有し、外方にふんばる。体部外表に手ナデによる凹凸がある。胎土は精良、灰色を呈す。

壺〈Ｅ－１〉は、底部が一部分みられる。平底で、底体部の境は急角度をなして屈曲、体部は外上方に直線的

にのびる傾向を示す。

甕〔F－1〕は、硬質な土師器である。口頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外に肥厚、内彎しつつ外上方にのびる。肩部内外面に斜め方向のハケ目を施す。肩部以下欠失。

〔F－2〕は、口径24.6cm、口縁部が外彎して開く。肩部以下は欠失して不明。肩部外表に平行叩き目、内面に同じ円叩き目痕が残る。〔F－3〕は口径40.4cm、〔F－4〕は口径41.7cm。〔F－3〕の口頸部は外彎しつつ外上方に開き、口縁部が肥厚、〔F－4〕はやゝ開きつつ直線的にのびる。〔F－4〕の外表は平行叩き目、体部内面は同心円の叩き目を残し、肩部内面に指圧痕を留めている。以上の3点は、須恵器の大型甕である。

（谷口義介）

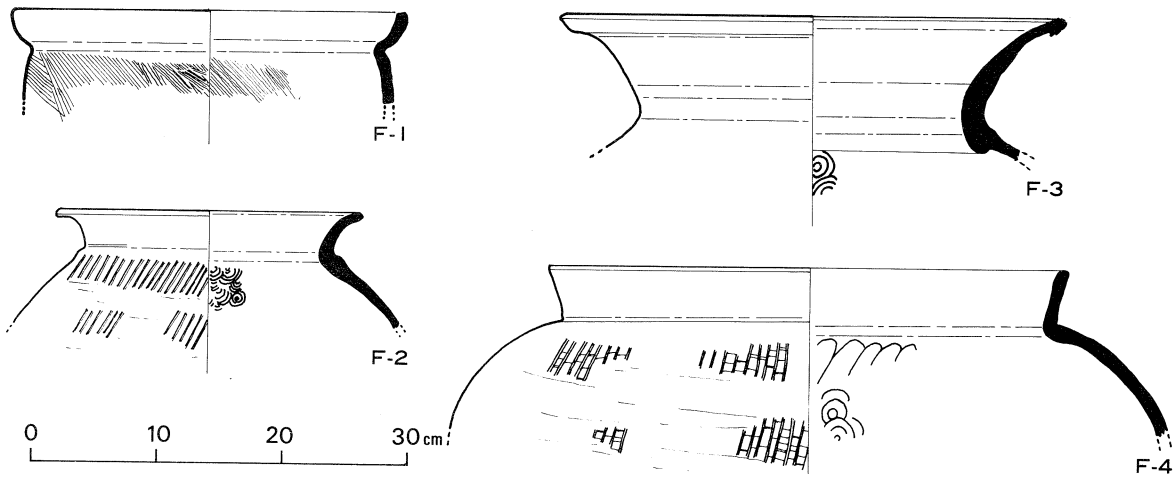


図29　大東遺跡出土遺物実測図　(2)

3．小　　結

第1号方形周溝墓出土の甕型土器は非常に特徴的で、口縁部と肩部の刻目状の刺突痕と肩部の櫛状工具による条痕文は東海西部地方の欠山期のものである。欠山第2貝塚出土の同一施文を持つものでは、口縁端部が外方へ折れ曲っているが、本例は口縁部が外方へ開くだけで、端部は平坦に仕上っている点、形態上若干の差異を見る。しかし、後出の元屋敷期の定形化するいわゆる「S」字状口縁とは明らかに異るし、まだ丸味を残している。また、櫛状工具による条痕様のかき目は前代の山中期に見ないものである。

第1号出土の壺型土器の特徴は、やや外開きの直口縁と、横によく張った扁球状の胴部、突出した高台状の底部である。突出した低部は欠山期～元屋敷期の広口壺型によく見かけるもので、山中期のものには少ない。小型壺型土器の形態では、山中期のものが円底で、筒状の口縁と胴の張った扁平な形態を取るに対し、本例は、筒状の口縁をもつが、胴部は球体状に近い。第2号方形周溝墓出土の壺型土器Bは口縁部は不明であるが、底部は円底で、横に張った扁球状の胴部を持ち、第1号より古式で山中期に属するものと思われる。

第2号方形周溝墓出土土器では、器台型土器が整形、形態よりして山中期に属すると思われる。

甕型土器B及びCは、頸部の屈曲がさ程大きくなく、最大径を胴部中位かやや上位に持つものであるが、口縁端部に櫛状工具による刺突文を持つBは脚台を持たないが、最大径をやや上位に持ち、やや縦長に丸くふくれた形態で山中期の特徴をそなえている。Cは最大径を胴部中程に持ち、より球体に近く、口縁端部に刺突文を持た

ない。脚台を持つが、端部を内方へ肥厚させる等若干新しい要素が見られるが、小型で低く、古式の様相も受けついでいる。

また甕形土器Aは長胴で口縁部径より若干大きい程で、口縁部は短かく、大きく彎曲する。端部は単純に平担にしているだけである。

以上の第1号及び第2号方形周溝墓出土土器を比較すると、共通土器である小型壺形土器で第2号のものがより古式であること、第1号の甕形土器が欠山期並行で、第2号の器台形土器が山中期並行、壺形土器B及びCが山中期に近似する等よりして、第2号が第1号に先行し、両者の時期は後期前半から後期後半にかけて、すなわち山中期から欠山期にかけてのものと考えられる。（田中勝弘）

次に、須恵器を中心に時代観をさぐってみると、大体7世紀末から8世紀中頃の間にそれを求めることができる。この傾向は、第1次調査におけるA地区内出土の須恵器と異なるものではない。したがって、A地区内の数棟の建物跡の方位とC地区内のそれとが同じで、これらが同一プランのもとに設計されたであろうとする推定を、上記の須恵器資料は時期的に補強するものといえよう。（谷口義介）

付章　横山古墳群の意味するもの（図１）

滋賀県の北東部には、余呉川・高時川・草野川・姉川・天野川の諸河川の沖積地である湖北平野が広がっているが、その中でも最大の沃野・長浜平野は豊かな自然と北国及び東国との結節点として、原始時代より近江北域における政治と文化の中心として栄えてきたのであった。その長浜デルタの東限を画するごとく南北約10kmにわたって連なる山陵が、長浜市及び近江町の東端に存在し、文字どおり横山と総称されている。

この標高 300m にも満たない独立丘の山頂・山腹・山麓には約80基を数える古墳が存在し、一般に横山古墳群とか長浜古墳群と呼ばれている。特に琵琶湖あるいは長浜平野に面す、横山山頂及び西側斜面、西麓の古墳は、坂田郡を本貫地とし、大和朝廷と密接な関係を有し、古事記に数多くの系譜をとどめた豪族、息長氏及びその支配下の有力家族の墳墓と考えられ、奈良時代以前の当地方の政治・社会の具体的展開を解明するうえに重要な根本的な資料として研究、調査がまたれていたものである。

しかし、これまでのところ横山古墳群の調査研究は、地域政権の首長及びその系譜のものと考えられる前方後円墳数基を中心としたものがほとんどで、緻密な横山古墳群の分布調査を下に、多数の後期の小円墳に論究したものもなければ、前方後円墳と後期古墳を総合的にとらえ、この地方の地域政権の具体的な支配構造及びその特色、性格にふれたものは皆無とさえ言え、近江の他地域の研究に比較して、そのたちおくれが感ぜられていた。

この点、このたびの北陸縦貫道敷設に伴う、諸頭山・黄牛塚・中山の各古墳の調査は、横山古墳群の後期の実態を知るうえに、恰好の資料を提供したわけだが、小論ではこれら後期の古墳群と先述した首長系譜の双方の古墳を考察の対象とし、当地方における古墳時代の政治的・社会的展開を望見してみたいと思う。

さて、総数約80基を数える横山古墳群も横山全域にムラなく分布するのではなく、巨視的に見て２地区に偏在しているのである。まず臥竜山の北端に所在する横山古墳群中最古最大の茶臼山前方後円墳をはじめ、垣籠町のオキサキ山・垣籠古墳、東上坂町の長屋敷古墳、さらに西方の榎木町・加納町に所在する福ノ神・越前塚・上藤塚等の首長系譜の古墳を核とする長浜平野北東地区の古墳群がそれである。そして残る一つは、近江町高溝に所在する人塚山から能登瀬集落の山津照神社古墳に至る横山南西部の丘陵端及び山麓部の諸古墳である。

では次に、より微細に上記の２地区の古墳群の実態を眺めてみることにしょう。

遅くとも紀元前１世紀頃には長浜平野に伝播した稲作農耕は、当初生産性の低い低湿地農耕であったが、少なくとも縄文時代の狩猟、採集を中心とした社会よりは、相対的な安定をもたらしたため、急激な人口増加が起きたと考えられている。この社会矛盾は中期・後期以降の湿田の拡大と乾田の開拓によって解消され、湖北地方における水稲耕作をさらに前進させたのであったが、この新しい稲作農耕の展開と維持は、姉川の支流を利用した潅漑敷設など大土木工事を必然とし、多量の労働力の投入と協業という、あらたな労働力の編成を必須にし、縄文時代以来の血縁的紐帯にとらわれない集団関係を組織化させたのであった。しかし、この農業共同体もそれ自体、自己完結的ではありえても、他の農業共同体との抗争激化は避けられず、さらに優位な共同体による他の共同体の系列化が進み、４世紀頃には農業共同体のワクをこえる新しい政治結合体＝小国家が現在の長浜市域に成立していたものと思われる。

さて、既に述べた長浜市北東域の古墳群こそはこの新しい政治結合体の古墳群なのであり、臥竜山の丘尾に位置し、長浜のデルタを見下ろす茶臼山古墳は、この新しく成立した地域政権の最初の首長の墳墓と考えられ、死して後まで一般共同体成員の頭上に君臨していたのである。

しかし、この地域の首長系譜の前方後円墳は5世紀以後、平野部に移動し、規模も50m以下という具合に、通例に反して縮少しており、前世紀に成立していた地域的統合になんらかの変化が起った事が予想されている。①

これに対して、近江町内の首長系譜の墳墓は異なった様相を示している。天野川流域の農業共同体の政治的結合は、デルタの狭少と対応して遅れたらしく、6世紀前葉に比定される能登瀬の山津照神社古墳の築造が最古のものであり、以後平野部に進出して高溝集落の人塚山古墳、新庄集落の塚の越古墳がこれにつづくものと考えられていた。しかし、このたび顔戸集落の南の丘上端部に約50mの帆立貝式古墳と約30mの大円墳からなる後別当古墳群が発見され、この地の統合が5世紀代にまで溯りうる可能性が生まれてきたのである。しかしそれにしても、この地域の政治的統一は、姉川の穀倉地帯に比べてたち遅れ、その勢力も当初においては劣っていたものと考えられる。だが、この地域には耕作地の狭少さの割に首長系譜の古墳が多く注目されることを記しておこう。

ところで、上記の二つの古墳群は、『和名抄』の上坂・下坂郷と朝妻郷もしくは阿那郷に相当する地域に分布するが、前者の上坂・下坂郷が坂田君の本拠であり、後者の朝妻郷は息長氏の本貫地であり、両地域が古代皇室にその女を入れた二大地方豪族が住したところであることが、両地域に残る地名や記紀に掲載された系譜や伝承その他多くの古文書、文献によって明らかである。

すなわち、姉川扇頂部を占拠した坂田君は、姉川流域の穀倉地帯を牛耳り、早くから長浜市北東域の地域的統合をなし、下流の農業共同体に対して、潅漑用水路を掌握して、4世紀代から5世紀代前半頃までにおいては隔絶した勢力を得ていたと考えられる。

一方、天野川流域の貧弱な沖積地を根拠地とした息長氏は、劣弱な生産基盤のために、勢力を伸張しえなかったが、天野川河口の筑摩、朝妻の二大良港と東山道と北陸道の分岐点という地の利を得て、塩津、敦賀を介しての朝鮮との交流も想定される商業活動②によって、大和朝廷と密接な関係を有すようになり、5世紀代には姻族として強大な勢力を広げ③、息長系譜に属する坂田君があらわれるなど、湖北での勢力を拡大し、坂田君を抑えて長浜平野に君臨したものと考えられる。

以上が横山古墳群において屹立している二大古墳群の実態と考えられ、横山古墳群から坂田古墳群・息長古墳群としてそれぞれ抽出できる地域政治結合体の首長系譜の古墳群なのである。

前期・中期からの如上の二大首長墓群の他に、6世紀以降横山には数多くの古墳が前述の首長墓群のワクの内外に営造されたのである。

一搬に後期古墳（群）は、早いところで5世紀末に成立しはじめ、6世紀に入って先進地域に普遍的に成立し、後Ⅱ期・6世紀後半には、ところによれば一定の墓域内に100基をこえる古墳が裾を切り合うように築造され、盛行期に至るのだが、50年も経ずして7世紀初頭には古墳の築造は急速に減少し、7世紀中葉以降には、大和を中心に皇族、官僚のごくわずかな古墳しか見られなくなって、古墳時代は終焉するものと考えられている。

しかし横山山陵における後期古墳文化の展開図は既述のように単純ではなかったようである。横山古墳群において、6C以降の築造と見られる小円墳は総計60基ぐらいにしかすぎず、その群集化も、多いもので5・6基がせいぜいで、10基以上を数える古墳群は存在しないと見られ、等質な小円墳が100基前後群集する、いわゆる群集墳はついに成立しなかったのである。

姉川が形成した長浜の沃野と雄族息長氏の居住からすれば、横山古墳群におけるこのような後期古墳群の過疎性と群集墳の皆無は一見不可解としか言いようがなかろう。

このような近江における、群集墳の不均衡及び偏在には、その背後に大きな政治的、社会的諸事象が埋没しているように思われ、これらに関しては水野正好氏や丸山竜平氏らの湖西を中心とした研究があり、後期群集墳の

荷い手即有力家父長といった定説の再検討が行なわれているのである。[④⑤]にもかかわらず、湖北の古墳時代後期の検討は未熟で、横山の後期古墳の過疎を視野に入れた研究は、ほとんどないと言って過言ではない。そこで小論においては、横山における後期群集墳の過疎の要因たるものを考えてみたい。

穴太飼込古墳群、滋賀里百穴古墳群等が存在する大津北郊には、大友村主、穴太村主等の帰化系氏族の所住が考えられているが、[⑥]彼ら帰化人は多くは工人または特定の職掌に関する専門家であり、自立化の傾向が強いところから群集墳を形づくることが一般的であると推定されている。事実、大津北郊南北5km余の範囲には 1,000墓以上の古墳が群集しており、湖北横山古墳群とは対照的である。上述の如く、横山にはせいぜい5・6基の古墳群が見られる程度であり、その墓域も分散し、大規模な群集墳も皆無であり、婦化人の貫付がなかったものと考えられる。ただ、阿那郷に穴太氏の居住が考えられるが、後年本姓を改めて志賀忌寸を賜っている者などの存在などから、大津北郊の穴太村主の一族の分枝したものと考えられ、彼らに関しては、帰化人の同一墓地の構成志向[⑦]という点から、本貫地大津北郊への帰葬が考えられる。

近江には、さらに横山古墳群と対照的な様相を示す古墳群が存する。大津堅田地区の春日曼陀羅古墳群がそれである。これらの古墳群は首長墓を核とする 100基以上の後期にまで及ぶ群集墳であり、僅かに当横山古墳群より先行するものと考えられるものの、後期古墳群としては、やはり当横山古墳群とは明瞭な質的差異を示すものである。すなわち、堅田区域の春日山・曼陀羅両古墳群は、雄族和邇氏及びその同族とその配下の部民の墓域と考えられているが、横山古墳群はこのような部の統括者とその被統括者による大古墳群という様相をも持ちあわせていないのである。

古墳時代後期には、その根拠地天野川流域内にとどまらず、湖北平野一帯をその支配下においたと考えられる息長氏は、継体天皇の出身氏族とも言われるほど、[⑧]古代皇室と密接な関係を有したが、「葛城氏、和珥氏、あるいは蘇我氏のように強大な外戚氏族として発展する道をえらばず、むしろ皇室の内部にあって、皇室氏族として存続する道をえらんだ。[⑨]」とされ、このため前三者のような自家の部曲を拡大することもしなかったし、息長部の成立も見なかったと言われる。[⑩]このような、地域政治共同体の首長たる両氏の質的差異が、上述したように、その古墳群に異質な相貌をもたらしたのではないかと考えられる。

以上のように、横山山陵には群集墳の成立を見なかったが、それでも数基単位の或は単独の古墳の分布が、山麓の集落に対応して確認され、共同体の有力家族の抬頭の反映と見られるが、この共同体の紐帯の崩壊に対して、朝廷はいち早くこれら有力家族に姓を付与し、これを抱込み、これら新興の有力家父長層の進出による共同体の変貌を最小限に押しとどめたのであった。

（別所健二）

註

① 『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書Ⅱ』（滋賀県教育委員会）

② 岡田精司「継体天皇の出自とその背景」（『日本史研究』128号）

③ 塚口義信「大帯日売考」（『日本書紀研究』第5冊）
蘭田香融「皇祖大兄御名入部について」（『日本書紀研究』第3冊）

④ 水野正好「滋賀群所在の漢人系帰化氏族とその墓制」（『滋賀県文化財調査報告書第4冊』滋賀県教育委員会）

⑤ 丸山竜平「近江邇氏の考古学的研究」（『日本史論叢』第4輯）

⑥ 註④と同じ

⑦ 森浩一「群集墳と古墳の終末」（岩波講座『日本歴史』2）

⑧ 註②と同じ

⑨ 註③の蘭田論文

⑩ 註③の蘭田論文

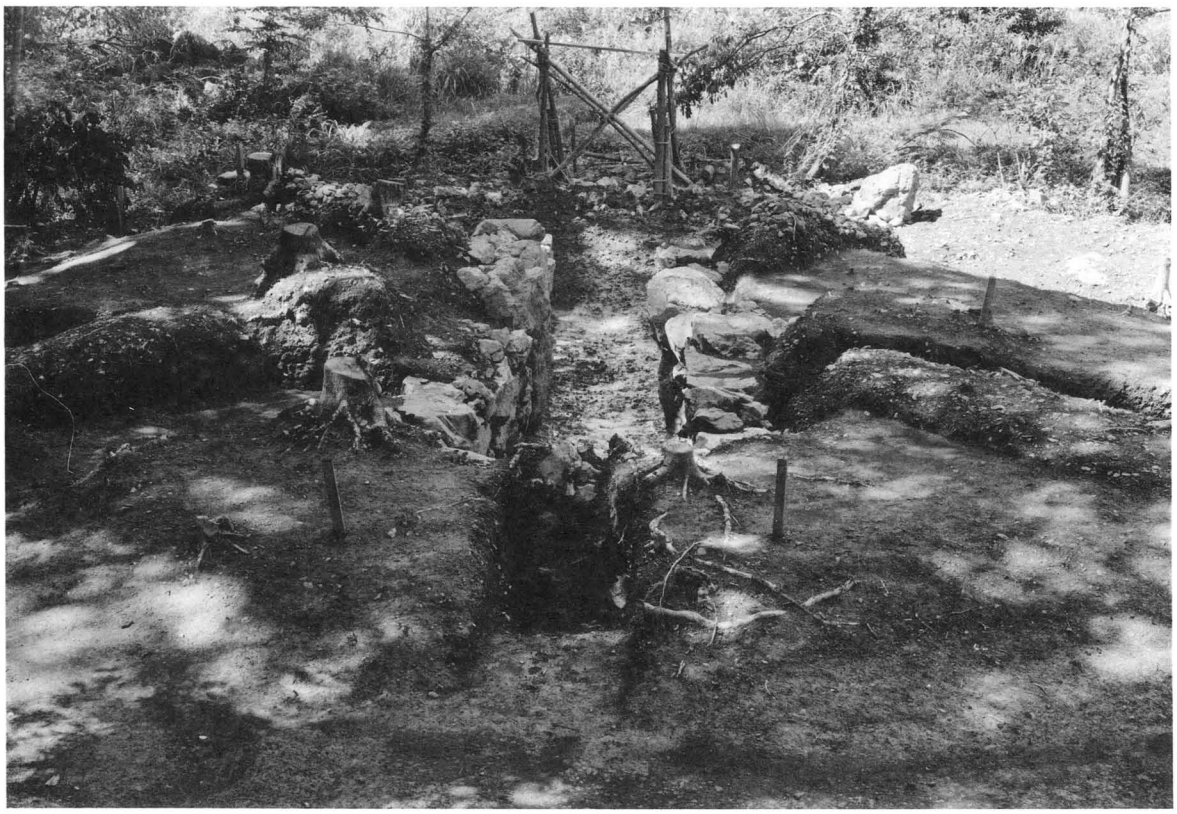
図版一　黄牛塚古墳（遺構）

1　古墳全景（発掘前　東より）

2　古墳全景（発掘後　西より）

図版二　黄牛塚古墳（遺構）

1　石室全景（西より）



2　古墳全景（東より）

1　石室全景（東より）

2　閉塞石遺存状態（東より）

図版四　黄牛塚古墳（遺構）

1　玄　室　奥　壁

2　玄　室　東南コーナー

1　玄　　室　北東コーナー

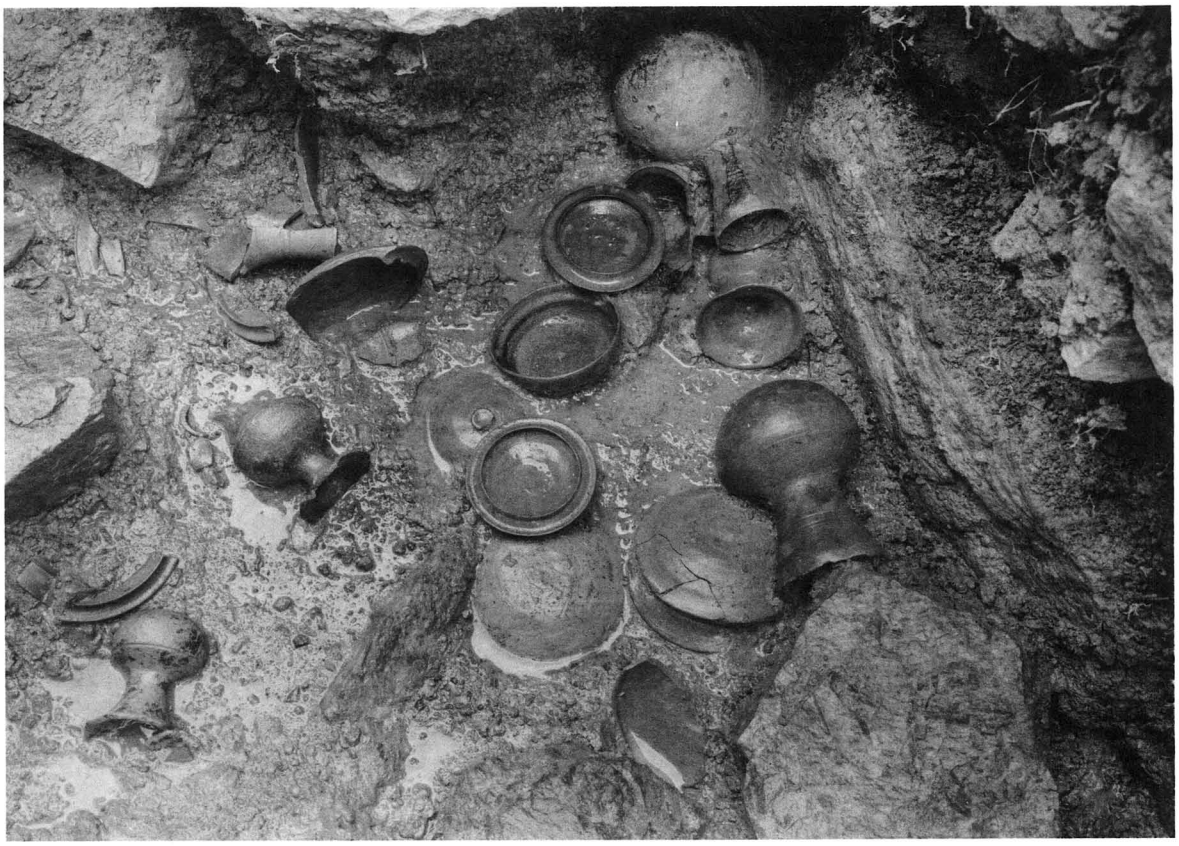
2　羨道入口南側列石

1　玄室内遺物出土状態

2　玄室内遺物出土状態（東より）

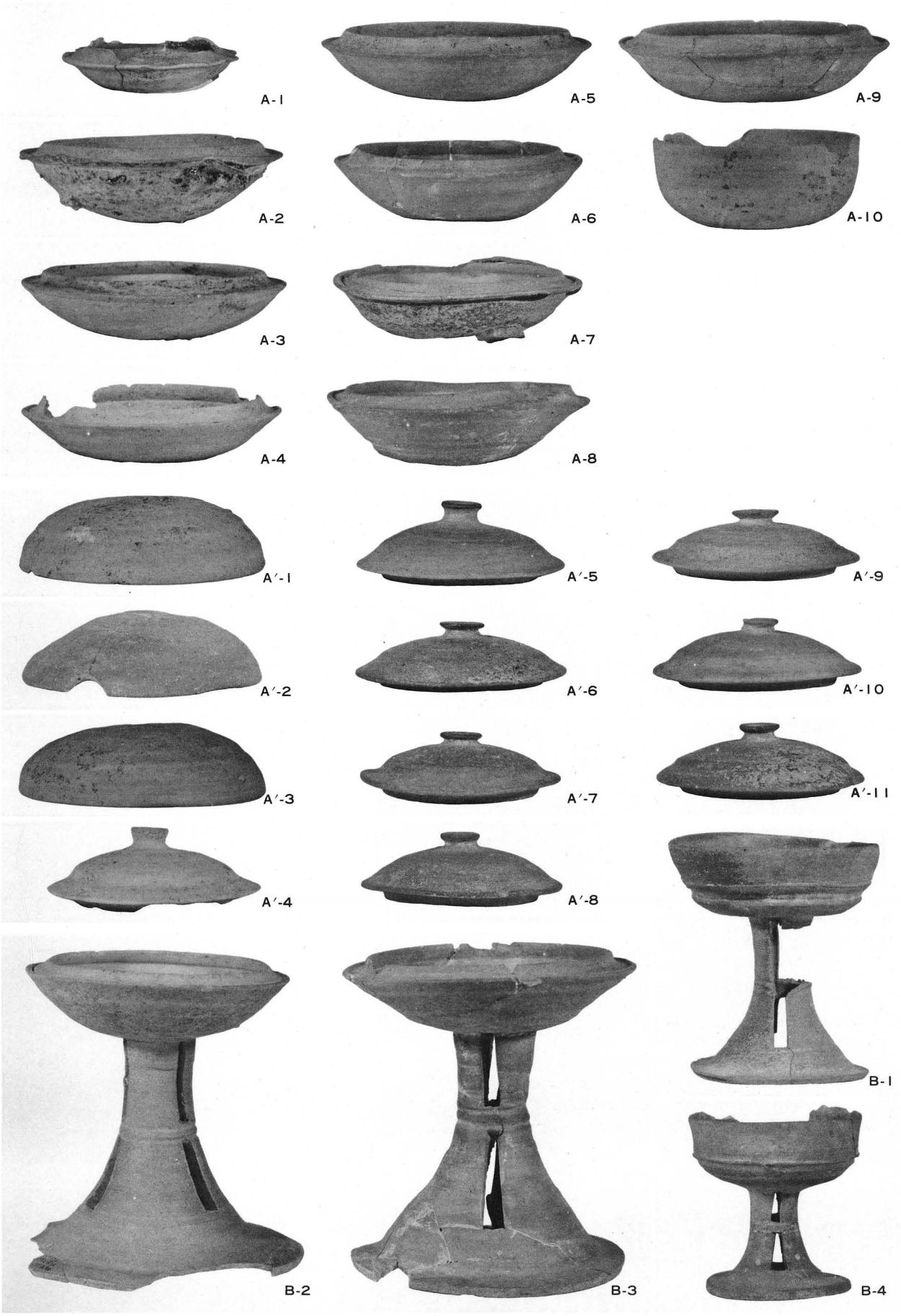
1　玄室内遺物出土状態

2　玄室内遺物出土状態



1　玄室内遺物出土状態

2　玄室内遺物出土状態

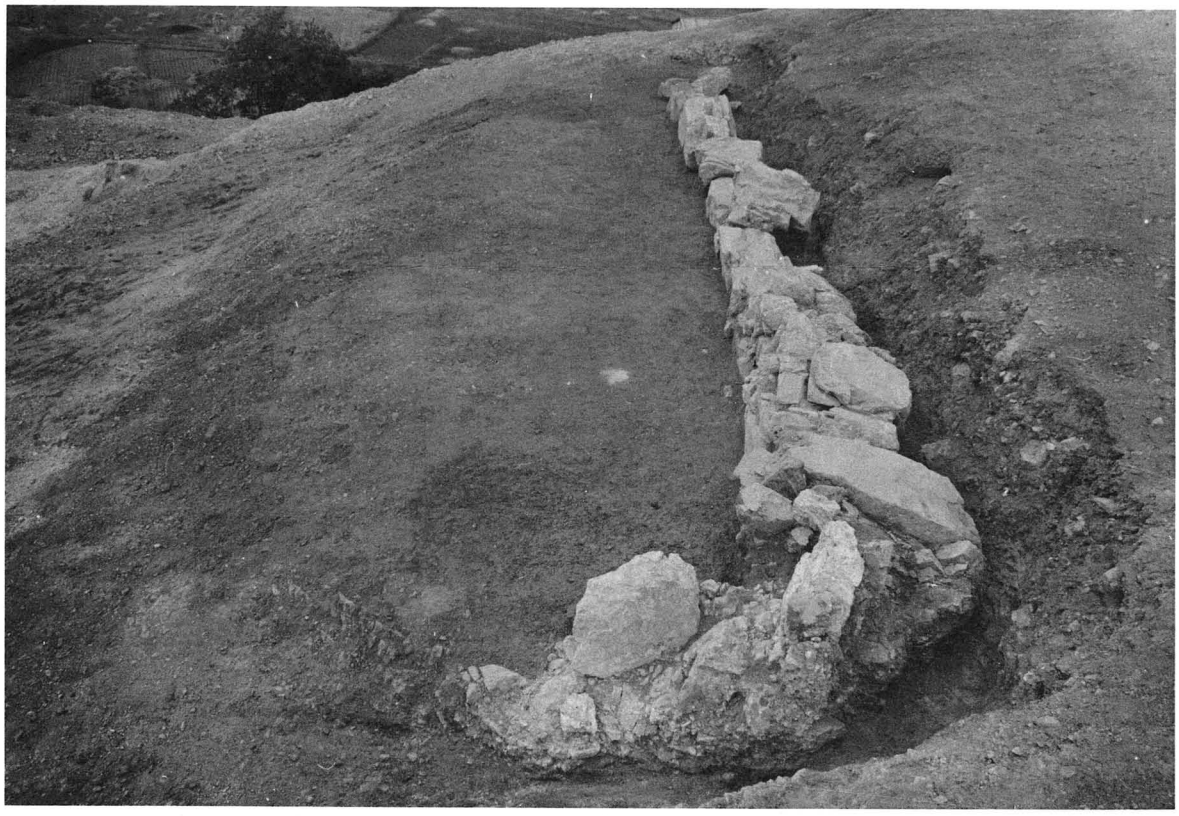


黄牛塚古墳出土遺物(1)（番号は挿図番号）

黄牛塚古墳出土遺物(2)（番号は挿図番号）

1　古墳全景(発掘前，東より)

2　古墳全景(発掘後，東より)



1　石室全景(東より)

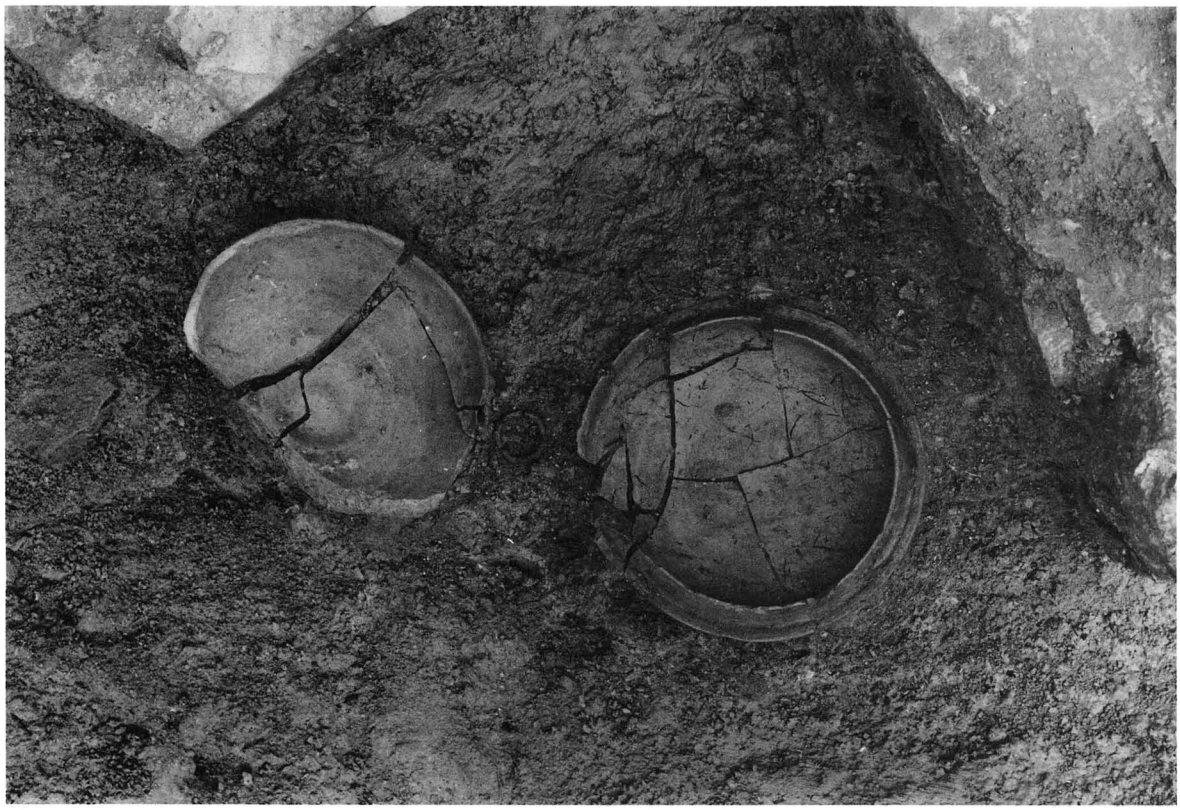
2　石室全景(南より)

1　石室側壁(1)

2　石室側壁(2)

1　石室側壁(3)

2　石室側壁(4)

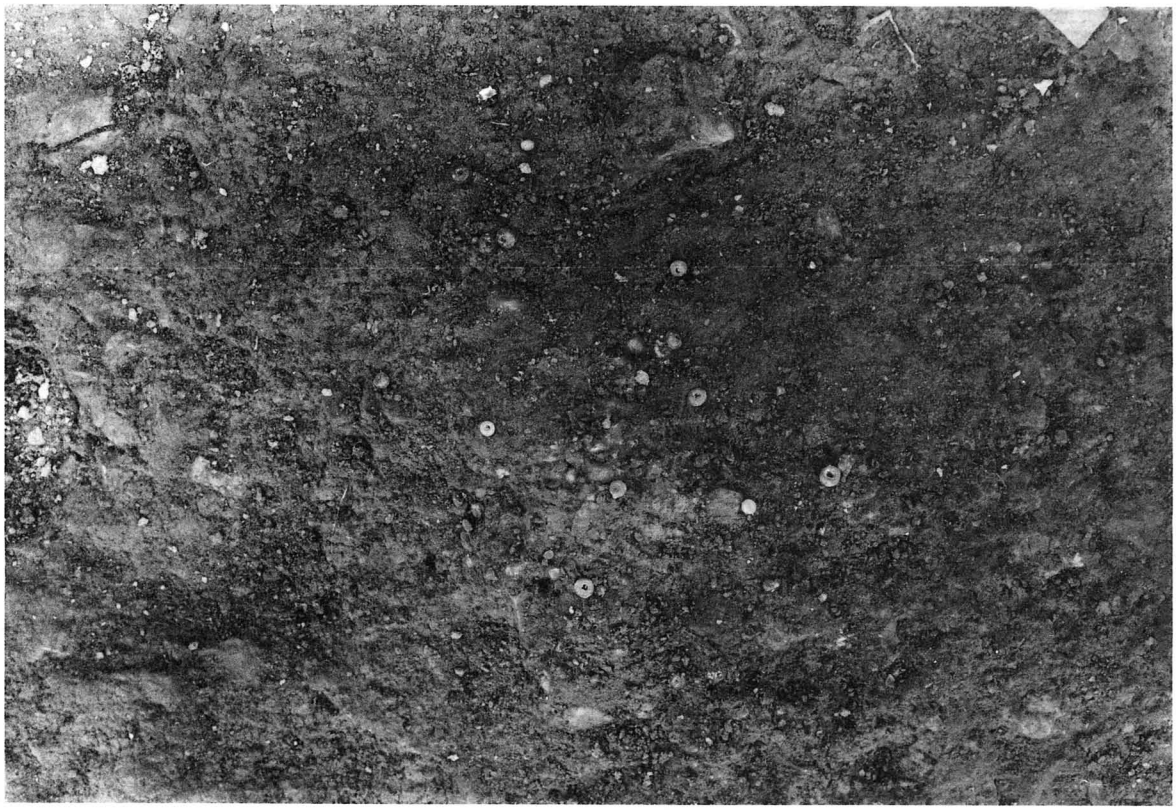


1　遺物出土状態(杯身・蓋・鉄環)

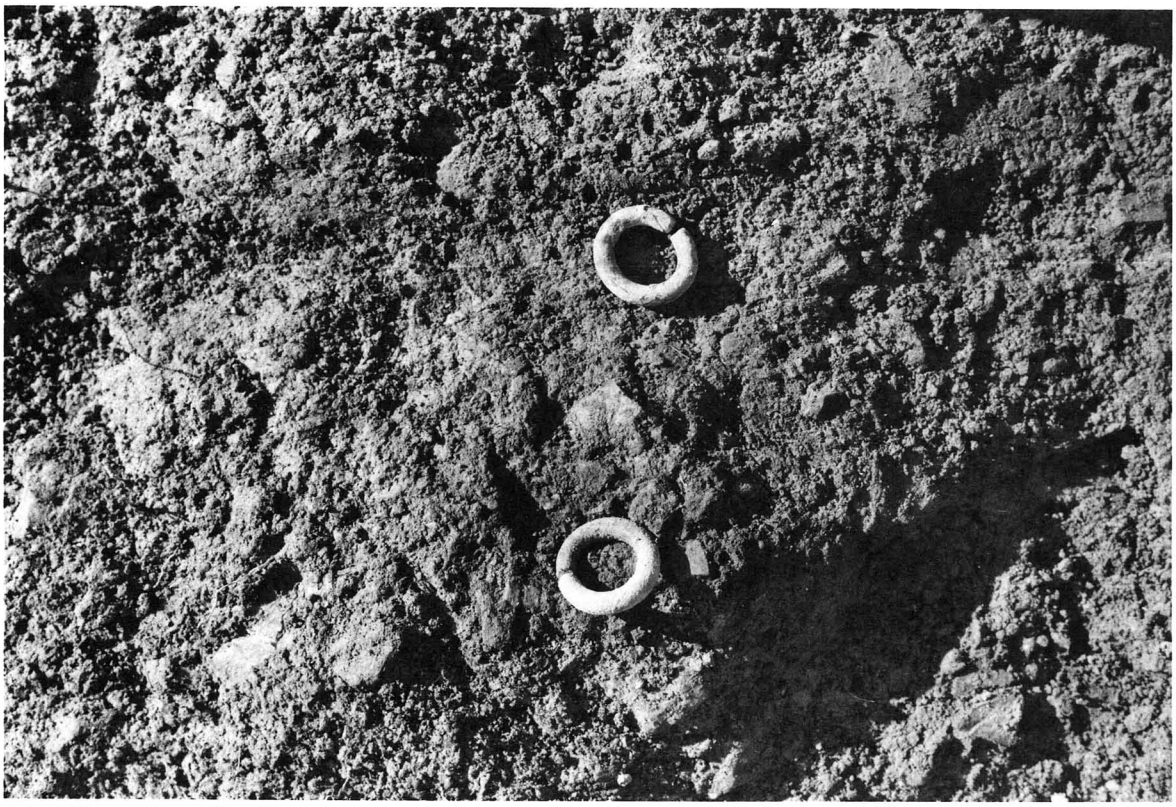
2　遺物出土状態(杯)

1　遺物出土状態（杯）

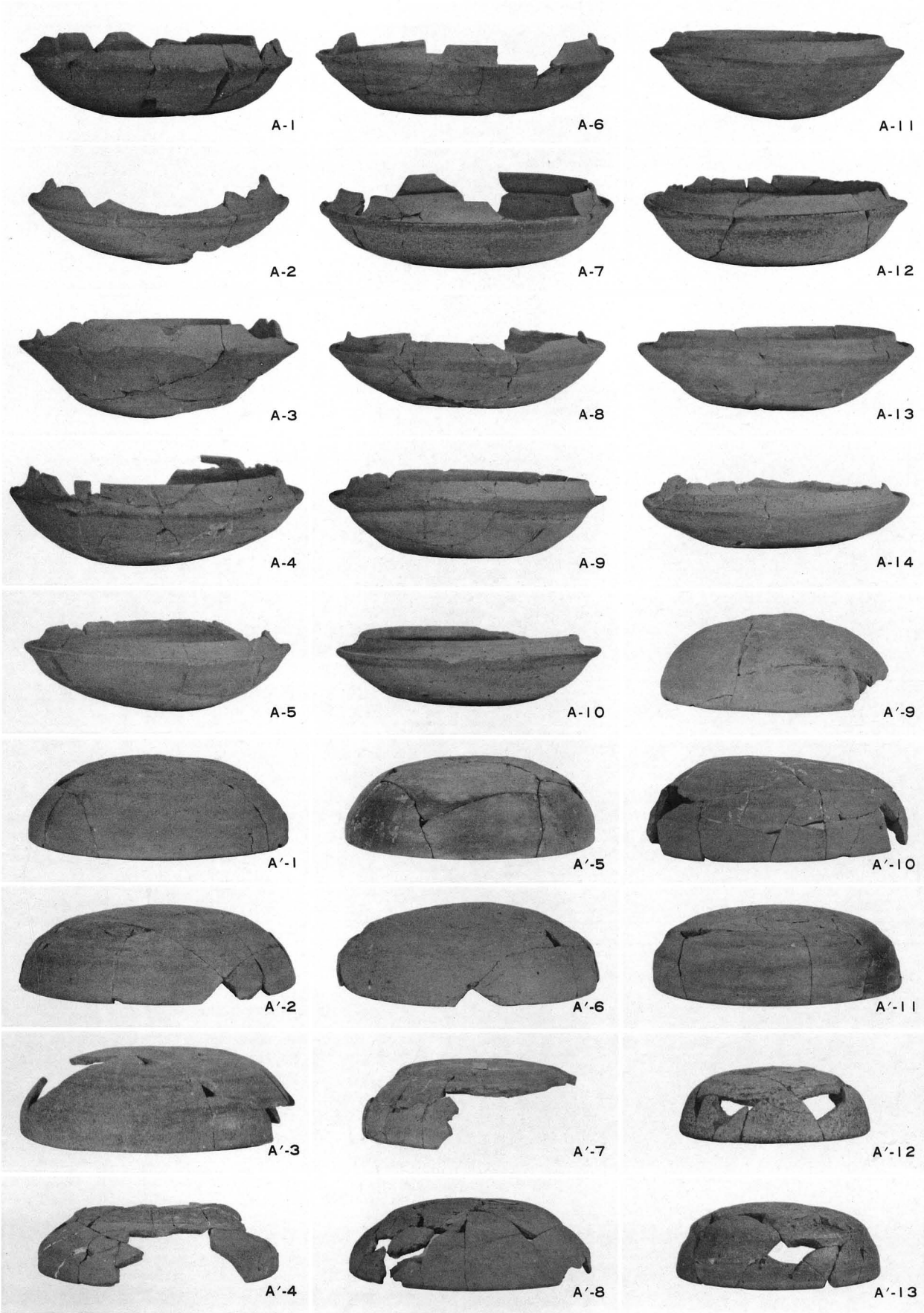
2　遺物出土状態（杯・壺）



1　遺物出土状態(玉類)

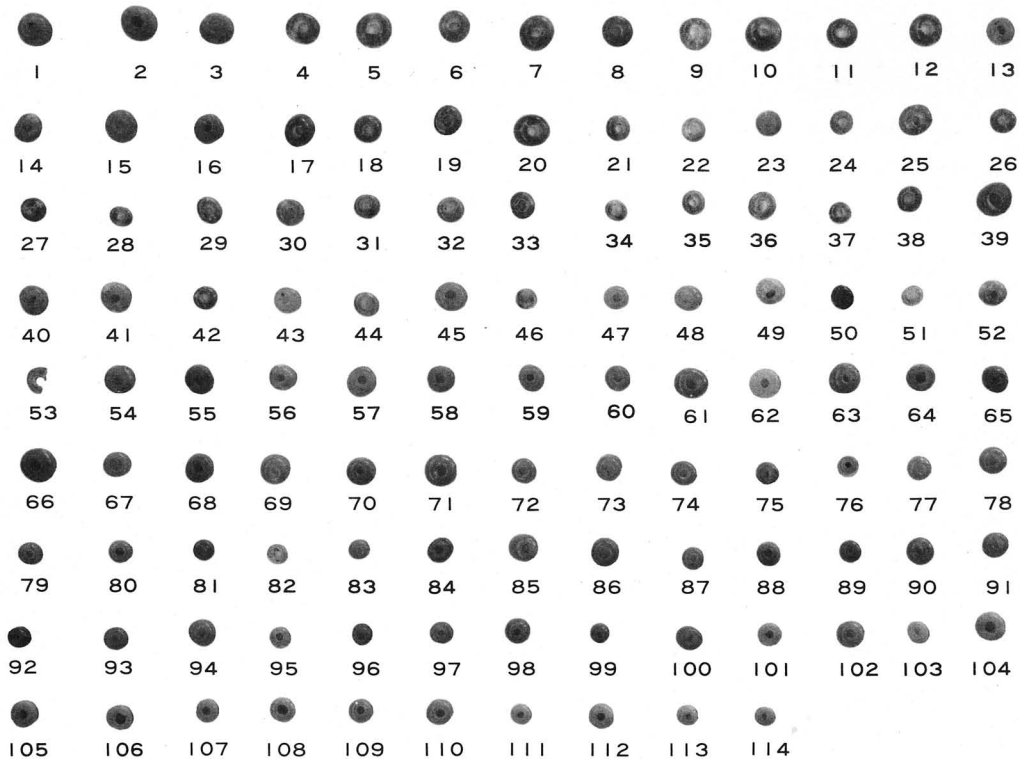


2　遺物出土状態(金環)

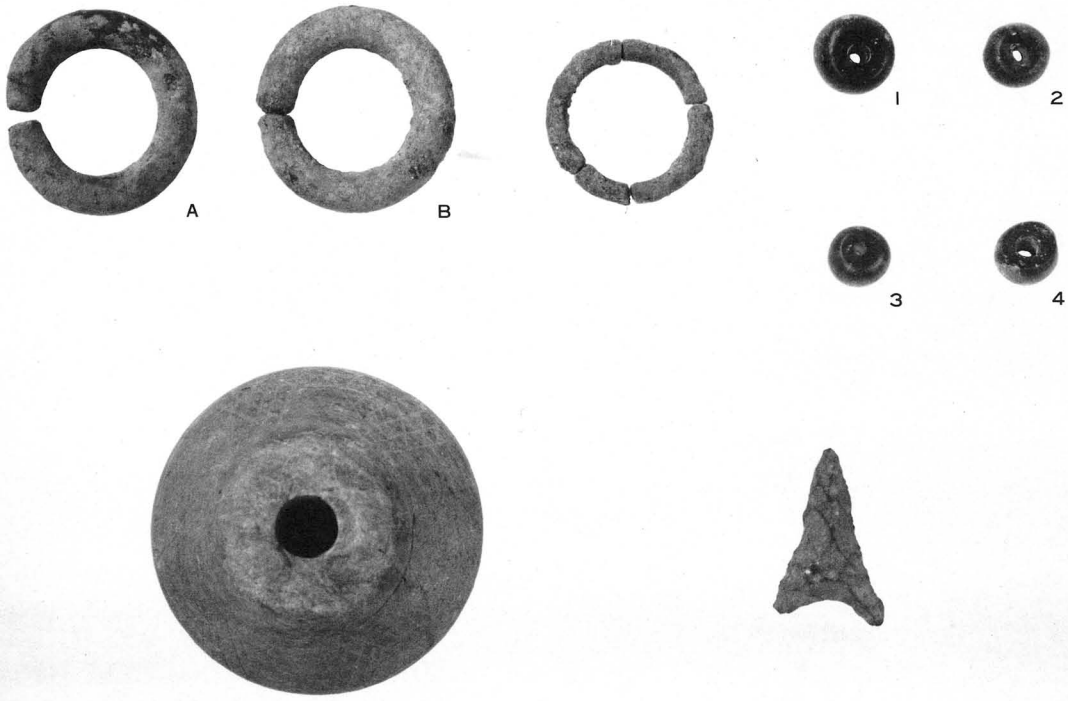


須恵器杯身・蓋（番号は挿図番号）

須恵器　高杯・壺・甕・提瓶（番号は挿図番号）



1　玉　類



2　金環・鉄環・玉類・紡錘車・石鏃（番号は挿図番号）

1　古墳群遠景（北より）

2　1号－2号墳全景（東より）

1　1号墳全景(南より)

2　1号墳全景(東より)

1　1号墳全景(発掘後，南より)

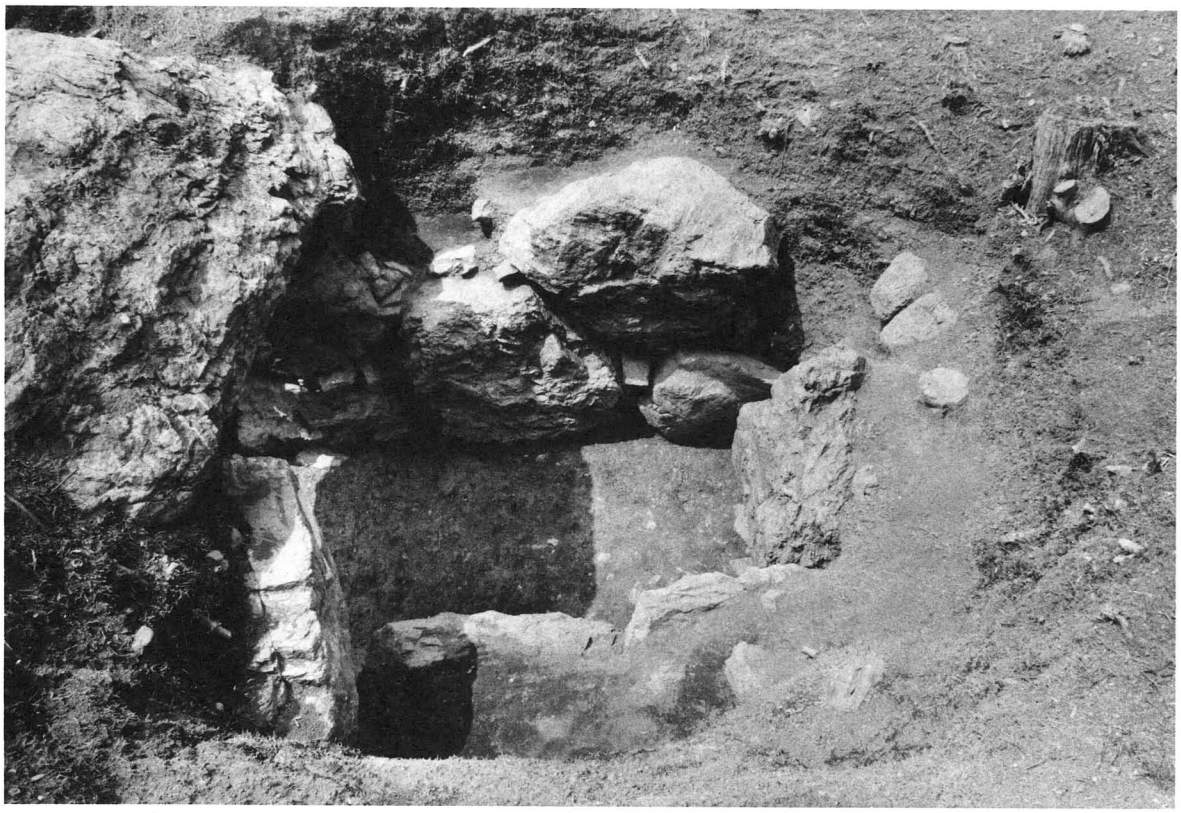
2　1号墳石室全景(南より)

1　1号墳石室全景（南西より）

2　1号墳石室全景（南東より）

1　1号墳石室近景（南より）

2　1号墳石室近景（北より）



1　1号墳玄室（東より）

2　1号墳玄室（西より）

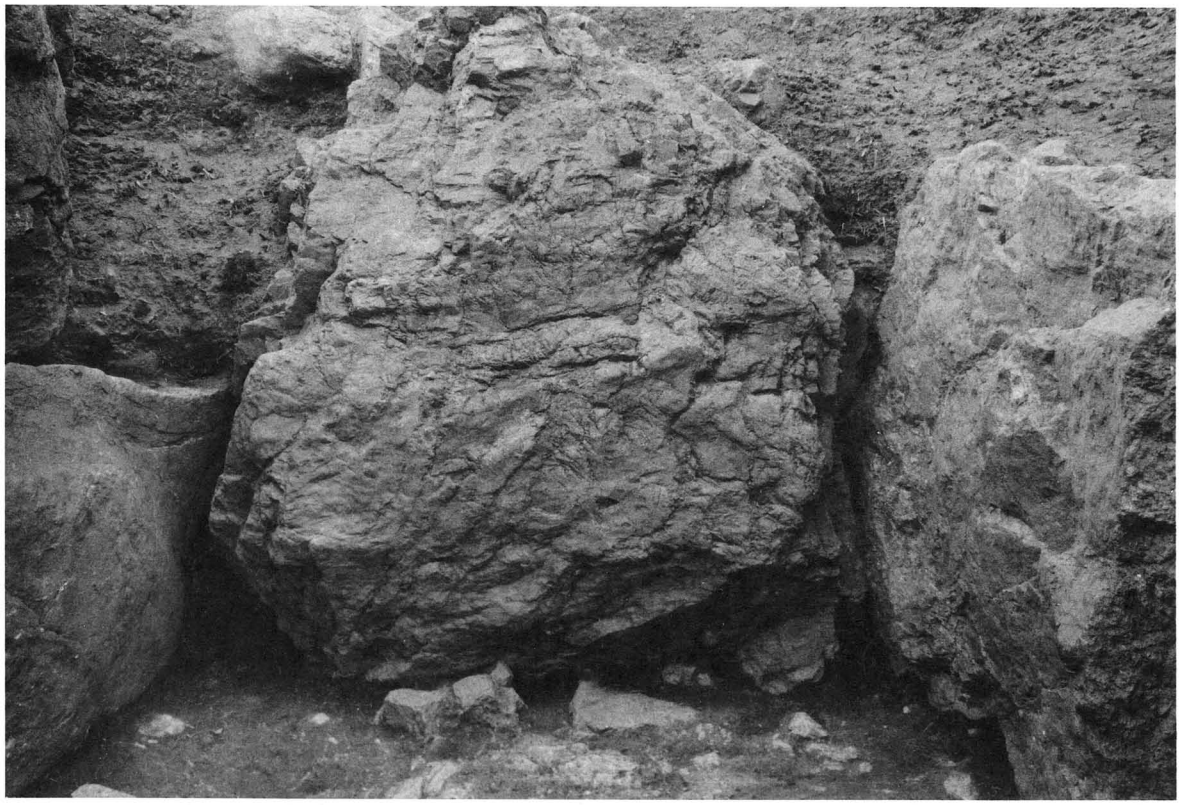
1　1号墳玄室(南より)

2　1号墳羨道(北より)

1　1号墳羨道（東より）

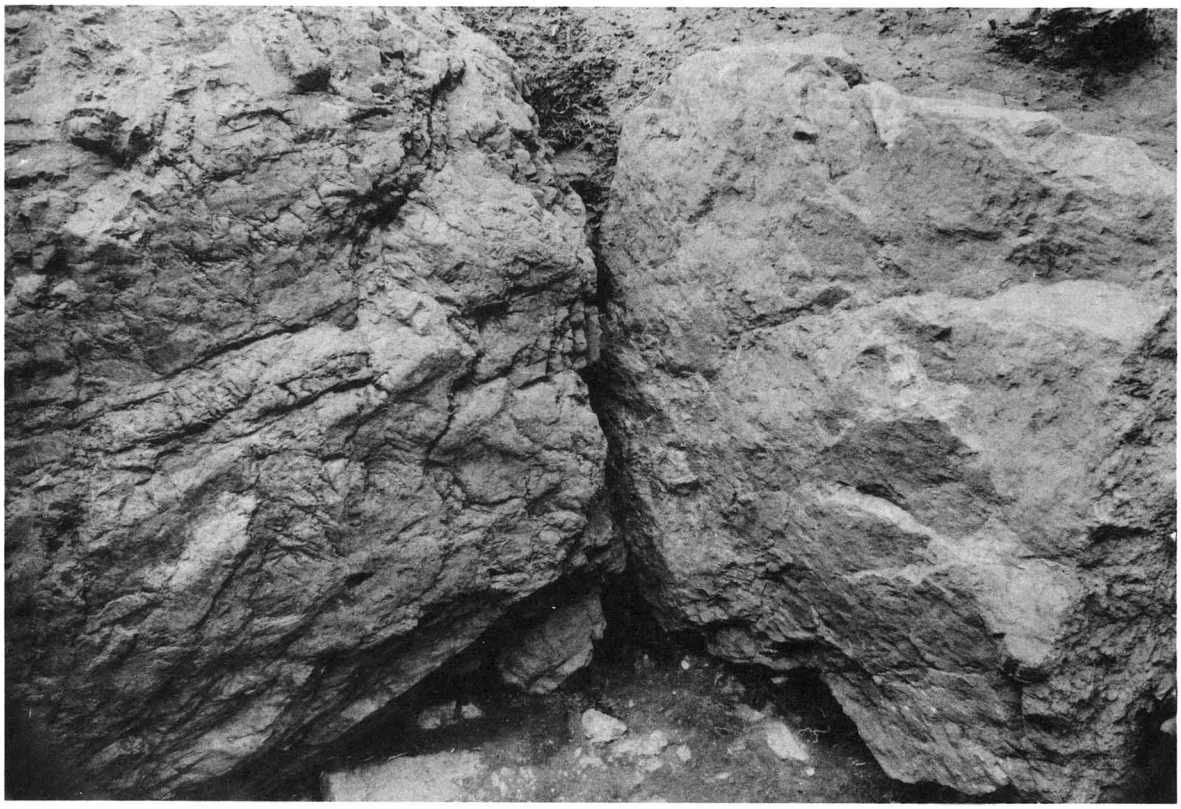
2　1号墳羨道（北より）

1　1号墳玄室奥壁



2　1号墳玄室奥壁近景

1　1号墳玄室北西コーナー

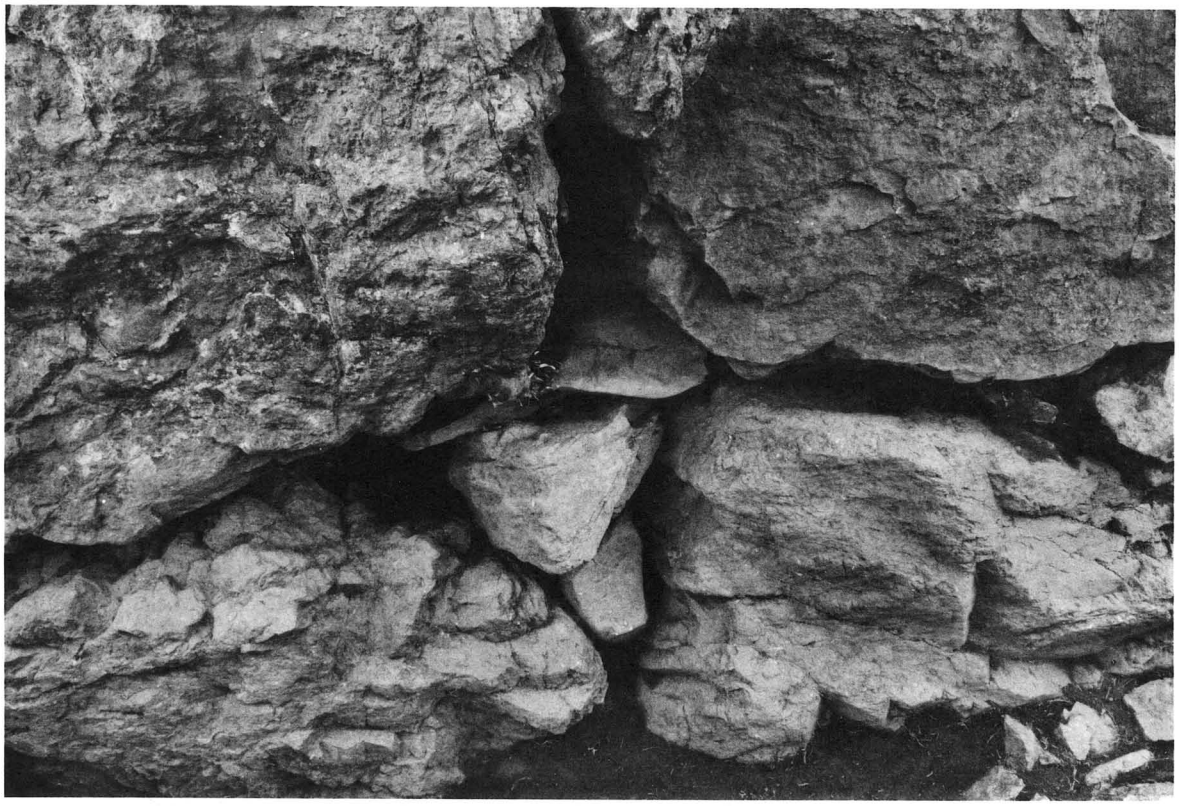


2　1号墳玄室北東コーナー

1　1号墳玄室東壁北半部

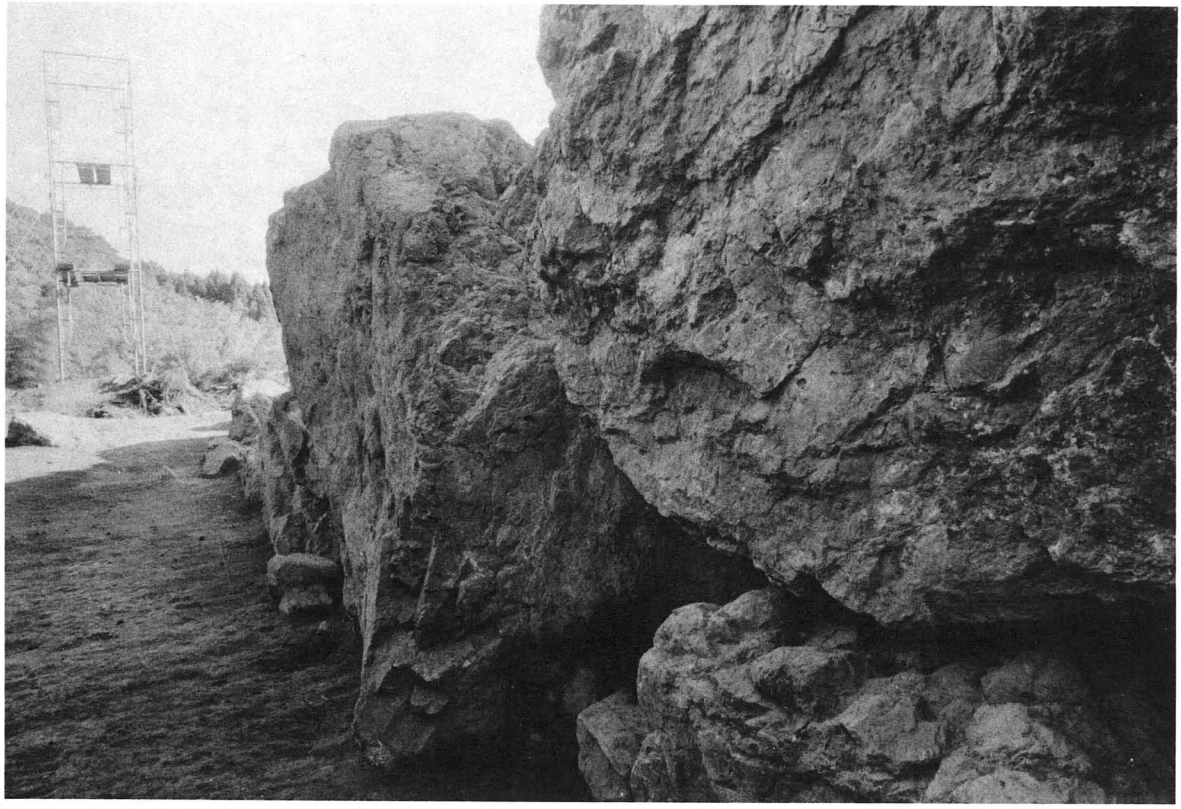
2　1号墳玄室東壁南半部

1　1号墳玄室西壁北半部



2　1号墳玄室西壁南半部

1　1号墳羨道東壁

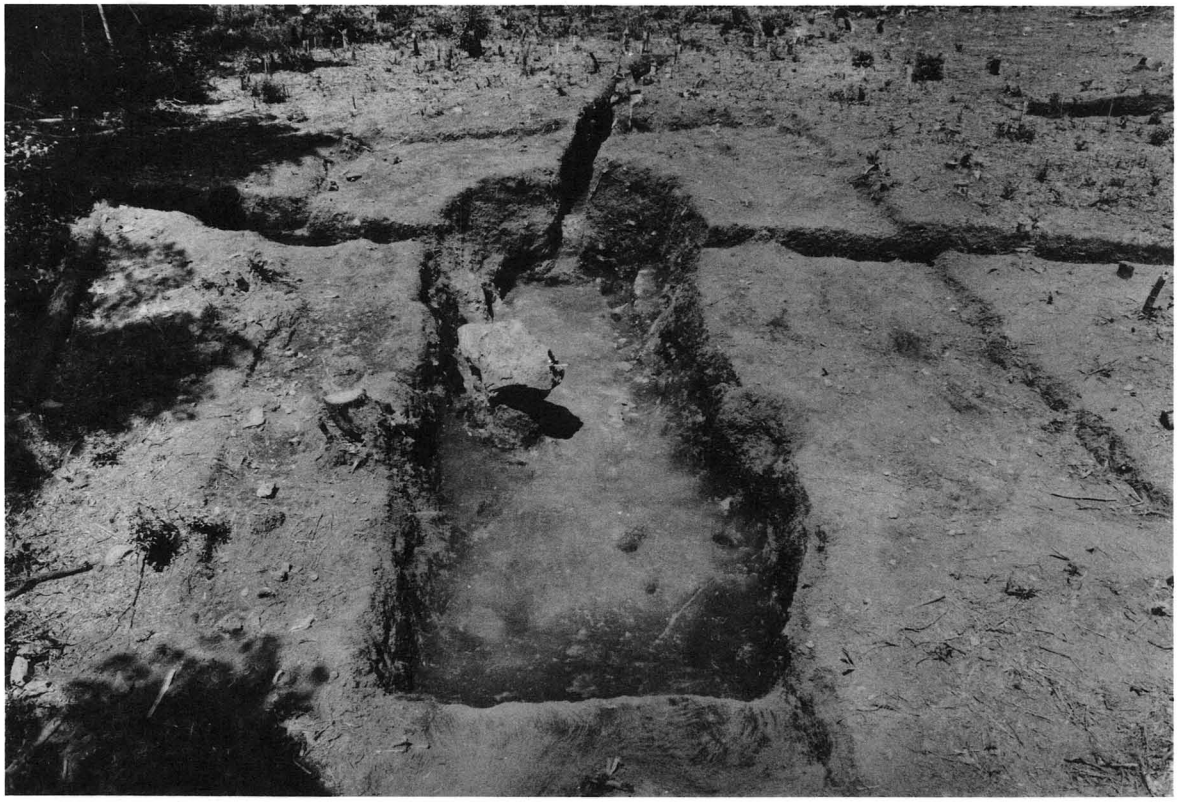


2　1号墳羨道西壁

1　1号墳遺物出土状態

2　1号墳遺物出土状態

1　２号墳全景（発掘前，南より）

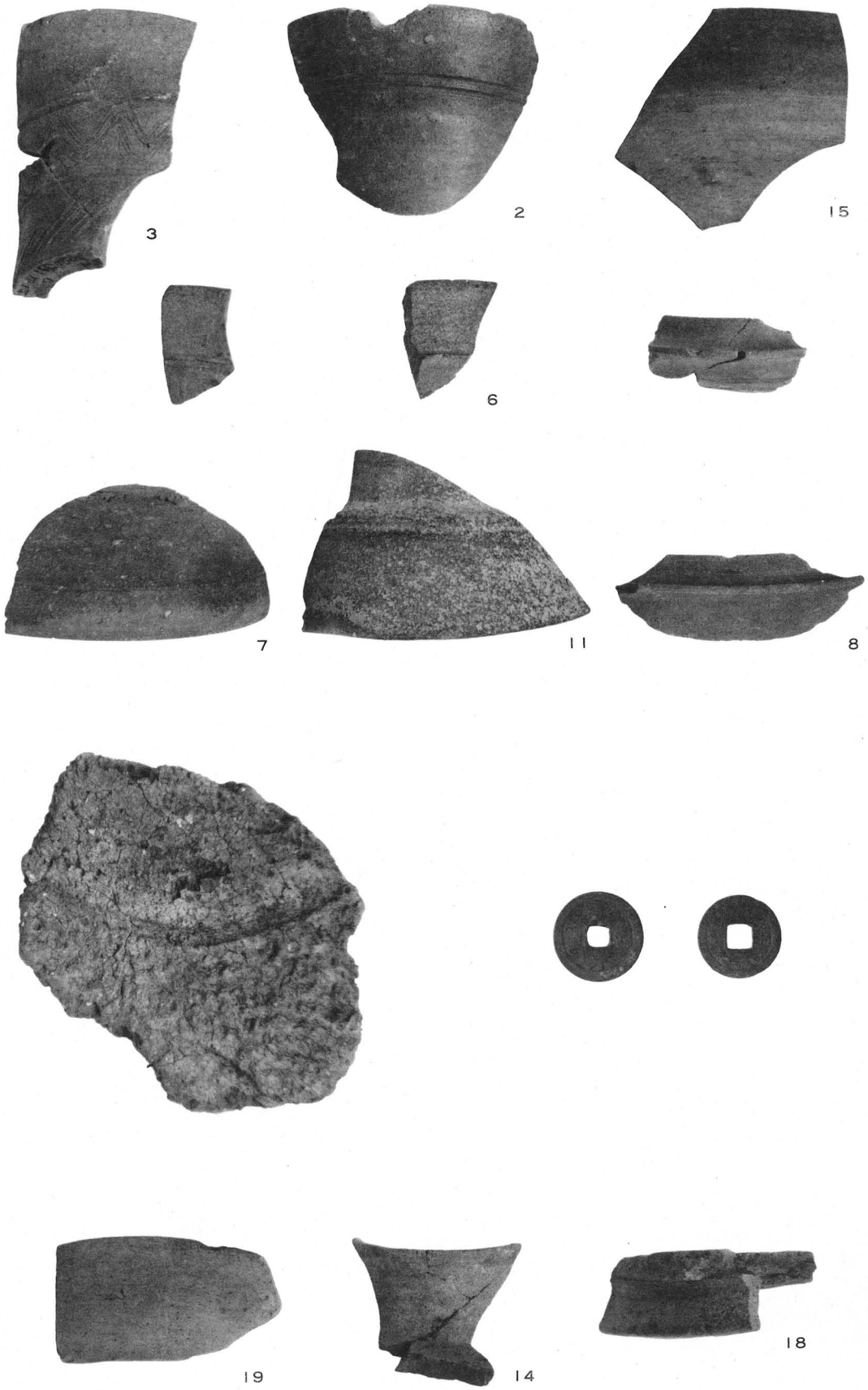


2　２号墳全景（発掘後，南より）

1　２号墳石室全景（南より）

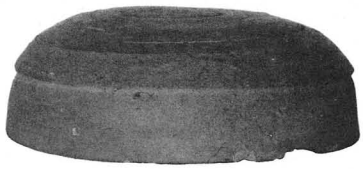
2　２号墳玄室石材抜取り状態（南より）

1号墳出土遺物（約3分の1，ただし7・8は実大）（No.は挿図21と同じ）



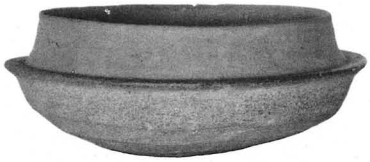
1号・2号墳出土遺物（約3分の1，ただし2は実大）
（1　1号墳，2.3　1号墳封土内，4　2号墳）（No.は挿図21と同じ）

図版三九　上ノ山古墳群周辺遺跡出土遺物



5

4



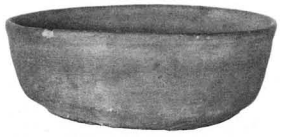
6

3

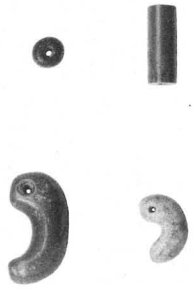
8

7

1

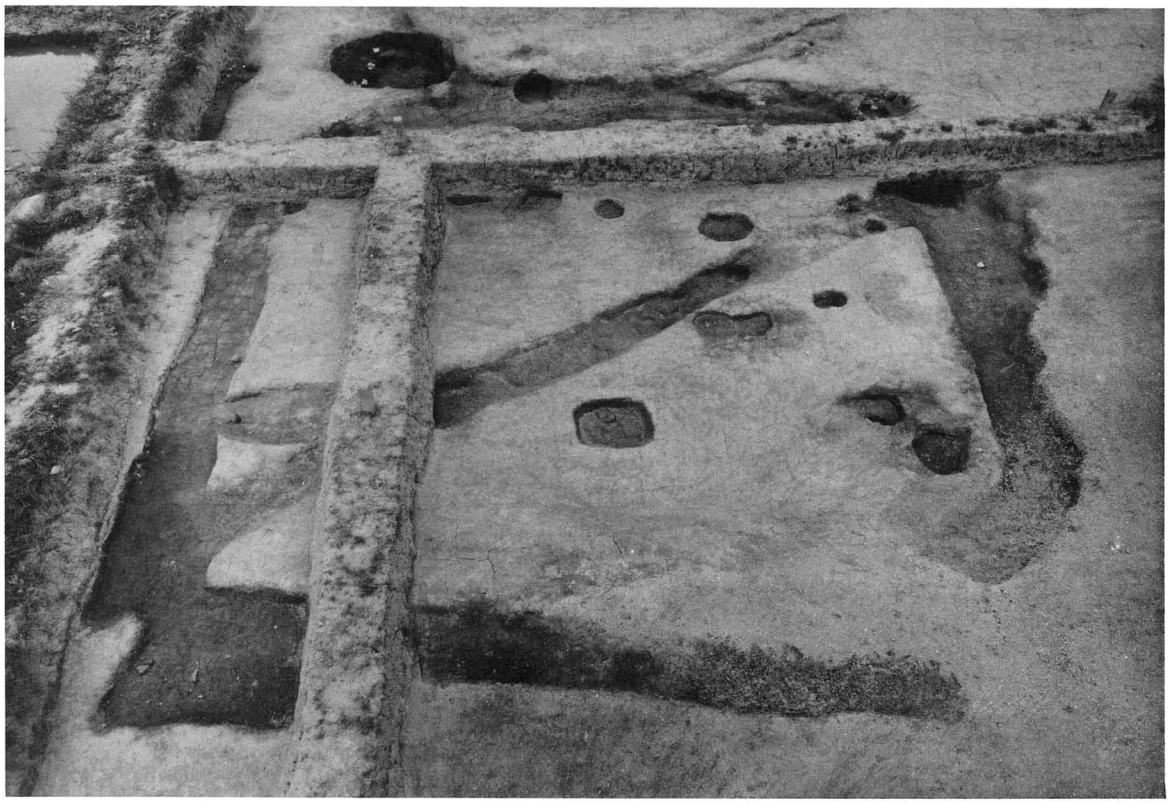


2

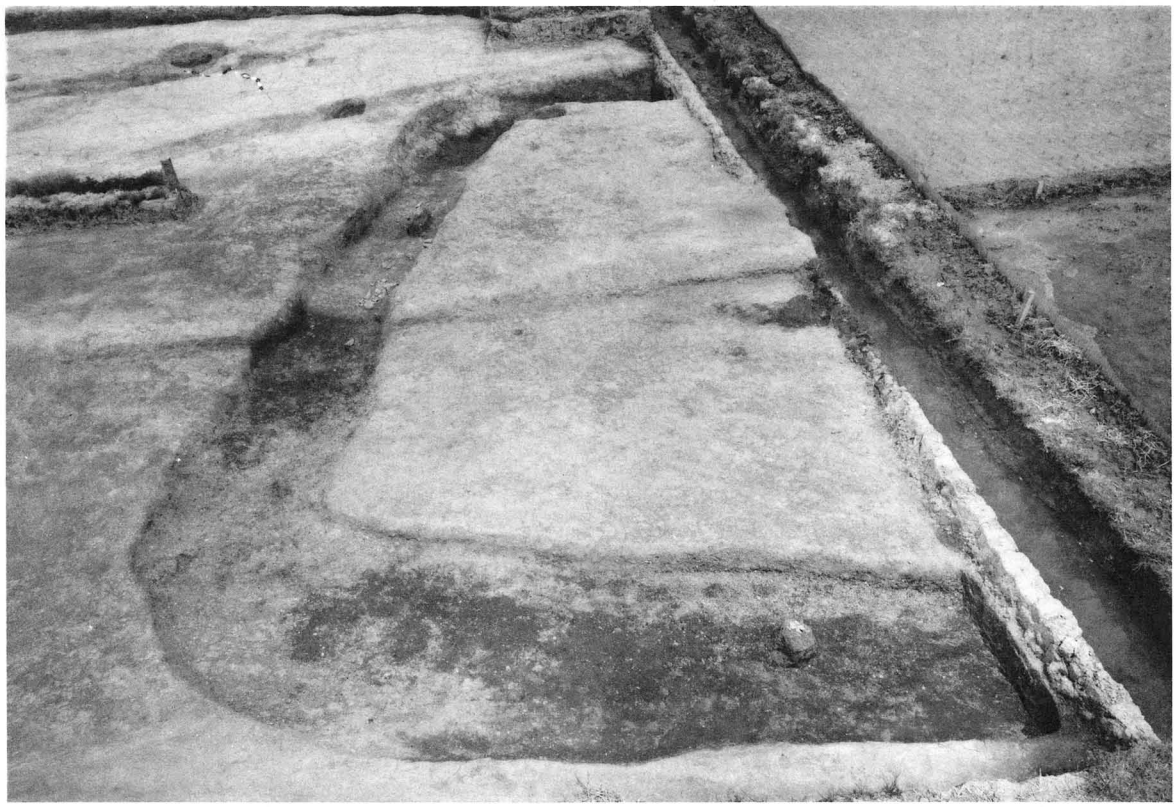


(No.は挿図25と同じ)

1　1号・2号方形周溝墓

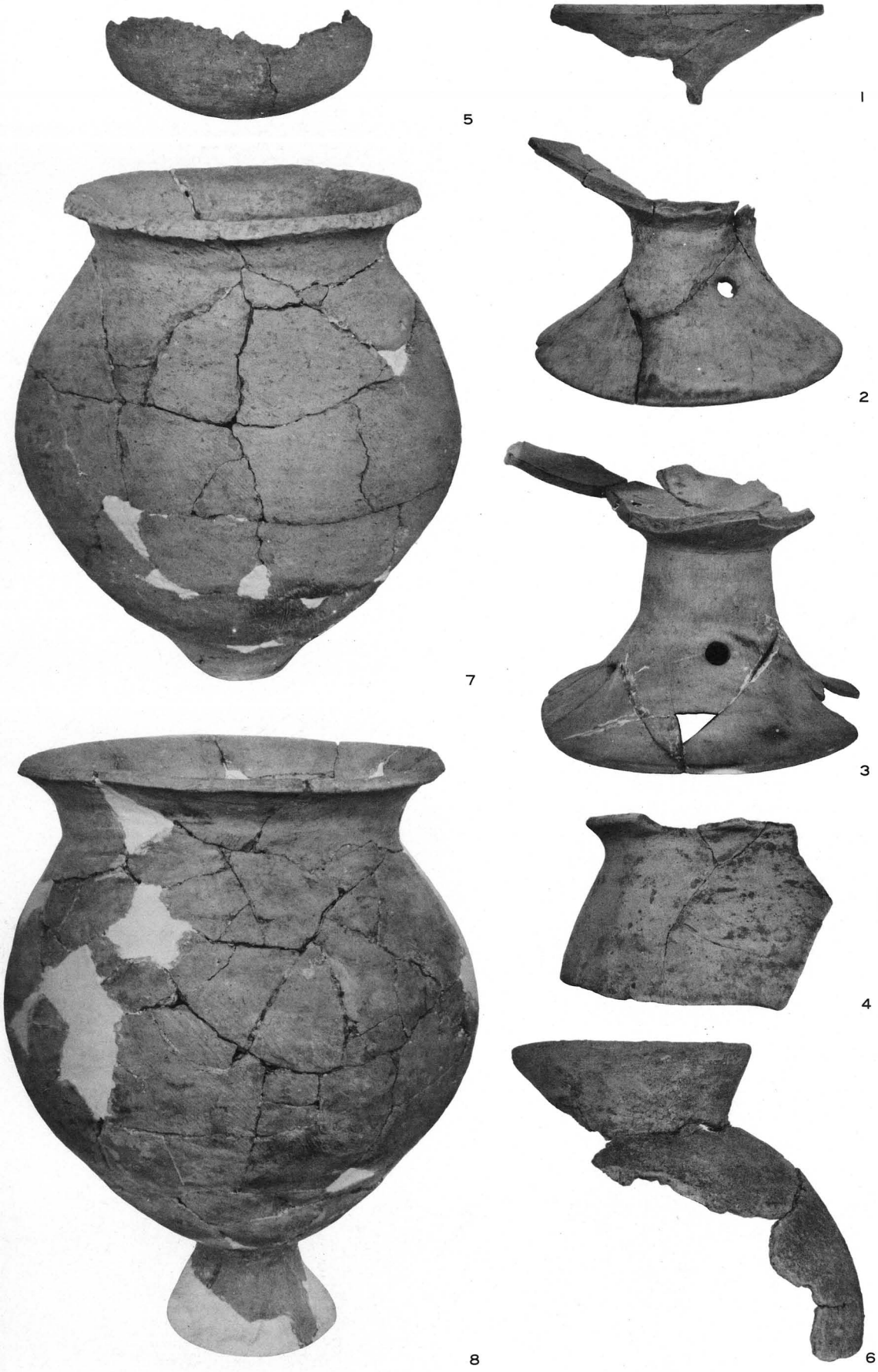


2　2号方形周溝墓(HSI)



1　2号方形周溝墓(HS Ⅱ)

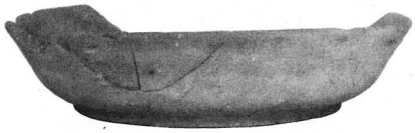
2　T 6柱穴内礎板出土状態



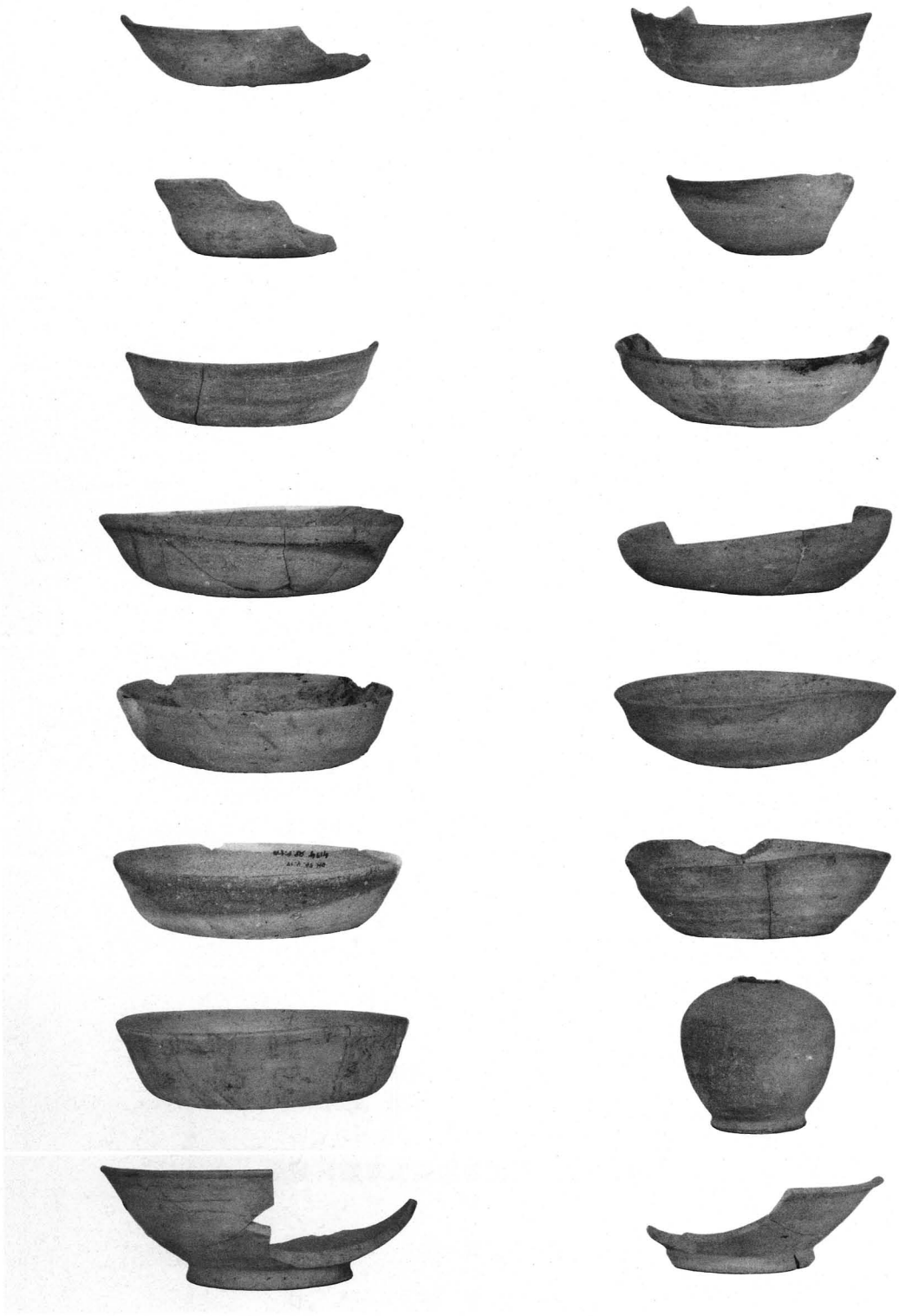
２号方形周溝墓出土遺物（約３分の１）（番号は挿図27と同じ）

2

1



1号方形周溝墓及びその他出土遺物（挿図28）



その他出土遺物

昭和51年２月５日 1976 印刷
昭和51年２月10日 発行

北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告 Ⅲ

編　集　滋賀県教育委員会

発　行　滋賀県教育委員会
財団法人　滋賀県文化財保護協会

印刷製本　有限会社　真陽社
京都市下京区油小路仏光寺上ル
ＴＥＬ３５１－６０３４番

1420